
ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった...

伊藤ナノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった…

【Nコード】

N4313Y

【作者名】

伊藤ナノ

【あらすじ】

ゴブリンシャーマンに召喚されてしまった。それもRTSリアルタイムストラテジーのキャラだった。なぜかダークエルフになってしまった主人公。

基本は1人称です。設定は自分でも謎です。練習作です、生暖かい目で見てください。

それと、キーワードにロボット、未来とあるのは間違いではありません。

2章が終了しました。3章からロボット、未来の世界になります。

（主人公はやがてチートになっていきます。チート主人公が苦手な場合はご注意ください。

プロローグ

自分の名は真田誠司。36才。

廃人生産工場と呼ばれる携帯系IT企業に務めていたが、自分はこの年で廃人になりかかった。

廃人というと具体的には痛む、頭痛やら上半身がいろいろ痛む。ストレス過剰による神経系の病気だった。

そのため、会社を長期休暇していた。

趣味は元空手、30才までやっていた。それからはウィンドサーフィン、クライミングが好きになった。

典型的なアウトドア派だ。

ただ、廃人生活でRTSをやるようになった。スポーツができなくなったからだ。

RTSというリアルタイムストラテジーゲームだ。

古代文明から始まり農民により資源を採取して中世、近代文明へとレベルアップし、文明同士をぶつけ合う対戦ゲームだ。

自分は呪術師のいる文明が好きだった。

呪術師の能力は、農民の資源採取速度アップ、農民・兵の生産速度アップ、兵のHP回復、そして敵を味方に変えてしまう能力だ。

呪術師により敵より早く資源を採取し、敵より早く文明をレベルア

ツプし、敵より多く兵を生産し、敵より有利に戦うのだ。

呪術師がいる方は、マヤ、アステカ、エジプトなどの文明。

呪術師がいない方は、ヨーロッパなどの文明だ。

RTSの説明は以上になる。

人生に挫折し、病院に向かう途中で駅のホームで線路に落ちる女性を見た。

女性を助けたはいいが、自分は助からないようだった。

いまから避難用の穴に潜り込む時間がない。目の前にはもう電車が来ていた。

電車に轢かれて死ぬ運命だとそのとき諦めた。

そのとき、なにやら眩しい光に包まれた。

そして、なにやら薄暗いところにいる。俺の目の前にはいわゆるゴブリン。足元の魔方陣が光っている…。

いわゆる魔方陣の真ん中にいるってことは、これは召喚術？

ありえないと思うが、ゴブリンシャーマンの召喚によりここに呼び出されたようだ。

ただ、俺が呪術師だということだけなぜか理解していた。そう、RTSの呪術師だ。

どうやらここは洞窟らしい。

そして、体が自然に動いた。目の前のゴブリンを蹴り倒した。体が軽い。以前より遙かに体が軽くパワフルだ！
なにより頭痛がしない！廃人からの復活をとげた！

ゴブリンの首がへし折れる音がしたが、かまわず暴れた。

ゴブリンたちは短剣や長剣をもっていたが、俺を召喚したことに驚いたらしい。

その隙に2人まで倒した。

そのうち1人が落とした短剣を拾った。

夢中で3人目を刺そうとした。相手が動き始めたがその動きが遅く感じる。

ぐさつと首に刺した。一撃だ。

最後に残ったのはゴブリンシャーマンだけになった。そして、なにやら唱えているようだ。

火を吹いた！。驚いた、まじでファンタジーのようだ。火を避けたが、肩を掠めた。

まじで痛い（涙）。

短剣を持って襲いかかろうとしたが、呪術師の能力を使えとなぜだか思った。

そして、杖を持っている右手を掴んでゴブリンシャーマンを地面に叩きのめした。

呪術師の能力を使った。

それは相手の意識を奪って操る力だった。ゴブリンシャーマンの意識を奪った。

落ち着いたところで探知を発動した。

探知とは、全体回復や全体強化（筋力や俊敏さを強化する）を行うために味方全員を全て探知してから発動する。

そういう機能だ。

有効範囲がかなり広いため、周囲の敵を探知することもできる。

死角でも半径100mくらいなら探知できるため、便利な能力だ。

どうやら敵が複数はあるがまだかなり距離がある。

100mくらいといったところか。死角になっているのでしばらくは大丈夫だろう。

意識を奪うこともできるが、今の所、同時に意識を奪っておけるのは3人くらいが限界のようだ。

それに意識を奪うのに時間がかかるのが痛い。それを一人づつやらないといけないので微妙な能力だ。

まずは、自分に全体回復だ。傷がみるみる治っていく。おおおおおおおお、感動した！

後は、このゴブリンシャーマンから情報をいただけるかどうかだ。ゴブリン語は知らんし、試しに意思で念話のようなものができるか試してみよう。

とりあえず、洞窟から出ることが最優先だ。

今の位置を聞いてみると、中階層の最上部らしい。低階層が上にある。そうすると、出口は上だろう。階段の位置も確かめた。そこから先は知らないらしい。今一、使えないなコイツ。

長剣と短剣を持って、ゴブリンシャーマンを連れていくことにする。そこで違和感に気づいた。

そう、以前の体とは違うのだ。背も高くなってる。なんか、やけに肌が黒い……。嫌な予感しかない。

体を眺めてみると人間っぽいのは確かだ。

服は以前のままだ。顔を触ってみた。

なんか人間っぽいけど、耳が変だ。とんがってるやん；。

猫耳とかそんなんじゃない。ふさふさしてないし、そうエルフっぽいとんがり具合。

……ダークエルフ？

いやいや、この世界の人はみんな耳がとんがっていて肌がインド人みたいなのもしれん。

とりあえず、ここを出てから考えてみよう。

探知を発動しながらゴブリンシャーマンを連れて階段をあがっていた。

階段へ向かう方向には敵はいなかった。

ここが低階層というところらしい。
なんか景色が暗視カメラっぽい。この目は赤外線にも対応してたりするのかな。

それより、この階に敵がいる。探知によるとまたゴブリンっぽい。
3匹いる、とりあえず1匹を支配してから残り2匹を襲わせよう。

1番後ろのやつを意識を奪う。

どうやら知力の差によって意識を奪う時間が違うらしい。差が大きいほど簡単に奪えるが、逆に自分より知力が高いと無理っぽい。お馬鹿なのかさくつと奪えた。後ろから前の2匹を攻撃したところ、うまくいったようだ。

出口を目指して歩いていると大トカゲみたいなのがいた。
知力が低すぎると探知できないようだ。いきなり襲いかかってきた。
長剣で牽制しながらゴブリンシャーマンにファイヤーボールみたいな魔法を使わせた。

動きが鈍くなったのでトドメを刺した。

なんだか戦闘を繰り返してたら、だんだんと倒すコツが分かってきた。
た。

そして、階段が見えた。また階段かよ！と内心想ったけど、探知と意識を奪うのが強いのでなんとかあった。

低階層の敵は知力が低いようだ。それに中階層と違って3、4匹の少PTだけだ。

むしろ、探知が効かないスライム、角が生えたでかいウサギ、大トカゲが邪魔だ。不意打ちで襲ってくる……。

全体回復があるのでダメージはあまり気にならない。それと全体強化（筋力や俊敏さを強化する）がかなり使える。ただし、全体回復と全体強化は同時には使えない。どちらか切り替えながら進む。

全体回復があっても、やっぱり怪我するのは痛い…。

全体回復や全体強化にも魔力を消費するんだろうと思ったら、ゴブリンシューマンによると魔力を使ってるようには思えないと言っている。MP（魔力）じゃないとするとST系スタミナのかな。使ってもそんな感じがする。

RTSでも呪術師は、無限に全体回復、全体強化を使ってたのでMP系だと無理があるんだろう。

なんだか階段を上がって、やっと出口が見えてきた。

どうやら低階層は10階層あったようだ。

いらなくなったゴブリンシューマンの喉を掻き切った。

外でゴ布林連れてたらず怪しまれるし、消すしかない。

外に出て見えたのは森かと思ったら、知らない街並みだった。

第1話 呪術師

今は朝日が昇る時間のようだ。

まだ、出歩く人が少ないようなので探知を使って見つからないように物陰に隠れてしばらく観察をしていた。

まず、分かったのは普通の人間が多い。後は、虎っぽい人や狼っぽい人がたまにいる。獣人というやつだろうか。

耳がとんがってる人はいないようだ。肌が黒い人もいない…。

話してる会話を遠くから聞いていると、ドイツ語っぽいようだ。なぜドイツ？。

自分は、高校で第二外国語、大学で第一外国語がドイツ語だったので片言なら分かる程度なのでドイツ語っぽいものだと分かった。高校ではなぜかドイツ語研究会という部にも入っていた。ドイツ系の高校だったのだ。

とりあえず、会話をしてみないとなにも情報が手に入らない…。

物陰から話しやすい相手を選んでみた。

まず、冒険者っぽいのは武器をもってるのでいきなり斬りかかられるのはゴメンだ。

商人っぽい相手のほうがいいだろう。

若い男性の商人っぽい人に声をかけてみたところ、逃げられた…。周りの目がなんか痛い…。

服装か？それともやつぱりダークエルフっぽい外見か？そういえば、両手に短剣と長剣をもっていた…。

これか？いや全部だろう（ー；）。

武器をしまつて、痛い視線を浴びながら通りを進んでみるとエルフっぽい人を見つけた。ハーフエルフだろうか。若干、人間っぽい。

声をかけると最初は驚いたようだが、逃げないで会話をしてくれた。ダークエルフというのは、やはり珍しいらしい。今まで見たことないとかいつている。

町の名前が分かった。皇都というらしい。国の名前は伽盧皇国。と
うか単語が日本語じゃないか。

それでなぜドイツ語？なぞは深まるばかりだ。

中央大陸の東に位置する国だそうだ。

冒険者になりたいと思って来たと話したらギルドというものを紹介してくれるそうだ。

名前を聞いたら、風霧明日香というらしい。女の子だ。

ハーフエルフなのになぜ日本名？となぞは増えるが無視することに
した。

冒険者ギルドに入るとやはり痛い目で見られている…。

カウンターで登録をしようとしたら100ゾルかかると言われた。

1万円くらいの価値らしい。

迷宮で敵を倒すと石みたいなものになつてたのでそれをゴブリ
ンシャーマンに集めさせていた。魔石というらしい。それを差し出
してみたところ、いきなり怒られた。

冒険者じゃないのに迷宮に入るのは駄目らしいのが分かったが、ひ

たすら謝ったところ許してくれた。
どこまで行ったのかと聞かれたので、中階層と叫びたらまた怒られた。なぜ？

とりあえず、魔石で1000ゾルになったのでそれでギルド登録することになったのだが…。

血をカードにたらすことでギルドカードができるらしい。できたカードに載った職業が呪術師。まあ、そうだな。

そんな職業はないと言われた…。

大きく分けて、この世界の冒険者の職業は5つある。

剣士、神官、精霊術師、魔術師、異能術師。

剣士は、その名の通り剣や槍、弓を使って戦う戦士。

神官には、回復専門の神官と、戦闘を行う武装神官、他の国では聖騎士とも言っそうだ。

精霊術師は、精霊を使って魔法を使う。エルフやハーフエルフじゃないと使えないようだ。

魔術師は、精霊を使わない詠唱をすることで魔法を使う。

異能術師 超能力者のことをいうそうだが、めったにいないというか見たことないそうだ。

普通の人は剣士になるらしい。素手で戦う人はいないようだ。

弓で戦う人も剣士になるのはどうだろう。だがなぞが増えたただけなので無視する。

ダークエルフには、呪術師がたまにいる！と嘘を付いたら納得してくれたのでよしとしよう。

第2話 初パーティ

ギルドランクというものがある。Fランクから始まり、Sランクまであるそうだ。

ランクが上がれば、武器や装備、アイテムを買うときの割引率があるという仕組みだ。

そして、迷宮以外のクエストもランクごとにある。

ただ、死亡率でいうと初心者と上級者が高いらしい。

初心者はいわずもなだが、上級者PTが下階層の最深部に行くとかなり強力な魔物と戦うことになる。

雷をまとった巨雷狼や、火竜に遭遇すると素早すぎる魔物で逃げる事も出来ず死亡することが多いとか。

そんなのどうやって勝てというのかなぞだが、Sランクの中には倒したことがあるというすごい人もいるらしい。

魔剣とかで戦うそうだ。ただ、魔剣は上級者でもなかなか買えない値段らしい。

さらに下には最下階層というものがあるそうだが、Sランク専用のとても危険な階層らしい。

Sランクでもかくく死ねるとかいう階層だそうだ。どんだけだよ。

迷宮で戦うと地上で戦うより強くなれるそうだ。

詳しいことは不明なのだそうだが、迷宮の魔力にそういう力があるようだ。

ギルドランクについては、中階層にいるゴブリンシャーマンの魔石があったので3段階アップしてもらった。

つまり、Dランクだ。

ギルドの用も終わったので明日香さんにお薦めの宿を紹介してもらった。

火竜亭という名前らしい。なんかいつか出会いそうなことになるフラグなのか、これは？

見たこともないダークエルフということで最初は難儀しそうだったが、明日香さんの紹介ということで泊めさせてもらった。どうやらこの街では今後もここしか泊まれそうにない悪寒がする…。

長期滞在ということで1ヶ月分を払おうとしたが、朝食付きで1泊30ゾルで1ヶ月では30日で900ゾル…。

途中で買い食いをしてしまい、お金が足りないので10日分を支払った…。

明日も迷宮に行つて稼がないといけないようだ。

全体回復があるとはいえ、正直、魔物の攻撃は痛い…。防具も欲しいところだしなあ。

とりあえず、お風呂に入つて寝ようと思つたが、この世界にはお風呂はないようだ。

お湯を入れた桶を渡された…。しょうがないので、体をお湯で拭つて寝た…。

翌朝になってよくよく考えてみた。

自分がダークエルフなのでまずパーティには入れてもらえそうにないこと。

自分の戦い方は相打ち狙いがメインで、傍から見ればおかしいこと。魔物とパーティを組んでいたら、まず自分が襲われるだろうということ…。

結論としては、昼間には迷宮に入れないな…。

真夜中にいくしかないか…。

どうせ迷宮は暗いんだし、昼も夜もないしなあ。

防具を買うまで真夜中で戦い続けました…。

一週間ほど戦ってそこそこお金も貯まったので、防具を買いに街にくりだしました。

やはり、痛い目で見られている…。これはボロボロになった服を着ているせいなのか？

まあ、そうだよなあ…。

普通の服だし、これ。攻撃されて穴だらけだよ…。

防具屋に入っているいろいろ物色してみると欲しいものはやっぱり高い…。

痛い目で店の親父が見ているので時間もかけたくない…。

つか、まずこのボロボロの服の代わりを買った方がいいんじゃない？

普通の服なら高くないだろ。と服を買うことにしました。

2万円くらい使ってしまった…。

着替えてから、また防具屋にきました。

なんか、痛い目で見られている…。

服のせいじゃないんじゃない？

でも防具買っしかないんだよなあ。

手元にあるのは50万円ほどで5000ゾル。

プレートメールで150万円とか高すぎだろ。

つか、これきたら全体強化のスピードが意味ないじゃん。

やはり、革製なのか。鉄板入りとかいいよなあ。ガードできるし。

ということ予算内ギリギリのを一つ買ってきましたよ。

色はもちろん黒色です。黒服が好きなのだ。

新しい防具を買っても仲間もない俺…。

試しに新しい防具を着てギルドの隣の酒場に繰り出しました。

ここで仲間でも見つけようか。つてとんがってる耳を発見した。

エルフじゃね？でもダークエルフってエルフと仲悪いってラノベで

見たよ、俺…。

とエルフを見てたらいきなり目と目が合いました。

下手したら、やばいんじゃないかね、これ…？。

なんか立ち上がったよ。近づいてくるよ…。

「あんた誰？、何者？」

なんか聞いてきたよ、超上目線きたこれ…。

「見ての通りのダークエルフですよ」

これ以外なんて言えばいいんだよ、おれ…。

「職業は？」

「…呪術師です。」

「はあ？、なにそれ？」

「回復職ですよ、魔術も少し使えます」

ゴブリンシャーマンを捕まえて教えてもらったんだよ、ファイヤーボールだけだけど、てへ。

「こいつは、真夜中のダークエルフって言われてるんだよ、けっこう噂になってるぜ」

ツツコミが入ってきたよ。というか、なんで知ってるんだよ！

「なんで昼間に入らないのよ？」

おお、核心をついてきたよ。というかいえねーよ、魔物とパーティー組んでるとか。

「人気がないのが好きなだけですよ、じゃあ」

逃げるしかねー。つーか、やっぱりパーティとか普通に組めないんじゃない、おれ……。

「待ちなさいよ！ちよつと付き合いなさいよ」

何に付き合うんだよ、逃げたいんだが…。

なぜか、パーティ組むことになったよ。

そして、迷宮の中階層にいる俺。

エルフはどうやら有咲希実香というらしい。
なんでエルフなのに日本名？

パーティは4人。

エルフと牙狼族と虎族で亜人パーティじゃね？

獣人2人は剣士で、エルフは精霊術師らしい。

狼が勝長、虎が謙信。つか、戦国時代？

苗字？名乗らないのでわかんねーよ。

「左80mにゴブリンの集団6人いるよ、シャーマンはいない」

「便利だな、その探知ってやつ、そっちに行くか」

狼やる気まんまんだな。虎はあまり口きかない。

「じゃあ、全体強化かけるよ」

「ひょー、こりゃいいや」

ゴブリン6人を駆り立てる狼と虎。

「つか、後衛2人やることねー。」

どうやら回復職は人気らしく、パーティに誘うのは難しいってことだったようだ。

全体強化で前衛無双でなにすればいいん？

「きたよ、これたぶん、ミノタウロスだよ、右斜め前60m」

またもや、定番の全体強化。

ミノタウロスやっぱつえー。2人がかりで競ってるよ。

自分も参戦したいけど、2人が邪魔で割り込めないよ。

あ、狼が一撃食らって吹っ飛んだ。調子乗りすぎだよ。

そこで自分が割り込んでみた。

1週間前よりスピードあがってる、レベルアップしてる、俺？

相手の大剣を避けながらザクザクと短剣を差していく俺。

面倒なので全体強化をやめて、意思を奪うことにした。

「動きを封じたよ、とどめ刺しちゃって」

狼が寝てたけど起きてきた。どうやらけっこう重症そうだが、死ぬほどじゃないだろう。

虎と出番がきたエルフの精霊魔術でダメージを当ててる。

ミノタウルスが倒れたので、全体回復を前衛2人にかける。

「やっぱり、回復職がいると便利だなというかさっきのはなんだ？」

「相手を拘束する魔術ですよ」

狼は陽気だが、虎はなんだか不機嫌そうだ。この術があまりお好みにあってない様子だ。

その後も戦闘が続いたが、二匹目のミノタウロスを倒した所で帰ることにした。

酒場に戻って飲んでると狼が話してきた。

「おめーがいると、超楽チンじゃねーか。なんで一人で真夜中に潜ってたんだ？」

「一人の方が気楽でいいですよ」

というかとどめをさすのが狼と虎とエルフに譲ってるから俺の出番

ないし、レベルアップしないんじゃない？俺。

「なんで不満気なのよ？」

やっと核心についてきたよ、エルフ。

「俺の力じゃねー。こういうのに慣れたら後々痛い目を見るぜ」

虎がいいこと言った。俺もこのパーティより一人の方が気楽でいいよ。

というか、俺ってパーティに合わないんじゃない？1人でも普通にやれてるし。

ミノタウロスなんて強くても馬鹿だからいいカモだよ。というかこの2人より気を使わなくていいし、

前衛として優秀なんだよ。ミノタウロス。

「じゃあ、自分はそろそろ宿に戻ります」

さっさと逃げよう。

「またパーティ組まないか？セージ」

「しばらくは、一人で潜ります、謙信さんもその方がよさそうです
しね」

「まあ、考えといてくれよ」

脱出成功だ。もう当分組まないよ！。

俺は宿に戻って汗を拭いた。。

パーティは気を使うし、あまりいいことないな。

そして、寝た。

第3話 スペルオーガ

3ヶ月、1人で真夜中の戦闘をしているうちに10階層ある中階層はほぼ制覇した。

ギルドランクもCにあがった。探知の範囲も100mから150mくらいまで広がった。

手にしている武器も短剣から双剣に変えている。

ダーククローエッジ、真つ黒な双剣で俺好みだ。

切れ味もいいし、まあ、魔剣なんてまだ当分買えんしな。

魔法も少し増えた。ファイヤーフレイム、ファイヤーボルト。

それぞれ、炎で広範囲に焼き尽くす魔術と炎と雷のファイヤーボルト版だ。

コボルトシャーマンに中階層の10階層で出会ったので、手持ちの魔法が3つに増えた。

つーか、なんで火ばっかりなんだか。

ということの下階層に潜ってみた。もちろん、真夜中のソロだ。

できれば、死にたくないの浅いところで当分我慢しておくつもりだ。

オーガを前衛にして戦っていたら、3階目でやばそうな奴がでてきた。

スペルオーガだ。向こうもオーガを前衛にして向かってきてる。

意思を奪おうにも時間がかかる。知力が足りないのか。

その間、スペルオーガはもがいていたが、意思を奪うのを諦めるとなにやら唱えてはじめた。

嫌な予感がして、前衛2人に盾になってもらった。

あとはダッシュで逃げた。後ろのほうで巨大な炎が燃えあがってる。

逃げ遅れてたらマジで死んでた…。全体強化のおかげだ。

ここらへんが自分の限界か…。

下階層3階目…。ここまできると死ぬる…。

とりあえず、このまま出口まで逃げよう。

そのとき、出口付近で爆発が起きるのを見た。

誰か戦闘してるんかい！

探知してみるとどうやら別のスペルオーガと5人PTが戦っているようだ。

近づいてみると1人倒れている。これは死んでいる。元々6人PTだったようだ。

他のPTの前衛もかなりダメージを受けているようだ。

スペルオーガの魔法に耐えるって魔法付与防具ってやつか？

全体回復を発動した。

上級PTならスペルオーガを追い込めるかも。

前衛のオーガが倒れたようだ。

全体回復しながらスペルオーガに後ろから飛び込んで首を狙う。

前からもPTの前衛が攻撃をしかける。

接近戦なら魔法を使えないだろう。、首に双剣が刺さった。そのまま掻っ切る。

さすが、切れ味がいいよ、この双剣！

首から血を吹きながら暴れるスペルオーガ。

一応、オーガだ。まとも攻撃を食らったら一発で動けなくなる。

タンカーじゃないしな、俺。

さらに首に双剣を突き刺す。さすがに倒れていくスペルオーガ。

「…、助かったよ、ありがとう。危うく全滅するところだった」

俺がダークエルフなのに驚いたようだが感謝された。

そのまま、出口まで一緒に行くことになった。

前衛の死体はこのまま置いていくことになった。まあ、冒険者って

のはそういうものなのだろう。

下階層を抜けるまでまだ2階層ある。でかい荷物は置いていくしかない。

2階層でしばらく回復してから、1階層に戻った。

実は、呪術師の全体回復は、神官のそれとは違う。

大量にMPを消費して一気に回復するのが神官の全体回復。

MPを消費しない代わりにじりじりと回復させるのが呪術師の全体回復なのだ。

それでもけっこうな速度で回復していくもんだが、さすが上級。HPがかなり大きいようだ。

回復速度も以前よりあがってるのだが、本職の神官にはさすがに負ける…。

中階層も抜けて、話ながら出口を目指す。

このPTは、前衛に剣士2人、後衛に魔術師2人、それに神官1人だ。死んだ奴は剣士だったのだろう。

バランスのいいPTだが、神官がMP切れだったそうだ。

「失礼ですが、なんであれで死ななかったの？そのプレートメールってやっぱり魔法付与防具とかだったりするのかな」

「そうだよ。2発防いだが、加護があつたので生き残れた。」

あの爆炎を2発も耐えたんか…。魔法付与防具恐るべし。

「死んだ奴の加護は防御向きじゃなかったしな、しょうがない」

「加護ってなんですか？」

「下階層にいくくらいなのに加護も知らないのか？神殿で加護を受ければ戦闘が楽になるんだよ」

「ずっと、ソロだったので知らなかったです…」

「うーか、それ知ってたら受けてるよ。なんだよ加護って。」

「その加護って選べるんですか？」

「選べるんだけど、具体的な効果は加護を受けてからじゃないと分からない」

選べるのに、分からないって微妙だなあ。

「その加護を受けるのってそれなりにするんですか？」

これが一番大事だ。

「下階層まで行つてればそこそこ金あるだろう、ってあそこでソロはないだろ、死ぬ気か？」

いいこと聞いた、さっそく受けよう。

「ずっとソロだったのでPT組んでないんですよ」

まあ、あそこでソロは確かに死ぬるよなあ。意識を奪えないってもう駄目じゃん。

でも上級PTには入れなさそうだしな、まだCランクだし。回復職なら入れてくれるかなあ。

ダークエルフだから、それ以前の問題かもな…。

出口についたので別れることになった。

とりあえず、ギルドにいつて加護とやらを聞いてみよう。

第4話 加護

ギルドに着いた。さっそく話を聞いた。

加護を受けるには神殿や宗教団体に行く必要があるそうだ。

神には戦いの神やら豊穰の神、知識の神などいろいろいるようだ。

さっそく費用についても聞いた。1万ゾル…。手持ちのお金で払えるな。

だてに3ヶ月潜ってない。

加護を受けよう。ただ、これですっからかんになる…。

双剣も買っていたし、防具も定期的にメンテナンスするので維持費がかかるからだ…。

問題は、どの神にするかだが自分は神道なのだが、それでも加護受けれるんかな。

知力にも限界があるだろうし、戦いの神にするとしよう。

安全が第一だ。命は大事にしよう。

戦いの神はさすがに人気があるようだ。1週間かかるとか、とりあえず予約した。

それまで暇なのでまた酒場に通ってみた。3日目にまた以前のエルフを発見した。

3人PTだったのが1人増えてる。竜人の剣士のようだ。回復職はなかなか見つけられないようだ。

というか4人のうち剣士3人ってどんだけアグレッシブなPTだよ。竜人ってあまり見かけないんだが、ダークエルフと違ってそこそこはいるようだ。

というかダークエルフってどこにいるんだよ。

前にエルフに聞いたのだが、人間が嫌いで森に引き籠もってるくらいまではわかった。

中央大陸の6割が未開拓の場所だ。残り4割に国ができています。という、未開拓の場所にいます。

魔力の歪によって、魔物がでるので魔力が強すぎるところには人は住めないらしい。

迷宮も魔力の強い歪によってできるそうだが、地上にも魔物がでて頻りに冒険者が討伐依頼を受けてるそう。

若いほど迷宮の歪に影響されてレベルアップと共に体が軋むそう。成長期みたいなもんか。

自分はおっさんだけどダークエルフにしては若い方だと思っただが、あまり実感が無い。

少し体が凝った感じがする程度だ。

そういえば、クエストやらというものは受けたことがない。まあ、依頼主がびっくりするだろうしな。

ダークエルフだし…。

そうだ、PTだ。あれから3ヶ月くらいたってるけど、聞いてみよう。

「どうもおひさしぶりです」

「あら、真夜中のダークエルフさんじゃないの」

まだ、覚えてくれてたみたいだ。まあ、ダークエルフなんて自分しかいないし。

「あれからどうしたんだ？」

狼の勝長さんだ。虎さんはあいかわらず無口のようだ。

「下階層に行ってたんですけど、こないだ死にそうになってました」
いきなりぶつちやけてみた。

「1人でいったんか？そりゃ、普通は死ぬだろ」

「まあ、うちのPTにまた入らないか？下階層にはまだいかないけどなw」

どうやらPTに入れてくれるらしい。

「正直、回復職がないと怪我したときに治療院行かなきゃいけないんで、それなりに金がかかるんだよ」

どうやら、軽症なら塗り薬で治すようだが、骨折とか大怪我すると治療院とかで直さなきゃいけないらしい。

そこにいけば金がかかるがさくつと治るそうだ。神官がぼったくりで儲けてそうだな。いいなあ。

魔剣ほしい、魔法付与防具とか…。

とりあえず、このPTを育てて下階層を目指すのを当面の目標にしよう。

自分もレベルアップしないとな。一人前衛で戦闘ばかりしていると筋力と俊敏さがあがって知力が上がってない気がする。

後衛に徹した方が知力はあがるのかな。よくわからん。魔法攻撃でもしてみるか。

一緒に迷宮に潜っているうちに1週間が過ぎた。

いよいよ、加護を受ける日だ。

戦いの神の神殿にいつてみる。

スサノオの神殿だ。回復職が戦闘するってどうよとは思うが、最後は自分頼りだ。

なんか簡単な説明を受けた。

魔方陣の中で瞑想すれば加護を受けられるそうだ。

とりあえず、座禅してみる。

魔方陣の外で6人くらいの神官がなにやら唱えている。詠唱か。

瞑想していると、加護の光がやってくる。

なんとなくイメージが伝わる。

戦いの光、守りの光、稲妻のような光、武狂う光など6つだ。

迷ったが、武狂う光を選んでみた。一番光が強くて選んでしまった。
なんかのパワーアップか？

とりあえず、加護を受けた。具体的にはよくわからん。何の力だこれ。

そのまま、酒場についてPTに話してみた。

どうやら狂戦士の加護らしい。

「戦闘中に加護を発動させると見境なく暴れるから注意してよ！」

PT組んだらそりゃ意味ないわな、これ…。

加護は手動で発動なのか、なら安全だわな。

ただ、呪術師の狂戦士の加護は別な意味があった…。

第5話 呪術師の狂戦士

夜寝ようとしたらやたら体が軋む。加護のせいかな？
朝までずっと軋んでいた。

そして、筋力があがったようだ。体も軽くなった。眠いけど。これが狂戦士の呪いか？加護じゃないのか？

P Tで中階層に潜った、支援してみたところ分かったことがある。

全体強化がまずい…。

力が暴れだしそうになる。それを抑えないと恐らく全体狂戦士になってしまうぞ、これ。

抑えこむのに疲れる…。

簡単にかければなしにはできなくなった…。

加護がなんで自動で発動するんだ…。

全体回復はそのままだった。

「この全体強化って前より強力になってるな、ずっと楽に戦えるようになったぞ」

狼は喜んでいるようだった。まあ、それならいいか。

全体強化が加護で強化されたせいかな、中階層より下、つまりあの下階層にいきたくなくなったと狼がいいだした。

いやいやいや、あそこはまずいって…。

「あそこは3階層くらいからスペルオーガの少PTがいてやばいんだよ、強力な炎の魔法で上級PTの前衛が死んでたよ」

「それなら2階層までいってみるか」

狼やる気満々だ。虎はあいかわらず黙っているが、竜人とエルフは狼に賛成のようだ。

「それくらいなら大丈夫そうね」

「うむ、俺もかまわないぞ」

エルフも竜人のユーノもやる気だ…。

さっそく、潜ることになった。

下階層への入り口の階段で全体回復をかけている俺。

「みんな、回復終わったみたいだよ」

感覚的に竜人が一番HPが高いみたいだ。次に虎、狼、エルフの順だ。

さすが竜人だ。破壊力もあるし、中階層ではこのPTなら問題なかった。

ちなみに竜人は耐火能力が高いらしい。

肌が鱗なので防御力も高そうだ。顔は人間っぽい竜って感じた。

プレートメールを着込んでるのは、竜人と虎だ。

竜人と虎は、あのプレートメールを着てもかるがると動いている。

筋力が高めで余裕があるのだろう。

狼は革製の防具が好みのようだ。このPTのダメージディーラーって感じか。

前衛のタンカー2人が両手剣で、狼が片手剣を両手に持っている。

エルフは短剣を使うが普段はしまって手ぶらだ。それと、防具は革製だ。

「じゃあ、下階層にいくわよ」

やはり、いくのか…。

とぼとぼと階段を降りていった俺。

さっそく、探知をかけてみる。

オーガの少PTがいた。スペルオーガがここにはいないようだ。

オーガは歯ごたえがあるのか、狼が喜んで戦っている。拘束できるけどそのままでもいいか。

実は、魔物を拘束できるとこのPTには言っているが、意識を奪えるとは言っていないのだ。

言ったら警戒される恐れがある。危険なことは言わないほうがいい。俺が相手だったら絶対警戒する。ダークエルフだしなあ。

戦闘中に全体強化をかけてるが、暴走しないように抑え込んでる。疲れる……。

エルフは精霊魔法をちよくちよく使ってる。火系をかけている、やっぱり火系が一番ダメージがいいのかな。

戦闘が終わるたびに、全体回復をかけているが全体強化の疲れが残ってる……。

やはり、全体強化を無理に抑えてるのがきつい。加護なのに呪いだよな、これ……。

まあ、それでも効果があがってるようだけど。

二階層目についてみたら、なんかいた……。

獣系が単体だ。巨鎧熊というらしい。

でかいし手強い。エルフによると自己回復をする熊だそうだ。HPをひたすら削り取るしかない。

下階層ってやっぱりきついよなあ。ここでオーガなんかきたらやばいと思っていいたら、早速探知で見つけた。

こちらに向かってきている。4匹のPTだ。自分はオーガ達の意識

を奪っておくしかない。

「右にオーガの少PTを見つけた！オーガは自分が抑える、こちらには全体回復をかけておく」

自分がオーガを始末するまで、4人には巨鎧熊と戦ってもらっしかない。

自滅させればいいんだが、それは秘密にしている。それに同時に意識を奪っておけるのは3匹までだ。

次にオーガのPTがきたら、危険過ぎる。早めにオーガを殺すことに決めた。

「全体強化にしてくれよ」

狼が文句を言ってるが、無理。

「あれは抑えるのがきついから自分が戦闘しているときにはかけられないんだ」

オーガ3匹の意識を奪う。

この能力にも加護が働いた。意識を奪うというより襲うような勢いで意識を乗っ取るうと力が発動する。

4匹目のオーガと戦闘になる。早く殺さないといけない。

狂戦士の加護で肉体が強化されたせいか戦闘力があがってる。強くなってるのが分かる。

巨鎧熊の攻撃力は高いようだ。タンカー2人ががんばってる。

その上、自己回復ってなんだよ、一匹なのになかなか倒せないよう

だ。

「オーガを始末したから、戻ってきた！こちらの魔物も拘束する」
それからはざくざくと一方敵を殺すだけだ、巨鎧熊は倒せたが、こちらもけっこうダメージを負ったようだ。

「あの熊は、さすがに強かったな、回復と拘束がなかったらやばかったぜ」

狼も下階層のやばさがわかったようだ。

戦闘後も、前衛に全体回復をかけ続けている。

このPTだと下階層は、自分がいなければ無理だったろう。
回復職がいなかったのもあるが、拘束できないと魔物に挟まれて殺される。

そろそろ、下階層に入って3時間くらいたつ。

2階層は、魔物との戦闘中に別の魔物とぶつかりやすい。自分が前衛で戦うことも増えた。

狼は楽しんでいたが、もっと刺激がほしくなったようだ。

下の階にいききたいと狼がほざいた。

いやいやいや、この下って3階層だから！やつがいるから！スペルオーガが。

きちちゃったよ、3階層…。

さっそく、中PTのオーガがいた。6匹だ。スペルオーガがいないようだ、よかったあ。

でもそのうちきつとくるよ…。

戦闘中に探知しているとさっそく、捕捉した。やつだ…。前衛もいる。まだ遠い。100mくらいだ。

「スペルオーガの少PTがいた！動きをとめるから全体強化を中止して全体回復に切り替える！」

全体強化をうち切って、久しぶりに意識を奪ってみる。動きを止めないとあれはヤバいって。

前は失敗したが、ここはやるしかない…。

加護が発動し、襲うような勢いで意識を乗っ取るうとする。

勢いに負けたのか、意識を奪えた。

ついでに、魔法をゲットしようとしてみる。あの爆炎の魔法だ。エクスペーションというらしい。

自分に使えるのかな、この魔法。

オーガたちは少しの間、4人にまかせよう。二匹目のスペルオーガがでてくるとも限らない。早めに一匹目を仕留めとく。

「スペルオーガは自分が仕留める」

「え？どうやって？」

エルフがいらんことを聞いてきた。

「不意打ちでエクスペロージョンを撃つ」

「そんな魔法、どこで覚えたのよ」

さらに、いらんことを言うエルフを無視した。

とりあえず、一人でこちらに誘導しているスペルオーガの少P Tに向かっていった。

不意打ちでエクスペロージョンを撃つつもりだ。

もうすぐ有効射程に入る。詠唱を開始する。これは死角からでも打てる魔法だ。

敵の足元から爆発を発動させる魔法といったところか。

エクスペロージョンを発動した。

普通なら死角にいる敵は発見できない、探知をもっている自分だけができる攻撃だ。

でかい炎の柱が立った。覇音だ。MPも一気にもっていかれた！。

探知したが、もう補足できなくなってる。死亡したようだ。

ヤバい魔法だよな、これ。オーガのHPを一撃で削るってどんだけだよ。

PTに合流したがまだ戦ってる。オーガが6匹いたがまだ5匹いる。

「仕留めてきたので、全体強化を再開するよ」

「全体回復にしてくれ、けっこうやられてるんだよ！」

狼のいうとおり、全体回復を発動する。

ちなみにここでエクスペロージョンを撃ったら味方も全滅してしまう。

どのみち、MPを一気に消費してしまったのであの魔法はしばらく撃てない。

探知しながら、全体回復を発動して、自分も双剣で斬り込む。

「魔法は撃てないの？」

エルフが言ってきた。いろんな魔法を持ってると思ってるようだ。4つしかねーよ……。しかも全部火系だ。

「さっきのでMPがもうほとんどないとうか、前衛で戦ってるからそんな魔法撃つ余裕もない、探知するだけで一杯だよ」

戦闘を開始して小一時間たっただろうか。戦闘が終了した。

「全体回復かけながら一旦戻ろう」

3階層で回復してたら危険だ。

さいわい、探知してみると入り口方面には敵がない。

オーガの中P.Tに懲りたのか、狼も戻ること同意した。

2階層で休憩をとって、それから中階層に戻る。ここまでくれば安心だ。

無事に中階層、上階層も突破して、酒場に戻ってきた。

分前を分配している。

1人あたり2560ゾルになった。下階層は稼ぎがいいが分配するとやっぱり少なくなる。

しかし、スペルオーガの意識が奪えたのと新しい魔法を覚えられたのはうれしい。

ただ、さらに下の階層にはスペルロードとかいうのがいるそうだが、出会ったら死ぬな…。

今回は、スペルオーガを倒したということで全員ギルドランクがBになった。

ちなみに、俺はこないだ不意打ちで倒したので既にBだ。

「ギルドランクもあがったし、クエストを受けてみようかしら」

エルフがなんか言い出した。クエストって受けたことねーよ。どんなんだろ。

「クエストってどういうものなんですか？」

知らないものは知らない。素直に聞くのがいいだろう。

「冒険者なのにクエスト受けたことないやつって聞いたことねーよ」

狼が言ってるが、本当だからしょうがない。

「ギルドに行つてギルドランクごとに見合つたクエストを受注するのよ」

「だいたい、このレベルだと討伐系か護衛系かしらね」

なんとなくわかった。ラノベにでてくる普通のやり方らしい。

「そつえば、あなたはレベルいくつなの？」

エルフが言ってることがわかるが、レベルなんて分からない。

「レベルってどうやって分かるの？」

「レベルが分からない冒険者なんて聞いたことねーよ」

狼がまたツツコミを入れた。

「ギルドカード見れば分かるじゃない。もってるでしょ？」

見てみた…。レベル、レベル…。どこだ？

「カードに念じると浮かびあがるのよ、人には分からないようになってるの」

おお、レベル見えた。レベルは46とでた。

「レベルは46でした」

「かなりレベル高いじゃない！私でも34よ。」

「いや、ソロでやってただけだし」

狼と虎がレベル37で竜人が38らしい。

それぞれ、下階層で戦ったので1か2くらいあがったらしい。

考えてみれば、呪術師の相手の意識を奪うという能力は、十分チートすぎる。

探知があるので複数の魔物PTに囲まれるってこともないし、余裕をもって敵に対処できる。

中階層の敵にはこれだけあれば勝てる。それをソロで稼げば普通の何倍も効率があがるのだ。

意識を奪えることは秘密にしているので、あまり突っ込まれたくない。

「まあ、あんな魔法使えるんだからそのくらいのレベルだと思ったわ」

エルフが納得してくれたみたいだ。よかった。

「明日はギルドでクエスト受けるわよ」

初クエストかぁ。楽しみだ。

解散して、宿に戻って寝た。

第6話 初クエスト

翌朝、酒場でPTに合流した。

まだ竜人のユーノがきてない。自分について聞かれたら、いろいろ
まずいことが多い…。

「そういえば、ダークエルフって珍しいけどどこからきたの？」

さっそく、エルフが聞いてきたよ。ここは、嘘をいって切り抜ける
しかない。

「それは、秘密なんだ。そう言われて里をでた」

「ふーん、呪術師ってあなたしか見たことないけど、他にもいるの
？」

おお、核心をついてきた。

「ダークエルフの里にはいたよ。それでも少ないけどさ」

ギルドにも言った嘘だ、これしか思いつかない俺…。

竜人がそのときやってきた。遅れてきたのはクエストを受注してき
たからだった。

迷宮の北の森で巨鎧熊が複数目撃されたらしい。

その討伐が条件だ。3頭倒さないといけないとか。あれってかなり

強かったような気がするが、Bランクなのか？

さっそく街をでて北に向かうと城門が見えてきた。衛兵が立っている。

城門ってでかいな、というか街からでようとしなかったから外がどうなってるか初めて見る。

「外にでかけるのか？北の街道沿いの森に強い魔物がいるから今は危険だぞ」

「その魔物を退治してくるクエストを受けたの」

エルフがギルドカードを見せたら、通してくれた。

街道を進んでいくと森が見えてきた。けっこう、奥まで広そうな森だ。

というか、でかい森の中に街道が通っているって感じた。探すだけでも大変そうなんだが…。

「目撃された場所から探すわよ、右の森に入っていきましょう」

探知を発動するが、150mまでが限界だ。見つかるのかな。

「前方に狼っぽいのがいる。6匹だ。」

でかい狼がいた。3mくらいある。これって普通のPTならやばくない？

「3匹は拘束した、全体強化をかける」

戦闘が始まった。噛み付いてくるだけだ。火とかは吐かないようだ。前衛3人が狼を切り裂く、肉質が柔らかいので攻撃しやすそうだ。

6匹全部を始末したが、迷宮の魔物とは違って魔石にはならないようだ。

そのあと、2度ほど魔物と戦闘をした。

討伐対象ではないが、魔物を狩ると報奨金が貰えるらしく、部位をはぎとって進んだ。

エルフが足跡を見つけたようだ。足跡を辿っていくと水場が見えた。

なんかいる…。2匹だ。もう1匹はどこだ？

「水場に2匹、目標の巨鎧熊だ。拘束した」

水場にたどり着くまでに意識から残り1匹の場所を探ってみた。

どうやら狩りに出かけてここに帰ってくるようだ。3匹目の足跡を見つけたので跡をつければいいか。

このまま殺すことにした。2匹動きが固まっているところを全員でざくざくと刺していく。

我ながらシユールな戦闘だよな。

討伐の証拠品として、牙と右手を持っていくことになった。
残り1匹を追う。

「たぶん、足跡があるのでこっちにいると思いますよ」
さりげなく誘導してみた。能力を疑われるのはまずい…。

程無く、こっちに向かってくる巨鎧熊を探知した。

「最後の1匹がいました。拘束します」

そして、またざくざくと以下略。

「これでクエスト達成ね、さっさと戻りましょう」

帰り道は戦闘もなくギルドまでたどり着いた。

実は、でかい狼の死体にでかい狼が10匹群がっていて、死体を食べていたのを探知して避けたのだがやばそうなのはそれだけだった。

あれを10匹はさすがに無理だ。というかあつちを討伐したほうが
よくね？

さすがに、金より命がおしいので、無理はしなかった。

報酬を貰い酒場で分前を貰ったけど、迷宮で稼いだほうが金になる
し経験値も稼げるしよくね？

「クエストより迷宮で戦ったほうが自分には向いてるみたいですよ」
ぶっちゃけてみた。

「確かに拘束があると討伐クエストはつまらんな」

「本当は、厳しいクエストのはずだったのよね、これって。次からは迷宮だけにしましょう」

狼とエルフも同意したので、次からは迷宮に行くことになった。

第7話 新しい魔法

宿に一旦戻ったが、寝ないで夜中になるのを待った。

自分には目的があつた。

新しい魔法の入手だ。

ギルドで教えてもらった情報によると、

魔法を手に入れるには魔導書を買う。でも高いらしい。

魔導院で教えてもらう。学校みたいなどころらしく、時間もかかるし金もかかるらしいので却下。

魔術師の弟子になる。これもただでは教えないだろうし、魔導院と同じで却下。

残された道は、スペルオーガに教えてもらうってことだけだ。

ひさしぶりの真夜中のダークエルフになった。

まずは、中階層のコボルドシャーマンを見つげるところからだ。

9、10階層くらいにいそいだ。

3匹捕まえて教えてもらったところ、新しい魔法は、スリープ（睡眠）、バインド（1分間拘束）、レジスト（魔法耐性）だ。

炎系以外の攻撃魔法はもってないんかい！

スリープとレジストは微妙だが、3匹までしか意識を奪えないし、

バインドは重宝しそうだ。

レジストは発動した魔法を打ち消す魔法だ。

ファイヤーボールならレジストできそうだが、エクスペロージョンはできそうもないって感じの魔法だ。

とりあえず、3匹は殺して、下階層へと降りていく。

1階層はソロで余裕だが、2階層となるとオーガの少PTが多くて早速、バインドの魔法を使うことになった。

相打ちとバインド、なかなかいい。

三階層にいよいよ降りていった、オーガの中PTがいるのでやっぱりだ。ただ、二階層ほどPT数は多くない。

いきなり、探知した。向かってくるオーガ6匹だ。3匹の意識を奪い同士討ちをさせる。スペルオーガはいない。

相打ちさせると残りのオーガがいるので最後の始末は自分でしないとけないのが面倒だ。

次のPTは素通りし、3つ目の少PTにスペルオーガはいた。4匹。スペルオーガは少PTが多いようだ。

やっと捕まえられた。3匹の意識を奪い4匹目を始末させ、あとは、スペルオーガを残して相打ちさせた。

1匹オーガが残ったが始末し、スペルオーガを1階層まで連れていけばいいだろう。

2階層では、2匹しか新たに意識を奪えない。1匹すでにスペルオーガがいるからだ。

少PTが多いのをくぐり抜けないといけない。バインドを使う。1分間で殺さなければいけないのでオーガの首を狙う。

なんとか凌いで1階層に戻れた。スリリングすぎる…。
バインドを教えてくれたコボルトシャーマンありがとう。殺しちゃ
ったけど。

1階層でいよいよ教えてもらう。

ポイズン（毒の状態異常）、パラライズ（麻痺の状態異常）、サン
ダーウェブ、ブラスト、サンダーストーム、コキュートス。
6つの魔法を手に入れた。さすが、スペルオーガ。

ポイズンは微妙だ。正直使えない。

パラライズは、単一麻痺魔法だ。バインドよりも麻痺の方が使える
かも知れない。

サンダーウェブは麻痺属性付きの雷系全体魔法なので重宝しそうだ。
ブラストはファイヤーフレイムよりも強力だが火系単一攻撃魔法だ。
微妙だ。

サンダーストームとコキュートスは強力な雷と氷の全体魔法だ。自
分のレベルとMPで撃てるかどうか試してみる必要がある…。

最後に、スペルオーガは始末した。ありがとう、スペルオーガ。

無理は禁物なのでこれくらいで引き上げるとしよう。

明日は、PTがないのでゆっくり寝れる。

迷宮の外にでたら朝になっていた。

第8話 火竜

起きたら昼過ぎだった。

とりあえず、ギルドで昨日の魔石を換金する。3860ゾルになった。

PTの2倍弱か。まあ、目的が魔法取得だったからおまけみたいなものか。

でもなんか騒がしい。

緊急招集とかいってる。

自分には関係ないと思ってギルドをでようとして捕まった…。

火竜が地上で目撃されたらしい。

回復職が必要だとかで、全体回復持ちの自分が目を付けられたようだ。

それも長時間維持できるということもバレてる。

上級魔法が使えるところまで…。エクスプロージョンか。

緊急招集から逃げるとギルドから強制退会させられるらしい。

もはや、逃げられない…。

誰だ、自分の能力をギルドにばらしたのは？

狼が犯人と見て間違いない。

広場まで連行された。

火竜と戦いたくない…。

S、Aランクを招集しているようだ。
もう、諦めた。とっとと終わらせて欲しい。

だんだん、賑やかになってきた中でぼつんとしている俺。
火竜と戦うとすれば使えるのは上級氷攻撃魔法コキユートスか。
昨日覚えたばかりで撃てるかすら分らない。

そんなことを考えていると声をかけられた。

「こないだのダークエルフじゃないか、お前も上級だったのか」

この前、助けたPTのプレートメール着た前衛のようだ。

「いえ、回復職として来たので上級じゃないですよ」

「神官で呼ばれてるのは、Aクラス以上だぞ」

「神官じゃないです…」

「神官以外の回復職ってないだろ？」

「呪術師です…」

「そんなの聞いたことないぞ？」

説明が面倒だが、無視するわけにもいかないしなあ。

「全体回復に特化している回復職なんですよ、だから中級でも呼ばれたんです」

「どのくらいの能力かわからんな、すごいのか？」

「半径150mの味方全員を常時回復させることができます」

「めっちゃくちゃすごい能力じゃないか」

「そろそろ、呼ばれるみたいですよ」

職業ごとに分けられるようだ。広場にはもう50人ほど冒険者がいる。

こんな人数で大丈夫なのか？

このうちSランクってどのくらいいるんだろうか…。

回復職が呼び出されたので行こうとしたら、お前は向こうだと言われた。

そこは魔法職の場所じゃないか…。

「お前は、上級魔法を撃つてMPがなくなったら回復職の陣地ではなく前衛後方中心に移動しろ、前衛の150m以内だ」

もはや逃げられない。狼め、死んだら恨んでやる。

「魔法職で上級魔法を撃てるのはどのくらいいるんですか？」

「お前を入れて今は4人だ、先月1人死んだ」

「コキュートス以上の上級魔法はありますか？」

「氷魔法の最上級がコキュートスだ。お前は撃てるのか？」

「覚えていますが、撃つたことはないです、中級じゃどうせ撃つ相手がいないし」

「これでコキユートスを撃てるのはお前を入れて3人になった」

1人撃てないのかよ！まあ、自分も発動できるかどうか分からんけど。

「早く持ち場に行け！」

魔法職の場所には12人いた…。誰だ覚えてない奴は？
ちなみに神官は8人くらいいる。残りが剣士だろう。

隣の魔法職に聞いてみた。人間の女の子だ。

「神官が少なすぎないか？」

「冒険者の神官自体が少ないのよ、上級者となるとあのくらいでしょ、というかなんでダークエルフ？真夜中のダークエルフってソロと聞いたけど、なんで魔法職にいるの？前衛ならもつと前よ」

「最初はここから魔法を撃てと言われたんだよ」

「魔法術師がソロなんて、あなた馬鹿でしょ？」

「回復職なんだよ」

「だったら、あっちよ」

「魔法も撃てるんだよ、もう出発だぞ」

そろそろと西に向かって進んでいった。どうやら西の城門に向かっていくみたいだ。

「なんの魔法を撃てるの？」

「コキュートスだよ、それに火竜なんて下階層の魔物だろ？なんでこんなに集まってるんだ？」

「どこで覚えたのよ、そんなの！それと火竜じゃなくて火竜亜種よ。最下階層にいる覇竜よ」

聞いてねーよ！無茶苦茶強いじゃん。それ。

城門をくぐってどんどん西に向かっていく。西の森が燃えているのが見える…。あそこなのか。

森の入口で止まった、ここで待機らしい。そうすると、覇竜らしきものがこっちに向かってきている…。でかい！

詠唱が始まった。上級魔法は有効範囲が広い。俺もコキュートスの詠唱を始めた。

詠唱が終わった、魔法が発動する。MPが一気に持ってかれた！エクスプロージョンよりもMP使うのかよ。

3発のコキュートスと1発のサンダーストームが覇竜に撃ち込まれた。

続いて中級魔法が撃ち込まれていく。

空を飛んでいた覇竜が地面に落下する。前衛がそれを迎え撃った。

自分も前衛の後ろに移動し、探知で30人の前衛を補足する。
全体回復を発動した。

竜は麻痺状態になっている。誰かサンダーウェブかパラライズを撃つたんだろつ。

次々と剣が打ち込まれる。

これだけ入れればいくら何でも楽勝じゃね？

傷ついた覇竜が火を吹いた、一気に前衛が飲み込まれた。

俺は残り少ないMPでパラライズを撃った。

魔法が飛びかい覇竜はまた麻痺状態になった。

神官の詠唱が始まった。8人って少なすぎるよ。前衛30人いるんだし。

最初の一撃で死んだ前衛はさすがにいないがHPがかなり削られている。

前衛は、それでも必死で剣を打ち込んだ。

覇竜が叫び声をあげ、尻尾を振り回しながら倒れていく。

前衛が巻き込まれて何人かふっ飛ばされている。

覇竜は死んだが、前衛で死んだものは5人だった…。ふっ飛んだ際に死んだようだ。それが探知で分かっていた。

戦闘時間は10分に満たないだろう。それでも死者がた…。全員

Aクラスだったそうだ。

ふと、ギルドカードを見た。レベルは54になっていた。

第9話 死の実感

死者はギルドの職員によって運ばれた。生き残った冒険者には、報奨金が出された。1人4000ゾル。俺は2つの職業分で8000ゾルを受け取った。明日またギルドにくるように言われた。

そして、俺はAランクになった。

ギルドを出てると、もう夕日が沈む時間になっていた。俺は自然と酒場に向かった。

これはもう習慣みたいなものだろう。

狼たちがいた。霸竜のことを聞きつけたのだろう。竜人はいなかった。狼、虎、エルフの3人だ。

「今日はすごい事件があったらしいじゃないの」

「あなたも参加したんでしょ？ダークエルフが活躍したって聞いたわよ」

「俺は後ろで魔法を撃つただけだよ」

「上級魔法のコキュートスを撃つたそうじゃない」

「俺が上級魔法を撃てるの知っていて、それで呼ばれたので撃つただけだよ」

狼を見たら、頭をかいていやがる。

「悪いな、つい口をすべらしちゃったんだよ、悪気はないんだぜ」

「魔術も回復もすごいダークエルフがいるって噂になってるわよ」

あの能力がばれるのはまずい。有名になったら他の国に行くしかないかな。

「正直、あまり噂されるのは困るんですけどね」

「なんでよ、いいじゃない。有名になったら仕事も金も増えるんじゃない？」

金は欲しいが、公で仕事するとなるとあの能力をみせたくない。だが、あのチート能力が使えなければ、俺の戦力はガタ落ちだ。

「迷宮で戦うのが好きなので、やることは変わらないですよ」

そういえば、明日ギルドに呼ばれているのってなんでなんだろう。凱旋か葬儀でもするんかな。

「今回は、死んだ人もいるしあまり喜ぶ気にもなりませんけどね」

「5人も死んだそうだな、Aランクになったら呼び出されるんじゃない前衛は損だな」

「それなら、今回の件で俺もAランクになりました、明日もギルドから呼び出しを受けてますよ」

「それじゃ、明日はPTはお休みね。それと、今日はお祝いをしな

くちやいけないわね」

「おう、今日は俺の奢りだ！たくさん飲んで食べ！」

狼はあいかわらず陽気だが、俺はそんな気分じゃないんだけどな。探知で人が死ぬ瞬間を感じたんだ。

「今日は疲れました、早めに寝ますよ」

俺はそのまま、宿に帰って寝た。

第10話 脱出

翌朝、早めに起きてしまった。

そういえば、ギルドにいかないといけないんだっけな。

朝食を酒場で食べることにして、宿を出た。

ギルドに入ると、雰囲気がいつもと違った気がした。

嫌な予感がする。

受付の女の子に名前を告げると奥に入ってしまった。

なにやらおっさんが出てきた。ギルドマスターらしい竜人だ。

「セージさん、今回はかなりの活躍をされたそうですね」

「前衛の人達のほうが大変だったと思いますよ」

「どうもあなたの噂を聞いて、この国のお偉いさんが会いたがってるんだよ」

俺は会いたくない、嫌な予感が当たった。

「これをもって皇室に行つて貰いたい。クエストみたいなもんだ。報酬を出すよ」

もう後がない、これを受けるのはどうみてもヤバイ。
嫌な予感しかもうしない。

「このクエストを受けないとどうなるんですか？」

「この国にはもういらなくなるだろうな」

やはり、もう出ていくしかないか。

「それでは、いままでお世話になりました、他の国にいきます」
頭を下げてギルドを後にした。

追手がかかる前に脱出しないといけない。時間がない。

宿に急いで戻って、そのまま北の城門に走っていった。

「これからでかけるのか？身分証をだしてくれ」

どこから見てもダークエルフなのにはばれてない。間に合った。

「これがギルドカードです」

「分かった、通っていいぞ」

皇都からは抜けたが、まだ追手がかかる可能性がある。

回りこんで南から抜けよう。

北の街道を外れて森に入っていた。途中で出会う魔物はやはりでかい狼だった。5匹だった。

3匹の意識を乗っ取って同士討ちさせる。そして止めをさして終わりだ。

そのまま森を走る。探知は忘れないで警戒している。

出会う魔物はみんな同士打ちだ。単体の魔物は意識を奪ってそのまま殺す。

ただここでも一角ウサギだけはやっかいだった。探知にひっかからないで突っ込んでくる。

スライムはいなかった。

南の街道にでた。ここから南にあるアルノール共和国を目指すことにした。

第1話 新しい街

何も用意しないで出てきてしまった。

正直、困った。

食事には困らない。食べそうな魔物を殺してファイヤーボールで焼いて食べた。

南の街道も森が続いている。

このままいけば、街に出られるだろう。

野宿がやばいことにすぐ気づいた。地面に寝るのは魔物が襲ってくるのでまずい。

とりあえず、探知をかけながら木の上に登って目を瞑っているしかない。

ウサギよけにはなる。

ほとんど寝ない日が続く。

走りながら南を目指す。レベルが高いせいか体は軽い。

全体強化すればもっと早く走れるが暴走を抑えるのに疲れるからだめだ。

走りながら一週間で次の街に着いた。

ここはまだ伽盧皇国の中だ。でも限界だ。この街で一泊するしかない。

恐る恐る城門をくぐった。

「この街になにか用か？」

「冒険者です。ギルドカードもあります」

「一人で皇都からきたのか？どうやってきたんだ？」

「Aランクですから魔物なんて普通の動物みたいなものですよ」

「そうか？まあ、入っていい」

怪しさ満開なのにとりあえず入れた。

お金はある。宿に泊まるう。とりあえず、眠りたい。

宿を探したが、ダークエルフだとなかなか泊めてもらえない…。

やっと泊めてもらえる宿が見つかった。和泉亭って宿だ。

前払いでお湯を貰って体をぬぐってから寝る。

一日でここを出るといふことも話した。

後は、もう知らん。寝た。

朝になった。早くここを出たい。

南の城門に行ってみた。

「でかけるのか？身分証をみせろ」

「冒険者です、これがギルドカードです」

「うむ、通っていいぞ」

完全スルーだ。

宿で次の街までの距離も聞いた。走って4日くらいだ。

なんでこんな目に会わなきゃいけないんだと思うがしょうがない。

結局、アルノール共和国にたどり着いたのは皇都から出て3週間後だった。

そこから護衛のクエストを探して、街から街に移動したので楽しかった。

ダークエルフというのは怪しいが、Aランクというのが効いた。

このノワールという街に来たのは、迷宮があるからだった。

北の国にいなかったのは、そこはトルメキア帝国だったからだ。

皇帝とかいるのがまずヤバい。また同じ目には会いたくない。

この国は共和国だから、ヤバさは低いだろうという考えだ。

民主主義バンザイ。

まずこの国は半島になっている。それと島国を含んだ中央大陸南部の国だ。

伽盧皇国と共通言語だから問題ないだろう。ドイツ語だ。なぜかはわからない、それは謎だ。

とりあえず、宿を探した。Aランクだから多少高いところでもかまわない。

ダークエルフでも泊めさせて貰えたのはイシュタル亭という宿だ。

1ヶ月分を前払いした。あとは、冒険者ギルドに行く。

情報を仕入れないとどうにもならない。

迷宮の構造は、とにかく広い。

それが階層になっている。

4階層になっているのは同じだ。

伽盧皇国の迷宮より規模が大きくなった感じだ。

そこまでは事前に調べた。

あとは、細かい情報だ。

どうも、魔物の種類は基本的に同じようだ。

Aランクなら3階層までいける。

違うのは1階層12階だ。

広さも深さも規模が大きい迷宮になっているようだ。

PTに入るのはもう懲りた。ずっとソロでやると決めている。

後は、目立たないようにするだけだ。

酒場にもいかない。

ギルド以外は冒険者が行かない場所でおとなしくしていることにした。

今の問題はMPが足りないことだ。上級魔法が1発しか撃てない。

まめに魔法を使っていこう。

そうすればMPも増えるだろう。俺は魔法使いになる。呪術師だけど…。

それと武装の強化だ。やはり、魔法剣が欲しい。防具は革製だから魔法付与とかしてもあまり防御力は変わらないだろう。

第2話 スペルロード

真夜中になった。

PTのときには、ランタンとか使っていたがソロならいらぬ。ダイクエルフは夜目が効くからだ。

むしろ、あれは魔物に見つけてくれという目印じゃないかと思ってる。

多少暗くても問題ない。探知もある。

とりあえず、1階層に足を入れた。相変わらず、この階層は探知が効かない知能の低い魔物がでるから嫌いだ。

スライムや一角ウサギ、大トカゲをあしらいつながら進む。

1階層の11階でやっと目当てのものを見つけた。ゴブリンシャーマンだ。

魔法を教してもらうことにするが、目新しい物がない。ハズレだ。

12階でまた捕まえた。今度は新しい魔法が手にはいった。

ダークネス（視力を奪う）

微妙だ。バインド、パラライズの方が数段便利だ。さすが、ゴブリンシャーマン。使えねー。

2階層に入った。

ここではコボルトシャーマンを見つけることにする。

いない…。

1 2階まで行ってもコボルトシャーマンいない。コボルトはいた。
今日はハズレだ。

3階層に期待する。ここからは油断するとヤバい。以前の迷宮は4階から下には降りたことがない。

スペルオーガを見つけた。やはり3階にいた。

さっそく教えてもらおうか。

マジックドレイン（MP吸収）

をゲットした。かなり使える魔法だ。さっそく使ってみた。MPが補充された。いいものが手にはいった。うれしい。

それでは4階まで降りてみる。ヤバい。ハイオーガがいた。意識は奪えた。パワーがオーガとは段違いだ。

5階まで降りたが、ハイオーガが中PTでいる。ヤバさが倍増した。バインド、パラライズを多用する。

ハイオーガにマジックドレインをかけてMPを補充した。やはり、マジックドレインは使える。

6階まで降りた。ハイオーガにまじって、オーガロードがでてきた。意識は奪えるがそろそろヤバそうだ。バインドでは殺せない。パラライズを多用する。マジックドレインもかけてMPを補充する。

7階まで降りた。オーガロードだらけだ。それも中PT。普通のソ

口なら軽く死ねる。次の階は嫌な予感しかしない。

8階まで降りた。ヤバいやつがいた。スペルロードだ。意識が奪えない…。レベルが足りないのか…。

パラライズもレジストされた。打つ手がない。エクスプロージョンをぶちかまして7階まで逃げた。

地上まで上がった。問題はスペルロードだ。8階を攻略できない。その下も駄目だろう。

というか、ほんとに、Aランクって8階を攻略できるんか？呪術師の能力があっても無理だぞ。

朝日を浴びながらとぼとぼと宿に帰った。

第3話 Sランク

1ヶ月がたった。レベル65に達した。いまだにスペルロードを攻略できない。いい方法はないだろうか。

それと、酒場に行かないので、よく分からないがどうやらここまで自分の噂が伝わってきたようだ。

ギルドでPTに声をかけられるようになった。バレているとは思えない。逆に聞いてみた。

「回復職ってなんで知ってるの？」

「覇竜を相手にコキユートスで撃ち果たし、30人の剣士を回復させつづけた凄腕の冒険者って聞いたわよ。3階層をソロで倒せるほどの戦闘力をもってるって話もあるわね」

「そんなに強くはないですよ」

「でもギルドにスペルロードの魔石を持ち込んでるって聞いたわよ、あれは3階層でも最強クラスの魔物だわ」

「エクスプロージョンで力技で倒してるだけですよ」

「それって火系上級攻撃魔法じゃない、Aランクの魔術師でもほとんど撃てる人はいないわよ」

「だめだ、これはもうどうにもならない。だが、ここから逃げるにもあとは西の国しか残ってない。」

「それでうちのPTには入ってくれるの？歓迎するわよ」

「まだ弱いのでソロで鍛えているところなんですよ、しばらくはこ
のまま鍛え続けてますよ」

「あなたが弱いつて言うのは、皮肉にしか普通は聞こえないわよ。
まあいいわ、気が向いたら声をかけてよね」

なんでこうなるのかな。ひっそりと暮らしていたのに。もう、迷宮
にずっと籠り続けたい…。

まあ、ギルドからへんな呼び出しはないし、気にしてもしょうがな
い。

防具でもみてこようか。気になるのがあるんだが、高いんだよね。

それは知力アップの魔法付与防具だった。革製防具なのに3万ゾル
もするってどんだけだよ。

「お客さん、それが欲しいのかい？」

「うーん、高いから買えないんだよね。革製防具って使い捨てじゃ
ん」

「魔法付与防具は専門の職人にだせば補修してくれるよ」

「でも革製なのに高いよね」

「魔術師は布製防具を使うからそれは人気がないんだよね、買う気が

あるなら安くするよ」

「どのくらいになるの?」

「お前さんはAランクだな、それで3割引になるところを、4割引までどうだい?これでも採算ギリギリだよ」

「知力アップでどのくらいあがるの?」

「+10はあがるね、こんなにあがる防具はなかなかないよ」

「じゃあ、買うよ、なんかおまけ付けてほしいな」

「おまけっていうとなにが欲しいんだい?」

「黒く染めて欲しいんだけど。明るいと迷宮で目立つんだよ」

「それなら染めるのに1週間待ってくればできるよ」

「じゃあ、決めた。買う」

8階層の攻略を進めているうちにお金が貯まっていたので実は定価でも買えたのだ、ちょっとうれしい。

1週間後、防具を受け取って真夜中に潜ってみた。

3階層8階へ降りていった。オーガロードを倒していると、オーガ

ロードの少PTにスペルロードがいるのを見つけた。

さっそく意識を奪ってみる…。やっと奪えた。魔法付与防具すごい。大金を払った価値があった。

それでは、スペルロードから魔法をゲットする。

マインドゼロ（MPを0にする）、グラビティ（動きを止める）、ヘイスト（俊敏さをあげる）

マインドゼロは使える。スペルロードを無効化できる魔法だ。グラビティはパラライズの上位版か。

ヘイストは微妙だ。

残りのスペルロードを探知とマインドゼロで無効化いけばいいんだが…。マインドゼロは3発しか自分のMPでは撃てない。マジックドレインと併用で使い物になる魔法らしい。

スペルロードはなんとか突破できる。あとはオーガロードを倒せば敵がいらない。

同士討ちで倒せる。やっと8階を突破した！

9階まで降りていく。スペルロードのいる中PTが多い。もう鬼だな、この階。

でも8階を突破した俺にはもうただの作業だ。

探知とマインドゼロ、マジックドレインでスペルロードを駆逐し、オーガロードで同士打ちをする。

10階へと降りていく。オーガロードがいなくなってる。嫌な予感がする。急に迷宮の道幅が広くなった。

この階層を進んでいくと、森にもいた狼の魔物が現れた。いきなりの難易度低下である。

同士討ちとパラライズで仕留めていくと、でかいやつを探知した。見覚えがある。

竜種だ…。霸竜ほど大きくない。火竜だろう。

意識を奪えるのか？試したところ、スペルロードよりは簡単に奪えた。がくっ…。

ざくざくと双剣で攻撃し、時間がかかりかかったが殺せた。

こんなんでもいいのか10階？

11階に降りていった。火竜2匹だった…。あとは狼の魔物だ。火竜を相打ちさせて生き残りをざくざく…。

なんか最後には骨のあるやつと戦いたい。

12階に降りていった。いたのは、火竜2匹と巨雷狼というやつだろうか。

雷を纏った狼のようだった。やけにレジスト能力が高く探知すらもできない。そうすると意識も奪えない。

グラビティもレジストされる。常時、レジストかよ！

ただ、火竜が2匹いるので相打ちさせた。

火竜がいなかったらやばかった。

結局、一番やばかったのはスペルロードだけだった。

巨雷狼は単体だったら相当やばかったろう。火竜がいてくれたから倒せたようなものだ。

地上にあがったら、朝日が登りきっていた。

とりあえず3階層は制覇した。

ギルドにいき換金した。4階層はSランク専用ということで自分はいれない。

窓口の女の子に聞いてみた。

「3階層を全部クリアしたんですけど、4階層っていけるんですか？」

「あの巨雷狼も倒したんですか？」

倒したのは火竜だよ。でも言わないでおこう。

「倒しましたよ。火竜も巨雷狼も全部」

「魔石も換金しました」

「確かに巨雷狼の魔石ですね」

「ちょっと待ってください」

奥に入っただけだった。おっさんがでてきた。ギルドマスターの竜人だ。なぜここも竜人？

「あなたが噂のダークエルフですか、私はこのギルドマスターをしているウオズニツクというものです」

嫌な噂なんだが、ギルドが漏らしたような気がしてしょうがない。個人情報を守れよな。

「魔石も確認しましたし、あなたをSランクに認定します」

カードを更新してもらった。

「4階層はSランクでも死亡者が多いので気をつけてください」

一応聞いてみた。

「巨雷狼が苦手なんです、4階層にもいますか？」

「もちろんいますよ、うろつろつしています」

その時点で俺は詰んでるんだが…。

他にも魔物がいてくれることを祈るしかない。

「あれって殺すのが大変なんです、弱点ってありますか？特に、魔法で効くものとか？」

「火属性の魔剣に弱いですよ、魔法には私も詳しくはないのでなん

とも言えないですね。上級魔法ならレジストをやぶれるんじゃないですか」

上級かよ、1発しか撃てないんだよ。魔剣買ってことか。

「防具も治したいんですが、革製の防具を治せるいいお店ってありますか？」

「この街の東の方に、シルビアという腕のいい職人さんがいますよ。あと、Sランクになると強制的に受けさせられるクエストも出てくるからね」

「クエストは嫌いなんですよ、迷宮で戦うのが性に合うのでなるべくなら受けたくないですね。それにソロなのでSランクのクエストは無理だと思いますよ、PT組んでる人にしてください」

「むーん、一応考えとくよ、それでもソロ向けのは受けてもらうよ」
「わかりました」

Sランクは面倒そうだ。

魔剣を買うのに3階層で稼がないといけないのか…。

とりあえず、その職人さんを探すことにした。

いきたくないが、酒場にいつて聞いてみるか…。

とりあえず、店員さんに聞いて場所を教えてもらった。

「真夜中のダークエルフじゃないか、調子はどうだい？」

フレンドリーなドワーフだ。あまりここには居たくない。

「悪くはないですよ」

「覇竜はどうだった？見たことないんだがやっぱりすごいのか？」

知らんがな、まあ、適当にあしらっておこう。

「後ろで見てただけですから、ものすごくでかくて強いってことしかわかりませんね」

「でもお前さんがその覇竜を倒したんだろ？」

「俺は後ろから魔法を撃っていただけで倒したのは前衛の剣士達ですよ」

「そうか、聞いていたのと少し違うなあ」

どんな噂が流れてんだよ、もう帰るよ。

「それじゃ、用事があるので帰ります」

とつとつ、酒場を抜けた。ここは面倒くさい当分こないことにしよう。

とりあえず、宿に帰るか。防具は修理に出すとしばらく潜れなくなるからもう少しやれてからでもいいだろ。

そして、宿に帰って寝た。

第4話 遭難者

夕方起きて、宿で飯を食っていると女将のシルティさんにいきなり言われた。

「あなた、Sランクになったんだってね、すごいじゃない」

いきなりバレてるよ、ギルドの情報だだ漏れじゃないか。

「お祝いにこの飯代は、ただにしてあげるよ」

護衛の任務でもしてゆっくりしたいけど、魔剣代を稼がないといかんしなあ。

武器屋に行つて、相場をみてみよう。

「腕のいい武器屋を知らないですか？」

「それならこの街の東にグランつて人がお薦めだよ」

東にその手の店が集まってんのかな。

お礼をいってグランつて人の武器屋に行つてみた。

やはり高い…。それに、両手剣が多くて、双剣の魔剣は少ないなあ。双剣人気ないんか…。

魔法付与防具とあまり変わらない値段なので当分は無理だわ。

武器を研いでもらって潜ることにした。

この迷宮に来てから、わかったことが一つある。

遭難者に出くわすのだ。迷宮の規模がでかいからなんだが、面倒な事が増えた。

日が沈んでから潜る俺は救助隊みたいなことをしている。

いちいち、地上まであがるので効率が悪い…。

でも、人がいると好きに戦えないから出て行ってもらうしかないんだが…。

人が確実にいないのは3階層の中部くらいからだ。

ここで遭難したらまず死んでる。

また、いらぬ噂が流れるんじゃないかと思うと鬱陶しいがほっておくのも気分が悪い。

しばらく、潜り続けていたらダークエルフの救助隊というあだ名に変わっていた…。

今日は2階層11階でPTを見つけた。

「ダークエルフがきてくれたぞ！」

「よかった帰れる！」

「いやいやいや、俺の目的はそうじゃないから。」

「もう戻りますよ、ちゃんと後ろにいてください」

「あの魔物たち固まってるんだけど？」

「拘束の魔法です」

「詠唱してないじゃない」

「詠唱するのが面倒くさいんですよ」

「もう魔法ということにしている。」

「拘束してないやつはパラライズをかけて殺す。」

「シャーマンにあったらマジックドレインでMPを補給する。」

「たんとんと戦闘をしながら救助する。」

「地上に出た、お礼を言われて帰っていった。」

「また、ここからかよ。」

「今日は2回救助した。」

というか、俺が来てくれることが前提になってる。

来ない日があったらどうするんだよ。

気になって毎日潜るようになった。

修理に出しても潜れるように魔法付与防具も2着買った。魔剣の方が欲しいんだよ…。

1ヶ月ほどしたところ、ギルドからの報奨金も出たのでつい防具を買ってしまったのだ。

感謝状とかもあったが断わった。ここを出ていく時に荷物になるようなものは持ちたくないからだ。

まあ、自分をクエストに出したら救助できなくなるのでギルドもなにも言っておかないだろ。

ギルドの職員にならないかと言われたが断わった。

戦闘以外はしたくないからだ。

第5話 不意打ち

さらに2ヶ月くらいたったときに、俺は魔剣を買った。

カスタマイズの魔剣だ。俺用に打ってもらった。

炎属性の双剣と普通の双剣を持ち歩くのでかさばるのが面倒になっただが、しょうがない。

巨雷狼との戦いに慣れておかないと4階層で苦勞することになる。

火竜には普通の双剣の方が効くから2種類もってるんだが、どうせなら雷属性の双剣も買おうかと思ってる。氷じゃないのは、雷の方が汎用性が高いからだ。

4階層にいったら双剣を3種類も持っていけない。できれば麻痺効果の高い双剣が欲しい。

買えるのはさらに2ヶ月後くらいだろうか。麻痺付きだともっとかかるかもしれない。

結局、2ヶ月半くらいで手に入った。麻痺付きの雷属性の双剣だ。

パラライズをかける頻度が少し落ちたのがうれしい。マジックドレインするのも手間がかかる。

そして、たまには面倒なときがある。今日みたいなことが起こる。

「もうすぐ出口だぞ」

「ありがとうございます」

探知で後ろから近づいてくる冒険者がいた。

最初から怪しいと思っていたが、後ろから襲いかかってきた。

「死ね、ダークエルフ！」

振り向いて双剣で斬りつける、手加減したが死ぬかな？

血を流しながら倒れた。

ギルドに付きだしたところ、遭難して死んだ冒険者の恨みを買ったらしい。

別に、ついでにやってるだけだから遭難して死ぬやつも必ずいる。

自分に出会うまでに間に合わなければ魔物にやられて死んでしまう。

決まった時間に潜るわけでもない。

それでもこういうことがたまにある…。

俺には探知があるから不意打ちも意味ないんだがなあ。

第6話 緊急招集

ギルドからの緊急招集がかかった。

北の森に轟竜が見つかったようだ。

覇竜よりは弱い竜だが、それでも十分強力だ。

Sランクの俺にも招集がかかった。というか宿屋まで来て起こされた。

「君にも轟竜討伐に参加してもらおう」

ギルドマスターのウオズニツクだ。

「得意なのはなんだね？」

「専門は回復職ですけど、上級攻撃魔法も撃てますよ」

「タンカーじゃないので、前衛は無理ですね」

「それでは回復職と魔法職で働いてもらおう」

やはり、というか広場に集まった。60人ほどいる。

前回よりも回復職が多いようだ。死者がでないのを祈る。

前衛は28人で回復職が16人、魔法職が18人だ。

S、Aランクだが、回復職にはBランクもいるようだ。

自分を入れてコキユートスが撃てるのは4人いる。

轟竜が北の城門近くまで来た。

急いで移動をはじめ。

「ダークエルフじゃない、私助けられたことがあるの、あの時はありがとう」

面倒なので頷いた。なるべくスルーしたい。

「あなたは、魔法職なの？」

「なんでもできるがタンカーじゃないから前衛は無理なんだ。コキユートスを撃つたら回復役に回るよ」

「前衛に行ったら最初の一撃で多分死ぬかもしれんな。そういうタイプなんだよ」

「なんでもってすごいわ、だてに救助隊はやってないわね」

「ついでに救助しているだけでそれが目的ってわけじゃないんだがなあ」

「迷宮で迷ってもあなたがくるから安心して潜れるって人も最近多いわよ」

「こっちはそれで迷惑してるんだよ、それに、俺が行くまでに魔物にやられたら死ぬ、助かる保証なんてないよ」

「それじゃ、そろそろ始まるぞ」

詠唱を開始する。魔物はすぐ目の前だ。前衛に近づきすぎると魔法攻撃があたってしまう。

コキュートスが4発撃ち込まれた。

次に、パラライズをかけて、前衛の後ろに回り込む。

前衛を全員探知したので全体回復を発動した。

中級魔法が撃ち込まれていく。魔法攻撃がおさまるまで前衛は待機だ。

何発目かのパラライズが効いたのか轟竜は麻痺状態になった。

剣士たちがようやく攻撃をはじめめる。

覇竜のときのようなことがないように、パラライズをかけ直す。

これはギルドマスターにも言っている。

麻痺状態から回復されると死者がでかねない。

パラライズが飛び交う。

剣士たちはひたすら切り続ける。

そろそろか、俺はグラビティを発動した。

死ぬ時に暴れて巻き添えがでるのはヤバい。

轟竜が悲鳴をあげる。

倒れる頃だろうか。

轟竜が地響きをあげて倒れた。

回復職の出番はなかった。そして、死者がでなかった。

ギルドに戻ると報奨金が渡された。

俺は日が暮れると、今日も迷宮に潜った。

まだ4階層には行ってない。巨雷狼との戦闘にも慣れてきたが、轟竜、覇竜が問題だ。あんなのがいるところに行ったら死ぬ。コキユートス4発くらってもまだ生きてるのはかなりヤバい。

第7話 4階層

今日も日が暮れた。さっそく潜る。

今日の俺はいつもと違う。4階層目にいよいよ突入だ。

作戦を考えてみた。3階層12階から出口が広くなっていた。

4階層1階にはどうやら巨雷狼が複数いると思われる。

それなら、3階層12階の火竜を2匹、4階層1階に連れていけばいい。

自分の負担は軽くなるはずだ。

火竜亜種がでて意識が奪えない場合には、すぐ逃げることにする。

4階層1階に降りてみた。やはり、巨雷狼が複数いる。4匹だ。

火竜2匹をタンカーとして突入する。

上位攻撃魔法はまだ温存しておく。

MPは、魔法の使用頻度をあげたせいか、かなり成長したが、まだ2発は撃てない…。

ヘイストをかけて巨雷狼を切り裂いていく。使用するのは炎の双剣だ。

1匹あたり10分のペースで倒せている、前衛の2匹もすでに1匹倒した。

あと2匹だ。

残り10分で戦いは終了した。さすが、魔剣、威力が違う。

火竜も含めて全体回復をした。

4階層2階におりていく。

寒い…。

氷の迷宮だった。

なにかいるかな、思ったら一角ウサギだった。うざい、これはうざい。

火竜には小さすぎて戦闘させられない。

どんどん出てくる。なんとという嫌がらせ。

この階のボスをそうして見つけた。

氷竜だ。2匹いる。

火竜2匹対氷竜2匹のガチバトルが始まった。

試しに1匹意識を奪ってみる。奪えた。

3対1に変わったところで氷竜は死んだ。

残った1匹も始末する。火竜によって氷竜は全滅した。

寒いが、ここで全体回復した。

早く次の階に行きたい…。

回復が終わったので、4階層3階におりていく。

ここは、地面が土だった。

地面から、角が突き出てきた。

でかい一角もぐらだ。探知できない、うざい、うざすぎる…。

もぐらの相手をしていると、なんか石が埋まっているのを発見した。

近づくと動き出した。

石鎧竜とでもいうのだろうか。3匹いた。

こちらの戦力は火竜2匹だ。石鎧竜の1匹の意識を奪えた。

3対2になった。石鎧竜の攻撃は突進だ。固い体をぶつけて攻撃する。

どうやら火には強いようだ。火竜の火炎攻撃をもともしない。

3対2なのに圧されている。どうやら火竜より石鎧竜の方が強さが

上だ。

火竜が1匹倒れたので、石鎧竜をもつ1匹意識を奪った。

これでこちらの戦力は、石鎧竜2匹と火竜1匹だ。相手は石鎧竜1匹だ。

これでこちらの勝ちは決まった。程無く、石鎧竜は死んだ。

石鎧竜を残して火竜には死んでもらった。今までありがとう火竜！君のことは忘れない（嘘）。

石鎧竜2匹のHPを全体回復する。

さあ、次にいくぞ！

4階層4階におりていく。

雷、氷、土ときたら、次は、水だった。

迷宮の中心は石畳だが、左右が湖のようになっていた。

石鎧竜が落ちたら恐らく重くて溺死するだろう。

湖を覗くとなんかいる…。泳いでるよ、なんかでかいのが…。

石鎧竜には湖に落ちないように中心を進んでもらう。

湖の真ん中にたどり着いた時にそれが始まった。

水竜がでてきて、左右から水のレーザーを乱舞してきた。2匹だ。湖から上半身だけだしての攻撃だ。卑怯だ。

俺は石鎧竜を盾にした。どうやら石鎧竜には水のレーザーが効かないようだ。

盾にしながら出口に向かう。水竜はこのままスルーだ。水中戦なんてできねーよ。

4階層5階に降りていく。

天井になんかいる…。

落ちてきた。毒を吐いてるようだ。毒巨大トカゲとでもいうのだろうか、2匹だ。

石鎧竜2匹とも毒を浴びて、毒状態異常になった。

俺には、解毒の魔法がない。

ここは撤退だ。

水竜のところに戻る。

4階層4階だ。ここで石鎧竜が力尽きた。猛毒だったらしい。

代わりに水竜2匹の意識を奪った。

水竜を連れてまた5階に降りる。ふふふ、秘策が俺にはある。

5階におりるや水竜2匹からの水のレーザー乱舞だ。

毒大トカゲを近づけさせない。遠隔射撃をくらえ！

やはり水のレーザーに弱かったようだ。力尽きる毒大トカゲ2匹。

強いぞ、水竜！

4階層6階に降りていった。

ここには1匹いた。火竜の強化版か火竜改とも呼ぼう。

普通の火竜より2倍はでかい、色もなんか赤く輝いてる。燃えているのか？

水竜2匹による水のレーザー乱舞を発射だ。いけ！水竜。

火竜改は飛ぼうとしているが、水のレーザーで動けないようだ。

激しい蒸気があがり続ける。試しに意識を奪ってみた。成功した！

竜族はスペルロードよりも知力が低いようだ。

さすがにこのでかさでは次の階には下りれない。火竜改には死んでもらうことにした。

4階層7階まで降りてみた。

前衛は水竜2匹だ。どうやら電気大トカゲのようだ。2匹だ。

水のレーザー乱舞による遠隔射撃で死んでもらった。

4階層8階だ。さて、次はなんだ？ってこれは…。轟竜だ！

ちよ、無理なのがいた。意識を奪おうとした。失敗した…。

水竜の遠隔射撃で時間を稼ぐ。

パラライズをかける、1回目は失敗。2回目も失敗、3回目で麻痺状態になった。

水竜にがんばってもらうしかない。

パラライズと遠隔射撃の連続だ。

時間がたった。俺のMPが先に尽きた…。

コキウトス4発を耐える轟竜だ。そうそう倒せるわけがない。

水竜を連れて撤退する。

3階層12階まで戻った。水竜は4階層1階で死んでもらった。ありがとう水竜、君のことは忘れない（嘘）。

4階層は1階まで魔物は復活していなかった。まあ、往復でいたらどんなPTでも死ぬしな。

轟竜の意識が奪えないとすると、その上位の覇竜も無理だろうな…。

第8話 龍殺しのダークエルフ

俺は考えた。

水竜と電気大トカゲのコンボか？

恐らく電気大トカゲは俺の双剣と同じ麻痺付き雷属性だろう。

次回はそれで轟竜と戦ってみよう。

地上に戻った。

朝日が登っていた。とりあえず、魔石をギルドで換金した。

「ソロで4階層7階まで行ったんですか？」

「8階は轟竜がいたので引き返してきた」

よく考えれば、ソロで轟竜を倒したらギルドで騒ぎになるだろう。というか、どうやってそこまで行ったのか聞かれても困る。

「Sランクでもソロで4階層を攻略するなんて聞いたことがありませんよ？」

「俺は、前衛でもいけるし上級魔法職で回復職でもあるからなんでもありなんだよ」

「もう少し詳しく教えて下さい」

「それは企業秘密だ、苦勞して工夫した方法を人に真似されても困る」

「誰にもいいませんから」

「信用できない、俺は帰ってもう寝る。さすがに疲れた」

なんとか、振り切つて宿に帰つて寝た。

夕方、起きて飯を食べていたら宿屋の女将、人間のシルティさんに言われた。

「昨日、一人で轟竜と戦つたんだって？もう噂になつてるわよ」

やはり、ただ漏れじゃないか、ギルドは信用できねー。

その日、俺は4階層8階で轟竜を倒した。

水竜2匹＋電気大トカゲが正解だつたようだ。

4階層9階には火竜改2匹がいたが、水竜と電気大トカゲでなんとか倒した。覇竜までこのコンビでいくしかない。

4階層10階には巨大な猿が2匹いた。ものすごい速度で移動する。スピードファイターだ。

水のレーザー乱舞の前で動きを止めて電気大トカゲで麻痺させる。そのまま殺した。

4階層11階には大きな轟竜がいた。もうめちゃくちゃでかい。

だが、所詮は轟竜だ。水竜と電気大トカゲで殺した。

4階層12階にはラスボス覇竜がいた。

でも水竜と電気大トカゲの敵ではない。殺した。

地上に戻ると昼過ぎになっていた。

轟竜と覇竜のHPが高すぎるのだ。削るのに時間がかかった。

ギルドに入って魔石を換金した。

「…、覇竜を倒したんですか？」

「まあ、そうなるな」

「迷宮をクリアするとランクが変わるのか？」

「最上級のSSランクになります」

「さっさと更新してくれ、もう疲れた」

「SSランクはあなたが初めてですよ？」

「どうでもいいよ、更新してくれなければそれでもいい、帰る」

「わかりました、更新しますから」

「これであなたは史上最強の冒険者になりました」

ギルドカードを受け取ってさっさとギルドをでた。

宿に帰って寝た。

夕方起きた、もう4階層には興味がなくなった。3階層まで行くつ。

飯を食っていると、宿の女将のシルティさんが話しかけてきた。

「SSランクになったんだって！もう街中の噂だよ」

…、ギルドめ、いいかげんにしろよな…。

「ギルドの人が来て、あなたに相談があるそうだよ」

知るか、絶対行かない。

俺は、迷宮に入ってしまった。

3階層12階まで行って戻ってきた。3PTを救助した。

なんか最近増えてないか？

俺を頼って無茶すると死亡者がでるぞ。

地上に出たら朝になっていた。ギルドに入ってしまった。

ギルドマスターのウオズニックがいた。

「なんで昨日ここにこなかったんだ？」

「救助を優先しただけですよ」

「最近、救助するPTが多いんじゃないですか？注意してくださいよ」

「それは、そのうち話そうとは思ってたんだよ」

「どうしようというんですか？見捨てるとかできないですよ？」

「それなんだよ、やめてもらうわけにもいかないから困ってるんだよ」

「無茶して全滅するPTもでてるんじゃないですか？」

「たしかに、そういうことが起こっている」

「それと、きみに会いたって国の方からも話がきてるんだよ」

「俺が伽盧皇国を出てきた理由を知ってますよね？」

「もちろん知ってるよ。だから、困ってるんだよ」

「会う気はないのかね？」

「まったくくないですね」

「分かった、そっちはなんとかする」

「それと一人で覇竜を討伐しろっていうのも無理ですよ、まともにやったら即死しますから」

「でもきみは倒したんだろ？」

「まともに対手しなきゃいいんですよ、竜は馬鹿ですから」

「その方法は教えてもらえないのかね？」

「誰にも真似ができない方法です、言えというならここもでていきます」

「分かったよ、はあ」

頭を抱えて困ってるようだ。だが、知らん。

ギルドをでると人だかりができていた。

無視して出ようとする。

「待ってくれよ、龍殺しのダークエルフ」

どうやら新しい呼び名ができていたらしい。

「もう、眠いんですよ、帰って寝るつもりなんですが」

「わかったよ、でも本当にソロで覇竜を殺したのか？」

「それはギルドマスターにも秘密にしています」

そういつて押し切って、宿に帰ってきた。疲れた。寝る。

第9話 狂戦士

俺は、あることに気づいた。

マジックドレインを覚えてから、MPが増えているような気がするのだ。

ただし、増加量は微妙だ。でも、マジックドレインをさらに頻繁に使うようになった。

塵も積もれば山となるだ。

それと覇竜を倒したレベルアップでとうとう上級魔法を2発撃てるようになった。

レベルは82まであがった。

その魔力で最上級魔法を作り出せるんじゃないかということも考えた。

魔法の詠唱は英語だ。ここでは魔法語と呼ばれている。法則が分かれば作れるんじゃないか？

詠唱とイメージが重要のようだ。

韻を踏んでいるのは、確かだ。それなので、歌に似ている。

手持ちで一番多い火系で最大の魔法を作る方法を考えている。

名前はデストロイとでもいうのだろうか。

歌を作っては、唱えてみた。場所はもちろん、迷宮だ。

イメージは炎による破壊だ。爆発ではなく破壊なのだ。実現すれば、攻撃力は大幅にあがるだろう。

最初は、いまいちだったけど、最近、発動の反応を見せている。もう少しで発動する感じがする。もっと、流れるような歌いやすい感じにした方がいいのかな。微妙に変えたパターンを考えている。

実験場所は、4階層の1階だ。ここは、魔物を倒せば広くて静かだ。いい。

最近では、ここでいろいろ考え込んでいる。Sランク専用の迷宮にくるものはめったにいない。真夜中だしな。

上から降りると、魔物が復活しやすいのでひまつぶしにもなる。巨雷狼は歯ごたえのある敵だ。下からあがると復活しないのはある意味良心的なのかも知れない。

そんなことをやって1ヶ月半になる。魔法は発動した。一撃で迷宮の風景が変わった。さすが破壊の魔法。

試しに巨雷狼にデストロイをかけてみた。レジスト耐性の鬼、巨雷狼が4匹破壊された。全滅だ。攻撃範囲がやばい。狭いところで撃ったら自滅するだろう。その点、この迷宮は広域型なので都合がよかった。伽盧皇国の迷宮だと使えないな。

次は、氷の最上級魔法を作ろう。名前は、ファンデルワールスゼロだ。分子結合を解体する氷の魔法。これができれば、凶悪な魔法になるだろう。凍らせるのではなく、物質を解体してしまうのだ。全てが氷の塵へと変わるイメージだ。

そんな日常を変える噂が立った。

西の大国、ウルズ連邦とこのアルノール共和国との間で戦争が起きるのではないかという事だ。

普通なら、興味はまったくないが、このデストロイを使える相手が見つかった。使いたい…。

ギルドを訪れると、やはり、戦争参加の募集があった。

窓口の女の子に声をかけた。

「戦争に参加したい」

「…、龍殺しのダークエルフが戦いたい？」

なんか怯えている。今はどんな噂がたつてんだよ。

「城の衛兵にこれをもって行って下さい、あなたなら参加できるでしょう…」

城に行つて衛兵を見つけた。入り口にいる。まあ、そうだな。

「ギルドからきました。これをお願いします」

ギルドでもらつた紙をみせた。

「…、龍殺しのダークエルフだ…」

なんか怯えている。やはりたちの悪い噂がたっているようだ。

そういえば、最近救助するPTも減つたような気がする。なにか俺

を見て怯えるようになったので変だとは思っていた。

ギルドマスターがなにかいらんことをしたのか。俺を怯えさせるようななにかを風潮したに違いない。

「西にあるウエストフォートレスが最前線だ。そこに行ってもらおう。希望者をまとめて移送しているから、明日の朝、ここに来てくれ」

なんかあまり関わりになりたくないようだ。冷たい…。

翌日、来たら冒険者が集まっているようだ。みんな自分を避けている。完全にぼつちだ…。

馬車に乗り込んでガタガタを揺られている。

護衛はいないようだ。そりゃそうだわな、冒険者の移送だし。

俺に話しかけてくる冒険者はいない…。まあ、この方が気楽でいい。夜になると2人1組で見張り番をするが、俺の場合は1人だ。まあ、探知があるから楽な仕事だ。

ちなみに飯も1人だ。誰も近寄らない。

そうして、ウエストフォートレスに着いた。

「あなたが龍殺しのダークエルフか…、SSランクの…」

なんかお偉い人が出てきて怯えている。もうどうでもいい。

「前衛職で、それもなるべく最前線がいい」

希望を言った。魔法以外にもやりたいことが実はあるのだ。

「わかりました。そのように配置します」

やはり冷たい。そっけなさすぎる。とつとと消えていった。

すでに小競り合いは始まっているようだ。

明後日に本格的に本隊が動き始めると言われた。

俺は最前線の部隊に組み込まれた。戦闘訓練をみんなしているが、自分はぼっちだ…。

座り込んで眺めていても誰も言わない。まあ、そうなるわな。

2日がたった。いよいよだ。

相手も動いたようだ。ウエストフォートレスの西からだと敵の軍隊が見えた。

さすが最前線、敵がよく見える。

俺の部隊に命令がくだった。俺は詠唱を始める。

いきなり、敵のど真ん中にデストロイをぶちかました。

文字通り、人がゴミのように吹き飛んでいく。

俺は走りながら加護を受けて初めて、自分に全体強化をかけた！これが出たかった！

狂戦士になる。全てが止まって見えた。一気に相手との距離を詰める。

体が弾丸のように進む。剣も矢も魔法もすべてがスローモーションだ。

炎の双剣を敵に突き刺していく。まるで戦闘ではなくダンスを踊るかの気分だ。

ひたすら、前進する。新しい敵を見つけるためだ。

いつの間にか、俺は笑っていた。気分がいい。どんどん死ぬ！！！！敵が逃げるようになった。だが、俺はまだ戦いたい。弾丸と化して敵を殺し走り続ける。

魔術師を探知した。魔法が来る。全体魔法だ。レジストする。魔力と魔力がぶつかる！気分がいい！もっと撃て！

魔術師も一緒に踊ろうぜ！！！！ひたすら殺し続ける。

まとまった敵を見つけた。豪華な鎧を着ている奴がいる。

これはいい。みんな一緒に踊ろうぜ！！！！

気づくと敵は誰もいなくなった…。

誰もいない！！！！殺し足りない！！！！もつと踊りたい！！！！

あまりの激しい衝動で、逆に我に返った。

ここには誰もいなくなっていた…。

戦場から離れて敵陣地深くまできていたようだ。ウエストフォートレスまでかなりの距離がある。とぼとぼと戻った。

「龍殺しのダークエルフが戻ってきた…」

みんなドン引きしている。

「覇竜殺しは本当だったんだ…」

いや、本当だし。もう、みんな目も合わせてくれない…。

適当に座りこんで、ぼーっとしていた。

どうやらそろそろみんな帰る準備をしている。俺も帰るとするか…。

また馬車で帰る。そういえば金を貰ってなかった。まあ、ずいぶんと楽しめたのでいいか。

馬車の中では自分の周りに誰もいない。隅の方に集まっているようだ。

まるで化物をみるような目をしている。夜番も俺はしなくていいらしい。まあ気にしない。

ノワールの街についた。ギルドに入ると報奨金を貰えた。

募集の時の金額より多い。30倍はある。

ギルドマスターのウオズニックがいた。

「報奨金だが、それでも足りないか？」

「いえ、やけに多いですけどなんですか？」

「お前がほとんど殺したんだよ、敵を。敵の大將も魔術師たちもみんなだ」

「そつえば、周りに味方がいないような気がしましたね」

「いきなり敵本隊を魔法で吹き飛ばしたそつだが、なんの魔法か問い合わせもきている」

「火系最上級魔法デストロイですよ」

「どこで覚えたんだ？」

「4階層で籠って作ったんですよ、あそこは静かで落ち着きますから」

「全く規格外だな、攻撃も速すぎて見えなかったといってたぞ」

「前衛もこなしますから本気を出せばあれくらいですよ」

「魔法攻撃は受けなかったのか？」

「みんなレジストしましたから」

「もっと報奨金をださせることもできるぞ、これでいいのか心配していただくらいだ」

「久しぶりに楽しめたのでこれでいいですよ」

「どうやら覇竜を倒したのは本当みたいだな、目撃した冒険者がそういつた」

「他に用事がなければもう帰っていいですか？」

「…、もう行っていい」

ギルドを出て、宿に帰って、昼に寝た。今日も夕方から迷宮にいかなくては。

第10話 再会

夕方起きた。飯を食っていると宿の女将のシルティさんが言った。

「あなた一人で軍隊を殲滅したんだって？化け物のような強さだったって噂になってるわよ」

化け物つてもはや人ではなくなってるなあ。まあ、どうでもいい。新しい魔法作りの方が楽しい。

「また戦争は起きないんですか？」

「ウルズ連邦は降伏して、賠償金をだすことになるそうだよ」

どうやら、当分戦争は起きないらしい。楽しかったのにつまらないな。

4階層1階にあいかわらず来た。

ここ最近、氷の最上級魔法を作っているがまったくうまくいかない。ファンデルワールスゼロだ、分子結合を解体する氷の魔法は、難しいようだ。

その代わりに、ブリザードストームができた。

氷結状態にする全体魔法だ。威力はコキュートスの方が上だろう。微妙だ。

サンダーストーム、ブリザードストームの応用でプラストストーム

もできた。

やはり、最上級魔法は雷系の方が簡単なのだろうか。

手持ちはパラライズ、サンダーウェブ、サンダーストームと3つからなんとか編み出せないか？

でも、グラビティから攻撃魔法を作るのも捨てがたい。

重力系攻撃魔法グラビトン。これを作ってみることにする。

2ヶ月でできた。グラビティがかなり参考になった。重力制御の方法がこれで分かっていたからだ。

さっそく、石鎧竜を相手に撃ってみた。胴体に丸い穴が空いた。ただ、迷宮の壁にもかなり深い穴が空いてしまった。

撃ちまくるのは落盤的な意味で危険かもしれない。

次に、雷系最上級魔法テスラだが、なかなかうまくいかない。サンダーストームが完成されすぎてるからだ。応用するにも難しい。時間をかけて煮詰めていく必要がある…。

地上に戻ると、やつらがいた。

狼と虎とエルフだ。竜人はきていなかった。

俺が酒場に行かないから迷宮の出口に交代しながら張り付いていたようだ。

「見つけたわよ、真夜中のダークエルフさん」

酒場に連れていかれた。いきなり、酒場の冒険者達がいきなりどよめいた。逃げ出す奴までいる。

「懐かしい呼び名だな」

「ここでは龍殺しのダークエルフって呼ばれているようね」

「その呼び名になってるみたいだな」

「本題に入るけど、皇都に戻ってくれない？」

「断る、ここの迷宮が気に入ってるんだ」

「迷宮なんてどこも一緒でしょ？」

「皇都の迷宮は狭苦しい」

「皇都の王様からあなたを呼び戻すよう直々に頼まれたのよ」

「その王様とやらが嫌いでここにきたんだよ」

「皇都の王宮ではあなたが復讐にくるんじゃないかとも思われているのよ、戻れば報酬がたんまりでるわよ」

「金には困ってない、復讐なんて面倒くさいことをする気もない。それとも伽盧皇国はこの国と戦争でも起こす気なのか？」

「あなたがいるのに戦争する気になるはずないじゃない！、一人で軍隊をやったんでしょ？」

「あれは楽しかったな。また戦争が起こったら参加する気だ、戦争でもない和本気を出せないからな」

「覇竜がいるじゃない」

「あれは楽しめないんだよ、殺されるかもしれないからな」

「俺からも頼むから戻ってくれないか？」

珍しく虎が話しだした。

「皇国の軍隊に兄弟がいるんだよ」

知らんがな。

「とにかく、俺は戻る気はない。戻ってほしかったら同じ迷宮を用意しろ」

「無茶苦茶言うわね、またパーティを組む気はないの？」

「俺が籠ってるのはSランク専用の4階層だぞ」

「危険なことばかりしてると死ぬわよ」

「俺にとっては4階層は安らげる場所なんだよ」

「どんだけ強いのよ」

「巷では俺は化け物とも言われているそうだな」

「わかったわよ、諦めたわ。本当に復讐には来る気はないのね？」

「まったくないね」

「それじゃ、私たちはこれで皇都に戻るわ」

「ああ、達者でな」

3人が去っていくとまた声をかけられた。

「面白い話を聞かせてもらいました」

誰だ、コイツは？

「私はウルズ連邦からきたコーデイと言います」

「話を聞いていたのなら分かるだろ、断る」

「うちの迷宮はここより広いですよ」

「話には聞いているがアリの巣みたいなんだろう？こっちのほうが好みだ、そっちの迷宮は面倒くさいんだよ」

「お金ではなく、領土をお渡しすることもできます。貴族になれませよ」

「強くなることが目的なんだよ、戦う以外は興味ない」

「十分お強いではないですか？」

「まだこれじゃ、全然足りないんだよ」

「あなたは一国の軍隊よりも強いんですよ？」

「俺の基準は、魔物であつて人じゃない」

「既に、覇竜よりも強いじゃないですか」

「覇竜よりも強い魔物を用意できるのか？」

「いたら、グラビトンを撃ちまくってやる。」

「残念ながらうちの迷宮も最強なのは覇竜ですね」

「だったら用はないな、帰ってくれ」

この後も、話が平行線になったが、結局、帰っていった。

遅くなってしまった。宿に帰って寝る。

第11話 魔導院

夕方起きると、ギルドに行った。

昨日は、魔石を換金しなかったからだ。

ギルドマスターのウオズニックがいた。

「話は聞いたよ、ウルズ連邦と伽盧皇国から誘いがきたようだな」

「両方断わったよ。金も地位もいらないうてね」

「もう少し詳しく話してくれないか？」

エルフたちのとコーディイの話を説明した。

「これは、上に説明しておく。それと、魔導院からおまえに来て欲しいって話があるが断るうか？」

魔法には興味があった。

「魔導院ってどういうところなんですか？」

「主に魔術師を教育する機関だ」

「魔法の研究とかはしないんですか？」

「そこまでは分らんよ。興味はあるようだな」

「見てくるだけならいいですよ」

「それなら、魔導院に話を付けておく」

魔法の研究材料が落ちてないだろうか。テスラを完成させる方法とか…。

ファンデルワールスゼロは無理だろう。あれは諦めた。

結局、明日魔導院に行くことになった。

ここが魔導院かあ。

結構、大きいところだな、前の世界の大学くらいある広さだ。俺には縁がないものと思っていたが、来る機会ができるたことは、ちょっとうれしい。

門番に名前を告げると、おっさんがでてきた。院長のシロツコっていうエルフだ。

「国の方へあなたに来て欲しいという話をしたんですが、本当に来てもらえるとは思いませんでした。どうぞ魔導院の案内をしますよ」

「ギルドマスターから言われてきたんだが、国からはきてないな」

「あなたがお偉い方達を嫌っているということと、国とあなたの窓口がギルドマスターになってるようですよ」

そうなるんだろうな、話がきても全部断わっただろうし。

一通り、案内してもらった。教室、食堂、教授室、講堂、実験棟、資料館…、本当に大学みたいなところだな。

そして、学院長室へと入っていった。意外と普通の部屋だった。

「魔法の研究は行なってないんですか？」

「教授が個人的にやっております、公にはされてないですよ」

「ここに、俺はなんのよう呼び出されたんでしょうか？」

「あなたの話を聞くためですよ」

「あまり話せることはないと思いますが」

「あなたはデストロイという魔法を使ったそうですね」

「あれは火系最上級魔法ですが、普通の魔術師には発動できないと思いますよ」

「なぜですか？」

「上級魔法よりも燃費が悪いんですよ。MPをバカ食いますよ。おそらくですが、知力も相当ないと発動しないと思います。迷宮で知力もMPも相当あげましたからね、迷宮で戦闘すると地上よりも成長が速いというのは聞いてますよね」

「迷宮の特徴の一つですね、ただ普通の魔術師ですとレベル60を超える人はなかなかいないですね」

「普通の魔術師では、スペルオーガやスペルロードを倒せないということですか？」

「よく分かっていますね、あれらは上級魔法を使うので死亡する魔術師が多いのですよ、死ににいくようなものですね」

「プレートメイルでも着込んでいけばいいじゃないですか」

「金属の鎧は魔術を阻害するんですよ、あなたも革製防具じゃないですか」

ラノベの常識と同じようだ。

「あなたはどこの魔導院で習われたのですか？それとも誰かの弟子になったのですか？」

「ダークエルフの里で習いました」

嘘を言ってみた。スペルオーガやスペルロードから習いましたとは言えないな。

「魔導院よりもあなたの里の方が魔術が進んでいるようですね」

「エルフの里は違うんですか？」

「エルフ達は精霊魔法を好みますから、あなたは使えないそうですね」

習う相手がいないんだよとは言えないな。というか精霊ってどうい

うものなんだ？だが、聞いたらやぶ蛇になりそうだ。

「そっち方面の才能はないんですよ」

「ここで魔術を教えたりはできませんかね？」

「人にものを教えるのは苦手なんですよ」

「そうですね…、ここにあなたの研究室を用意することもできますよ？」

「自分は4階層で研究してるんですよ、あそこは実験する魔物もいて都合がいいんです、ただ資料室には興味があります」

「禁書以外ならお見せ出来ます」

「禁書というとデスとかですか？」

デスは即死魔法だが、成功率が低くて実践では使えない魔法だ、あれを食らう冒険者もいるのか？

「…よく知ってますね、それは禁じられた魔法です、使わないことをお勧めします」

とりあえず、資料室を借りることはできた。いつでも使っていていいということだ。これはうれしい。

さっそく、資料室に行ってみた。ただ、ドイツ語で書いてある…。しゃべるのには慣れたが、専門書として読むのは面倒そうだ。国語辞典みたいなものを探そう。

窓から眺めている人ばかりがあった。ここの生徒だろうか。

「あれが龍殺しのダークエルフか、すげー、はじめてみた」

「剣術もすごいんだぞ、軍隊を一人でまるごと全滅させたって聞いたぞ」

「先生に聞いたら、4階層で魔術を研究してるんだって」

「4階層って地獄みたいなところでしょ？」

「ダークエルフこえー。」

なんか盛り上がっているようだ。まあ、無視しておくか。そのうち飽きるだろう。

そして、俺は4階層にいる。

結構な知識が増えた。雷系上級魔法テスラの完成も近いかもしれない。

イメージはサンダーストームを広域化させた感じだ。威力をあげるイメージがでなかなか固まらない…。

いっそ、デスを広域化した大量虐殺魔法の方がいいかもしれないと思う今日この頃だが、使ったらヤバいことになりそうだ。単一なら成功率は低いが大量にばらまけばそれでも死者がでるだろう。

テスラが完成しないので、先に即死系上級魔法メガデスが成功した。ついで、やってしまった。後悔はしてない。

成功率もデスより高いので微妙に使えるかもしれない。50%の確率のようだ。微妙な魔法だった。

最近気づいたのだが、魔術院にときたまいくようになって後を付いてくる奴がいるようになった。学生ではないようだ。

意識を奪って理由を意識から読み取った。理由が分かった。国からの監視がついたようだ。

意識を奪えることがバレるとまずいので始末した。

資料室にいとと学院長に呼ばれた。

「あなたはデスを使いましたね」

「言われたとおり使ってませんよ」

「あなたに付いていた人の死体が発見されました、死因は突然死です」

「使ったのは即死系最上級攻撃魔法ギガデスですよ、デスは使ってません」

これは、メガデスをデスにフィードバックし、80%まで成功率をあげた単一殺人魔法だ。ただ、MPをド力食いする。

上級と最上級の中間といったところか、なので最上級にした。つい、作ってしまった、後悔はしていない。

「なんで監視なんかするんですか？」

「理由は言えません。それにギガデスも使ってはいけません」

どうやら国から要注意人物と思われたようだ、これは。ただ、自分を追い出したりはしないだろう。デメリットばかりでメリットがなにもない。

それから監視が付かなくなった。

魔導院にいと、相変わらず自分に興味を持っているようだ。たまには遊んでやろうかと声をかけてみた。

「なにか聞きたいことでもあるのかい？」

「すごい魔術師なので話してみたかったです……」

ブルブル震えている。怖がってるんじゃない。

「じゃあ、自分に魔法をなんでも撃ってみていいよ」

広場のようなところに行った。何が起きるのかと人が集まってきた。いる。

「じゃあ、いきますよ」

魔法が撃ち込まれたが全部レジストする。じきに諦めたようだ。

「それじゃあ、こちらからも撃つよ」

「えっ！」

学生が青い顔をして凍りついた。

マインドゼロを撃った。

「魔法を撃ってみて、なんでもいいよ」

「魔法が撃てない…、なんで…」

「魔術師を無効化する呪文だよ、そのうち戻るよ」

遊んでみたが、いまいちだった。やはり、魔物と戦う方が楽しい。

そのまま、資料室に入っていった。

やはり、強力な魔法は魔法語で書かれているんじゃないだろうか？
英語の本を探そうとやってきた。

第12話 ノワールの統治者

目的の本は見つかったが、埃をかぶってる。

この世界で魔法語を理解できる人はほとんどいないようだ。

面倒なので、王様みたいなところに乗り込もうと思うが、あまり荒立てたくない。

強力な全体拘束魔法を作ろう。

イメージは掴んでいる後はその方法だ。

グラビティとグラビトンがあるのでその重力系全体魔法グラビティワールド（重力全体拘束）だ。

この国の中枢は、ノワールから南下したラングという街らしい。

グラビティの応用技を使う。重力制御で推進するイメージだ。

グラビティフォース（重力制御魔法）。

グラビティフォースで一気に街道を南下する。使用するMPもそこそこなので連続使用する。

3日かかってラングの街に着いた。この国の中枢だけあってでかい街だ。

この国は共和国ということで貴族院と平院の2つから代表を選出される。任期は連続できる。

事実上は、10年連続して治めているジオクライオンという貴族が王様みたいなものらしい。

その場所に乗るも。

総統府というところにいるのは、分かっている。
城門からは入らず、グラビティフォースで城壁をくぐった。

総統府の衛兵をパラライズする。痺れているが見た目は立ってるからすぐにはバレないだろう。
どンドン、パラライズする。
中をくぐって行く。さすがに騒ぎ出したようだ。

まとまってきたので、グラビティワールドを発動する。
全員硬直した。

総統の部屋は目の前だ。

誰にも邪魔させない。

部屋のドアをブラストで吹き飛ばす。

目を白黒させているお偉い人がいた。これがジオクライオンか？

「お前がジオクライオンか？」

「龍殺しのダークエルフ！！なんでお前がここにいる！？」

「監視を俺に付けたな？俺は気に入らないものがあつたら龍でも軍隊でも国でも滅ぼす。監視なんて面倒なものをつけてお前は俺をどうしたい？」

「！？」

「俺にノワールの街をよこせ、統治してやる。龍の首に鈴を付けた

いんだろう？ノワールが鈴だ！だが、依頼は受けても命令は受け付
けん。依頼を受けるかどうかは俺が決める！これが俺の妥協点だ、
受けるかどうか今決める！」

言いたいことは全て言った。

「私の一存では、決められない……」

「だったら1日だけ待ってやる。俺の気に入らない答えだったらど
うなるか分かっているだろうな？」

とりあえず、1日、外でブラブラ見物でもしてこよう。

街がどうも慌ただしい。まあ、そうなるわな。

珍しい屋台料理でも齧りながら、武器屋と防具屋を覗いてみる。

その頃、総統院では、貴族たちを集めて議会を緊急招集していた。

「だから、ダークエルフにはなにもするなと言ったんだ」

「だが、監視をつけることには同意したじゃないか？」

「問題は、ノワールの街をダークエルフに渡すかどうかだ」

「ノワールは事実上この国の中心だ、渡せるわけがない」

「この国は迷宮があるからできたんだぞ、その迷宮を渡せるものか」

貴族は全員反対した。

「渡さなければこの国は破滅する、そうダークエルフは言ったんだ。ダークエルフが選択させたのは渡すか滅ぶかだ。お前たちはダークエルフと戦う気があるのか？」

ジオクライオンはただそう告げた。

「…」

「ウルズ連邦からの間者とギルドマスターの報告がこれだ。火系最上級攻撃魔法デストロイによる軍隊の壊滅、魔術師たちによる攻撃魔法はすべて無効、剣士と魔術師は皆殺し、将軍も含めて皆殺しだ！我々にはもう選択する余地はまったくないと私は思う」

ジオクライオンは結論づけた。

「渡すことにはもう反対しない」

全員がそう納得した。

「ノワールはダークエルフによる街になる。国の命令も受け付けない完全な自治だ、これでいいな」

第13話 ダークエルフの統治（1）

俺は、ノワールの街の執務室にいる。

迷宮の4階層に作りたいたいと言ったら反対された…。

まずは、開拓村の建設だ。

迷宮探索隊を作った。これで開拓民を作る。魔導院にも協力を仰いだ。

開拓民を作ったら、村の建設を行う。

場所は、森をデストロイで焼き払った。4つの開拓村ができた。あと2つは様子をみて追加する予定だ。

その周りに砦を築いた。冒険者には魔物討伐のクエストを発行した。

俺は、村の外壁を作らせている。いずれは街の外はすべて村になる予定だ。

迷宮から出る魔石は金になる。それをほとんど建設に回した。そのせいか、6年で外壁は完成した。

外壁内の森は焼き払った。今は田畑がそのかわりになっている。

農耕機具もできるだけ改良した。肥料は公衆トイレを作って回収する。

豊かになれば収入も増える。公衆バスの代わりに、公衆馬車も作っ

た。

特産品も作った。酪農によるバター、チーズ、それと酒だ。

今の問題は、人口増加だ。街の拡張が必要だ。衛星都市を作るとしよう。

一つあたり10年を目標にする。それで基礎を立ち上げる。

ノースノワールの街が立ち上がった。

次は、サウスノワールの街を立ち上げる。

俺は暇を見つけては迷宮に潜った。4階層は落ち着く。

ときおり地上に発生する火竜亜種は、グラビトンを撃ちまくって倒した。

そして、俺がノワールを手に入れてから30年が経過した。

俺ももう70に近いが、ダークエルフはどうやら長寿のようだ。見かけはまだ20代くらいだ。

全く年をとっている感じがしない。剣の腕もあがる一方で衰える様子がない。

ノースノワール、ノワール、サウスノワールと3つの街があり、当分はこれで人口を賄えるだろう。

ノースノワールは商業、サウスノワールは工業の街だ。工業は職人を雇いいれた。順調に街は成長している。

俺は正直、迷宮の戦闘だけでは満足できなくなっていた。
こういう仕事をするのも楽しいものだ。

ノースノワールとノワール、サウスノワールとの間にも公衆馬車を
走らせている。

行き来が盛んなので本数も多い。

何もかも順調だ。

今の總統からはなにも言ってこない。

さすがに、長く居座ったジオクライオンも引退しており、新しい総
統にはダークエルフには関わるなどでもないってあるんだろう。

たまに、火竜亜種討伐の依頼が来る程度だ。

そのくらいなら断ることもなく了承している。

火竜亜種は俺がグラビトンを撃ちまくるだけで死ぬから問題ない。

戦争も起きていない。

北のトルメキア帝国と伽盧皇国との間で小競り合いが続いたが収ま
ったようだ。

決定的なこともないまま長いこと小競り合いを続けていたので両国
とも疲弊したのだろう。

この国は俺がいることもあって平和だ。ウルズ連邦との戦いで領土
の割譲を受けたようだだがそれにも文句を言ってこない。

ウルズ連邦はおとなしくしているようだ。

不満があるとすれば、たまには狂戦士化して戦いたいものだが相手
がないくらいだ。

それと俺の領地と他の街の間にはあいかわらず魔物が出現するの
いまだに護衛をつけるしかない。
どうにかしたいものだ。

蒸気機関を作りたいのだが俺にはその知識がない。蒸気機関がほ
しい。

迷宮に関して言えば、ギルドに1階層12階と2階層12階に休憩
所を建てさせた。

無茶をするものがないようにランクに見合わなければ通さないよ
うにしている。

これで死亡率も減った。しかし、3階層のスペルオーガやスペルロ
ードで死亡する冒険者は絶え間ない。

こればかりはどうにもならない。

神官に関しても冒険者を増やすように努力はしている。以前よりは
増えた。

神殿や治療院の価格を抑えるようにはしているがそれでも儲けがお
いしいのだろう。

できればもう少し神官の冒険者を増やしたい。

魔導院についても費用を抑えるようにしている。魔術師を多く生み
出すためだ。こちらはうまくいっているようだ。

その代わりに援助金を出すことになったが、魔術師の育成も必要だ。
俺はもう魔導院には行かなくなった。あそこの資料室で必要なもの
は読みつくしたからだ。できれば禁書が読みたい。

マジックドレイン、マインドゼロも積極的に教えるようにしている。
マインドゼロはやはり禁書に相当していた。

愚かな事だ。あれを使えば、スペルオーガやスペルロードにも対抗
できるというのに阿呆か。

食事に関しては、以前の世界の料理をこの世界でもいくつかが再現させた。好評のようだ。

この街が食べ物の名所にもなっている。いいことだ。

後は、畜産にも力を入れている。主に乳牛によるバター、チーズの生産だ。保管方法に問題があるので牛乳は諦めている。

乳牛は、肥料も産み出すのでそれは農業に回している。評判は上々だ。俺はチーズ好きなのだ。

酒造の生産も拡大している。ワイン、焼酎、ビール、果物酒が主力だ。俺の好みは焼酎だ。

果物は腐りやすいので酒にするのがいい、味がいろいろと楽しめる。いつの間にかこの街最大の輸出製品になっていた。

みんな酒好きなのか。

今の仕事は、ノースノワール、サウスノワールにも外周に外壁を立てて、農地をさらに確保することだ。

開拓民は入れたが、外壁はすぐにはできない。気長に待つしかないだろう。

この国の農地は南の諸島に集中している。魔力が少なく魔物がほとんどでにくいからだ。

この領地からもっと配給できれば国も潤うことだろう。

私は、テオクラリオン、ジオクラリオンの孫だ。アルノール共和国の総統をしている。

今のところこの国は平和だ。忌々しいが、龍殺しのダークエルフのおかげだ。

一人で覇竜を倒し、一人で一国の軍隊も倒すという化け物だ。あの者がいるおかげでウルズ連邦もおとなしくしている。

ノワールの街を治めていたが、勝手に街を増やしているようだ。今では3つの街を治めている。

祖父からくれぐれも龍殺しのダークエルフには関わるなと言われている。

忌々しいが、言うとおりにしている。あの街には迷宮くらいしかなかったが今では商業、工業の街に変わっている。

農業も盛んで、南部の諸島から苦情がきている。今まで農業は南部の諸島が独占していたからだ。

その上、完全独立を宣言しているのであの領土が豊かになっても国にはあまり関係ない。

ノワール付近の街には影響があるらしく、豊かになっているようだ。

ノワールの街の方法を取り入れようとしている貴族もいる。

この国に強力な魔物が現れるとダークエルフが殺してくれる。関わるのはそれくらいだ。

ただ、ノワール産の酒はうまい。特に果物酒がうまい。チーズとやらもなにやらうまい。肉によく合う。じゃがバターも寒い時期にはうまい。

ダークエルフのやることはよくわからんが、アルノールの食生活が豊かになっている。

忌々しいがあの者の内政能力は高いようだ。貴族の中には宰相に押ししているやつが出てきている。

今のところ、ダークエルフには関わりたくないなので退けている。

第13話 ダークエルフの統治(1) (後書き)

正直、この手の話を書くのは苦手です…。

これでも原文から少しづつ省きました。少し省きすぎたかもしれませんが…。

第14話 エルフの訪問

俺が執務室に戻るとエルフがいた。

虎と狼はすでに冒険者を引退したそうさ。死なずに引退できるものは少ない。いいことだ。

竜人はいまだに現役のようさ。

「あなたが領地をもつなんて意外よね」

「覇竜も齒ごたえがなくなって、迷宮も昔と違ってつまらないんだよ、5階層がきんものかな」

「こないだも覇竜が地上にできてうちの国じゃ騒ぎになったわよ」

「あんなの魔法を撃ちまくればすぐ死ぬだろ」

「一人で覇竜を殺すなんてあなたくらいのものよ」

「まあ、この国でもノワール以外で出現すると俺が呼ばれるな。伽盧皇国は戦争していたが、やはり疲弊しているのか？」

「正直、景気は悪いわね。税金もあがってみんな苦しい生活をしているわよ、まあ、冒険者には関係ないけどね」

エルフもAランクにあがって金には困ってないようさ。

「あの狭苦しい迷宮でよく戦う気になるな」

「こっちの迷宮の方が難易度が高いのよ」

「一番難易度が高いのはトルメキアのような、一度行って見たかったが、今の俺には仕事があるので無理だ。それで何のようだよ、伽盧皇国に行く気はないぞ」

「ノワールの街と貿易を促進したいらしいのよ」

「それを言うなら俺じゃなくて総統に言え」

「伽盧皇国はあなたに宰相の地位を用意すると言ってるわ」

「興味はないとは言えないが、ノワールの拡大が今の俺の仕事だ、ここでほっぽり出すことはできんな。いずれは後2つ街を作るつもりだ、伽盧皇国ほどじゃないが小国くらいの力になる」

「それが伽盧皇国には気に入らないのよ。アルノール共和国だけどもんどん豊かになっているわ」

「戦争なんてする方が悪い。あれはすぐ解決できなければ国が弱るだけだ」

「戦争というものは始めるのは簡単だけど終わらせるのが難しいのよ」

「デストロイを2発くらい撃てば軍隊なんて壊滅するだろ、テスラは今一使い勝手が悪いしな」

「なによその恐ろしい魔法」

「デストロイは火系最上級攻撃魔法だ、テスラは雷系最上級広域攻

撃魔法だ」

結局、ファンデルワールスゼロは完成しなかった。

テスラはMPを恐ろしく食うため、俺でも1発しか撃てない。破壊力と攻撃範囲は最強なのだがな。

それとテスラは空から雷を補給するため、迷宮では撃てない。

「それって使える人は他にいるの？」

「発動できる魔術師がいないな、Sランクの魔術師でも撃てない」

「そういえば、相変わらず革製防具を着込んでるわよね、双剣もぶら下げてるし」

「これが動きやすいんだよ、それに街の兵たちに稽古も付けるしな、着替えるのも面倒くさい。俺の兵たちは強いぞ、俺が手塩をかけて育てたからな」

「それとトルメキア王国は西の山脈を超えて勢力を伸ばしているぞ
うよ」

「あそこは火竜亜種の生息地だから人は手を入れられないだろ」

「山脈を超えて南じゃなくて、西に向かっているのよ」

「そっちはエルフのパロアがあるんじゃないか？」

「それなのよ、パロアとトルメキアが戦争になるかもしれないわね」

「ふむ、俺も黒いが一応エルフだ、力にはなるぞ」

「それは助かるわ、パロワにもそう伝えておくわよ。でもここからパロワまではかなり遠いわ、トルメキアを通らないとかなり遠回りになるわよ」

「グラビティフォースで一直線で飛んでいけばそう遠くはない。それとも戦争になる前にトルメキアを潰してもいいぞ。これからパロアに向かうのか？」

「そうなるわね」

「それなら俺が連れていったほうが速いだろ」

「じゃあ、お願いするわ」

グラビティフォースを使って、1週間でパロワについた。

第15話 エルフの国パロワ

パロワ国のセントルシアの街についた。

「ここからどこに向かえばいいんだ？」

なんか視線が痛い……。早いとこ目的地に行きたい……。

「セントルシアの街の中心に王室があるわ、そこにいくわよ」

その城門には衛兵がいた。俺を入れてくれるのか？

エルフが衛兵となにやら話している。俺を指さしながら揉めているようだが、なんとか話がついたようだ。

王室とやらに入っていた。

「私が第一王子のガイラだ、ダークエルフがなんのようだ？」

「ここにいるのは一国の軍隊を一人で撃ち破った龍殺しのダークエルフです」

「そなたがそうか、噂には聞いている、確かセージといったな」

「はい、お初にお目にかかります、トルメキアと戦争になるんじゃないかと聞いてますか？」

「セージは、パロワを助けてくれるということなのです」

「既に、トルメキアはパロワの東に砦を築いている、軍隊も集めて

いるようだな」

「俺が撃つて出ましようか？、砦を軍隊ごと殲滅してみせますよ」

「待て、エルフはいきなり戦争をしかけるような野蛮なことはしない。まず使者を出してからだ」

「俺のことは伏せておいて下さい」

「なぜだ？お前の名を出せば向こうも引いてくれるだろうに」

「こういうことは、一度痛い目を味わわないと骨身に沁みないんですよ」

「分かった、そなたのことは伏せておくことにしよう」

実は、戦いを楽しみたいからだけなんだがな、言わないでおくことにしよう。

街に出ると痛い目で見られるので俺は王宮で時間を潰していた。

「お前が龍殺しのダークエルフか？私は第二王女のグラナダだ。お前の腕を見てみたい、うちの国の兵と戦って見ないか？」

「暇を持て余してたんです。いいですよ」

マジで暇すぎたのだ、いい暇つぶしができた、いくらでもいい。

「ガンビアを呼べ！」

王宮がざわついている、どうやら一番強い兵を呼んだらしい。

「私が將軍を務めているガンビアだ、お前が噂のダークエルフか、ちようどいい。一度戦ってみたかったんだ」

プレートメールを着ている、どうやら魔法職ではないようだ。

ちなみに俺のレベルは120だ。覇竜を何度も殺したがこれ以上は上がらないのだ。カンストってやつだろうか。

訓練場に出て、手合わせをすることになった。相手は両手剣をかまえている。

スピードよりパワータイプというやつだろうか。

相手が両手剣を振り回してくるが、俺にはスローモーションにしか見えない。隙だらけだ。

両手剣を避けて、試しにプレートメールの上から腹を思いっきり殴ってみた。顔をなぐると死ぬかもしれないからだ。

プレートメールが砕けて、盛大に吹き飛んだ。意識はあるようだ。

「もう一度やるか？何度でもいいぞ」

「参った降参だ…」

どうやら立てないようだ。全体回復を発動した。みるみる回復していく。

「お前は回復職なのか…、助かった、死ぬかと思ったよ」

「どうだ、うちの將軍の腕前は？」

王女さんがなんか言ってるが、正直に言うことにした。

「俺の兵たちの方が齒ごたえがあるな」

「うむ、どうやら鍛え方が足りないようだな、どうやって兵たちを鍛えているんだ？」

「基本を教えたら、迷宮に放り込む、迷宮では地上よりずっと成長が速いんですよ。後は、暇な時に俺が鍛えあげるくらいです」

「我が国には迷宮はないからな、弱いのもしょうがないのか」

「迷宮をもってる国の方が強いって言われてますからね」

そうやって兵の鍛錬をしていると、トルメキアからの返事がきたよ
うだ。

第16話 トルメキアとの戦争

「トルメキアは一步も譲らないそうだ、降伏を要求してきた、ふざけている！」

王子は怒っているようだ。

「では、俺は皆に殴りこみをかけてきますよ」

「わかった、トルメキアに攻め込め！」

俺はグラビティフォースをかけて皆に一気に近づいていった。

おもむるに、デストロイを撃ちこむ。

盛大に皆が吹っ飛んだ。

生き残りを狩る。全体強化を発動して狂戦士になった。

「最高の気分だぜ！」

俺と踊ろうぜ！！！！そして死ね！！！！

どんどん死ね！！！！もっと死ね！！！！

魔法が撃ち込まれる、レジストする、魔力と魔力がぶつかるのが気持ちいい！！！！どんどん撃ちこんでこい！！！！

俺と踊るやつはもういないのか！！！！

我に返ったが、やはり誰もいなくなっていた。

以前より齒ごたえがない。不完全燃焼だ。味方も殺したくなつたが抑えている。

殺気を放ちながら、味方の陣地に戻つた。やはり將軍を含めて青い顔をしている。

殺したいが、それはまずい、なかなか加護の影響が消えない。

仕方がない、俺は言った。

「トルメキアに攻め込む！！！！」

もう俺を止める奴はいない。

グラビティフォースをかけて近くの街が見えてきた。

踊る相手を見つけた！！！！殺しまくつた！！！！

自然と加護が発動していた、気分がいい！！！！最高だ！！！！

3つほど街を殲滅しただろうか？

やっと、気分が落ち着いた。

グラビティフォースでセントルシアの街に戻つた。

王子が出迎えた。

「かなりの働きをしたようだな、感謝する」

「俺もかなり楽しめましたよ。つい、砦以外に3つほど街を潰しちゃいました。降伏勧告して、その街を奪っていいですよ」

「分かった、トルメキアと交渉してみる」

俺は訓練場に戻ったが、全員ドン引きしている。

「將軍を呼んでくれ、相手をしてやる」

勘弁してくれと言われた。相手がいない。暇だ。

トルメキア帝国の首都、トルメキアンでは紛糾していた。

皇帝ナウルヴァーンは怒り狂っていた。

「砦に続き、街を3つも滅ぼされただと！相手の兵力はどのくらいだったのだ！」

「どうやら相手は一人だけだったようです」

「馬鹿を言え！たった一人だと！」

「ダークエルフが襲っているのを逃げた人々から目撃されています」

「龍殺しのダークエルフか！なぜやつがパロアにいる！」

「パロアがダークエルフに助けを求めたとか考えられません。それとパロアから降伏勧告が来ています。滅ぼした3つの街を要求します…。」

「街を3つもか！渡せるはずがないだろう！」

「ですが、要求を飲まなければ我々は滅ぼされてしまいます…。」

「どうにかならないのか？」

ここにきて、事態の深刻さに気づいた皇帝だった。

「どうにも交渉する材料がありません…。」

「渡すしかないのか…。」

「そうなります…。」

「アルノールに仲介を頼めないのか？」

「問者によりますと、アルノールの総統もダークエルフには命令できないようです、腫れ物に触るかのような扱いで期待はできません。しょう。」

「かまわぬ、使者を出せ！」

第17話 戦争の終結

アルノール共和国のラングの街、テオクライオンにトルメキアから使者が届いていた。

「あのダークエルフがトルメキアに攻め込んだそうだ…」

貴族たちに向かってそう言った。

「なぜやつがそんなことを!？」

「トルメキアがパロアを攻めたことがダークエルフの逆鱗に触れたようだ」

「それでどうなったのですか？」

「一人で皆ごと軍隊を潰して、そのまま3つの街を滅ぼしたと使者からきている」

「一人でですか？」

「そうだ。たった一人でだ…」

「それで我が国にどうしろと？」

「パロアからはトルメキアに3つの街を要求している。トルメキアは飲めないようだ。その仲介を頼まれた」

「ダークエルフは今どこにいるのですか？」

「どうやらパロアにいるらしい」

「総統は仲介をする気ですか？」

「前の総統からダークエルフの機嫌を損ねるなど言われているのだ。ようするに必要以上に接触するなということだ」

「とすると、どういっつもりですか？」

「使者を追い返すしかないだろう」

「それでトルメキアは納得するのですか？」

「我々にとってはトルメキアよりダークエルフの方が危険なのだ」

総統はそう言った。

「…、分かりました、トルメキアには悪いですがそうするしかないようですね」

トルメキアの皇帝ナウルヴァーン宛にアルノールからの使者が届いた。

「アルノールは、ダークエルフを止める気がないと返事がきた！仲介はしないと断っている！どういっつもりだ！」

「問者によるとアルノールは我が国よりもダークエルフの方を恐れているようです」

「想定内の回答かと思えます…」

「…、分かった、パロアには3つの街をくれてやれ…」

セントルシアの王宮で暇を潰していたがやっとトルメキアからの回答がきたようだ。

第一王子のガイラから呼ばれた。

「トルメキアから降伏条件を飲むと回答がきた」

「それはよかったですね、全面降伏ですか？」

「そうだ、賠償金も支払うと言ってきている」

「それでは俺もノワールの街に戻ります。俺が統治している領地ですからあまり留守はできないんですよ」

「そなたへの褒美はなにがいい？」

「別にいらぬですよ」

「そついう訳にはいかないなにが欲しいか申せ」

「それじゃ、ミスリルの製法を教えてください」

「その製法はパロアの外には出せんのだ、すまん。それ以外にしてくれ」

「それじゃ、ダークエルフのいる場所を教えてください」

「それは私にもわからないのだ、お前以外で見たことはない」

「それ以外には特に欲しいことはないです」

「そなたの願いを聞き入れなくてすまない」

龍殺しのダークエルフは帰っていった。

その後、王子は軍勢を連れて街に入った。

「これは、まるで地獄のような惨劇だな…、ガンビア。お前は、ダークエルフの戦いを見ていたそうだな、どうだった？」

「あれは悪魔のようでした…、思い出すと未だに震えが止まりません」

ガンビアは震えながら言い続けた。

「笑いながら敵を殺して行きました。その速さは目に止まらないものでした。風のような勢いでいつの間にか敵の血が吹き飛んでいく

一方的な虐殺でした、戦い終わった後は、腰が抜ける程の殺気を全身から発していました…。自分が殺されるのではないかと思いましたが…。まだ夢であるときのあの恐ろしい目を見ます…。そうすると全身が氷付きます…。その悪夢を未だに見ます…。」

そして、ガンビアは訴えた。

「あのものを敵に回したらいけません！その時は我が国は滅ぶでしょう…。」

第18話 トルメキアと伽盧皇国との戦争

エルフを連れて1週間かけてノワールに戻った。

特に異常はないようだ。総統からなにも言っていない。

久しぶりの戦争は面白かったが、以前ほどではなかった。物足りなさがあった。

どうやら、伽盧皇国がまたトルメキア帝国へと戦争を仕掛けたようだ。

よく飽きないものだ。まあ、自分には関係ない。

トルメキア帝国の首都、トルメキアンでは紛糾していた。

皇帝ナウルヴァーンは怒り狂っていた。

「伽盧皇国が攻めてきただと！」

「パロアとの敗戦を聞きつけて我が国が弱っていると思ったのでしよう」

「戦う兵力は残っているのか？」

「パロアの砦以外の兵は後方の街に待機させていましたが全滅しました」

「龍殺しのダークエルフのせいだ！他に兵はあるのか？」

「治安維持用に兵はいますが、それを出すとこの国の治安が荒れるかと思えます」

「平民から徴兵すればいいではないか」

「重い税で平民も苦しんでおります、この上、徴兵を行うと国内がさらに疲弊するかと…」

「かまわぬ、貴族達から治安維持の兵を集めさせよ！徴兵も行う！それとアルノールへ救援依頼の使者を出せ！この状況はアルノールのせいだ！」

アルノール共和国のラングの街、テオクライオンにトルメキアから使者が届いていた。

「トルメキアから救援依頼がきておる」

貴族たちを集めて議会を開いていた。

「トルメキアの危機はアルノールが原因だからトルメキアを救えと言うことだ、ダークエルフのせいでトルメキアには兵力がないそうだ」

「我々には全く関係ないではないですか！トルメキアが一方的にパロアを攻めたのが原因だ！」

「全くその通りだと私も思う、だが、伽盧皇国がトルメキア帝国を併合するのはまずい。龍殺しのダークエルフがいなくなれば、我々にも火の粉が降りてくるやもしれない。いつまでもあやつをあてにできないのだ」

「ではトルメキアのために兵を出すということですか？」

「いや、それよりいい方法がある」

第18話 トルメキアと伽盧皇国との戦争（後書き）

今回は短くてすみません。次回が長いのでこちらが短くなりました。
…。

第19話 ダークエルフの使者

俺に総統から使者が来た。討伐依頼か？

「手紙を一通、伽盧皇国の皇都へ届けて欲しいという依頼を持って参りました」

「宛先は誰だ？」

「那桜人皇王です」
ナオヒト

「内容はなんだ？」

「トルメキアと伽盧皇国との停戦依頼です」

「なんで俺なんだ？誰でもいいじゃないか」

「総統のご指名です」

「面倒な事は嫌いなんだがな」

「そこをなんとかお願いします」

「まあ分かった。届けばいいんだな、それ以外はなにもしないぞ」

「ありがとうございます」

なにやら土下座して総統の使者は帰っていった。

グラビティフォースでさくつと皇都に着いた。飛ばして3日だ。やはり走るのでは全然違う。レベル120になるともはや魔物の森で寝ていても、余裕で対処できる。

HPが高いので睡眠中に攻撃されても平気なのだ。まあ、それでも痛いんだが…。

久しぶりの皇都だ。懐かしいな。今になってみればいい思い出だ。

南の城門の衛兵にギルドガードを見せる。

なにやら怯えている。無言でスルーだ。

とりあえず、用事というのを先に済ませよう。

皇宮に向かう、衛兵がいたがアルノールからの使いだと言ったら通してくれた。

なにも見せずともダークエルフだから分かっているようだ。

宰相とやらに会った。真田政宗という名前だ。

「何用で参った？」

「アルノールの総統からここの皇王に手紙を届けに来た」

そういつて手紙を渡した。これで仕事は完了した。楽だぜ。

「それじゃ、帰るわ」

帰りに久しぶりに酒場にも行こうか。

伽盧皇国の皇宮では、緊急会議が行われていた。

「アルノールからの手紙が届いた」

「どのような内容ですか？」

「我が国とトルメキアとの停戦依頼だ」

「なにをふざけたことを！アルノールには関係がないではないか！」
「内容が問題なのだ。依頼を拒否すればダークエルフを差し向ける
ということだ。すでにあやつはこの皇都にきている、これは脅迫だ」

「龍殺しのダークエルフか！」

「あやつは、ウルズとトルメキアの軍を一人で潰した。今度は我が
国を潰すということだ」

「龍殺しのダークエルフを使うとは卑怯だ！」

「これをどうするか、皆の意見を聞きたい」

「暗殺をしてはどうでしょうか？」

「失敗すればこの国は滅びるぞ、それにあやつは覇竜よりも強い。普通に殺せるとも思えぬ」

「では、停戦を受け入れるということですか!？」

「停戦などしたくないから皆を集めたのだ、トルメキアを潰せるのは今だけだ」

「皇都にいるなら呼んでみればいいのではないのでしょうか？」

「あやつは我を嫌っている。呼んでも来ないだろう」

「宰相が会いに行くべきでしょう」

「なんで私が会いにいかなくてはいけないのだ! 機嫌を損ねれば殺されるかもしれないのだぞ!」

「では他に誰が行くというのでしょうか？」

「宰相にこの件は預けた、なんとか懐柔しろ!」

皇王は宰相に命令した。

「…、分かりました」

宰相はギルドに入って、窓口の女の子に声をかけた。

「ギルドマスターはいるか？」

「これは政宗様ではないですか、こんなところに何用でしょう？」

「龍殺しのダークエルフを探しに来た、どこにいる？」

「迷宮に潜っていったみたいですよ」

「いつ出てくるのだ？」

「分かりませんよ、最下層の10階までいくつもりなら翌朝になるんじゃないですか？」

「そこまで一緒について来い」

「無理ですよ、SSランクじゃないと死にますよ？」

「そのSSランクとやらを連れてこい」

「SSランクは龍殺しのダークエルフだけです」

「私に迷宮の出口で朝まで待てというのか？」

「誰が見張りに立たせましょうか？」

「そうしてくれ、私はここで寝ているから見つけたら起こせ」

俺は最下層にいる。出てくる魔物がノワールと同じでつまらん。

いつもと違う歯ごたえのある奴はいないのか？

うろつろと探しているがない…。

轟竜と出会ったが、探しているのはお前じゃない。グラビトンで殺した。

結局、覇竜と出会ってしまった。お前じゃない。グラビトンで殺した。

やはり、トルメキアに行かないと会えないのか？

でもあそこは行きにくいしな。軍隊丸ごと殺したし。

世知辛い世の中だと思ひ悩む。

やることもなくなったので地上にあがったら誰かいた。

「宰相がお待ちしております」

無視することにした。大統領の使者にも手紙を渡す以外、なにもしないと言っている。

「知らんがな」

グラビティフォースで城壁を超えて逃げた。ノワールへ帰ろう。

ギルドでは、徹夜でギルドマスターが報告を待っていた。

「龍殺しのダークエルフに逃げられました」

報告が来たのは、真夜中だった。以外に早く迷宮から出てきたようだ。

「政宗様起きて下さい」

「ダークエルフがでてきたか？」

「逃げられました、既にこの街を出たようです」

「城門の門番はなにをしていた！」

「この時間ですと、門は閉まっていますよ」

「では、どうやって出たのだ？」

「城壁を飛び越えてしまったようです」

「…、分かった、皇宮に戻る…」

皇宮では、真夜中に会議は招集された。

「宰相、お前はなぜ見逃したのだ！」

寝ていたとは言えない…。

「ギルドマスターに言って迷宮の出口を見張らせていました」

「それで逃げられたのだろうか？なぜお前がそこにいなかったのだ！」

「申し訳ありません！」

駄目だ、もう謝るしかない。

「過ぎたことはもう良い、問題はどつするかだ」

「もう停戦するしかないでしょう」

「軍隊はどうしておる？」

「国境で待機してます」

「呼び戻せ、停戦じゃ。トルメキアとアルノールにもそつ使者を出せ！」

第20話 新しい領地

トルメキア帝国の首都、トルメキアンでは紛糾していた。

皇帝ナウルヴァーンは怒り狂っていた。

「アルノールからの使者がきた。停戦させた報奨を出せというのだ
！」

「皇帝陛下、我が国の財政はすでに逼迫しております」

「どのくらい出せるのだ？」

「要求された金額の半分程度かと」

「無視した場合には、どうなるのだ？」

「確実に伽盧皇国が攻めてくるでしょう」

「では、どうすればいいのだ！」

「もう、分割払いということをお願いするしかありません」

「それで納得しなければどうすればいい？」

「領土を差し出すしかないでしょう」

「我が領土を渡せというのか！」

「それしか生き残るすべがございません」

「…、分かった、交渉はまかせる」

結局、アルノールは分割払いを認めず、領土の割譲をすることになった。

アルノール共和国のラングの街、総統府では議会を招集していた。

「トルメキアから割譲を受けた領土をどうするかだ」

テオクライオンもその取り扱いに困っていた。

そこはアルノールから最も離れたパロアとの国境線だったからだ。

「この領地を欲しいものは誰がいるのか？」

誰も欲しくないのだ。領地があればそこを守る兵力がいる。トルメキアとパロアに挟まれた領地なんて欲しくないのだ。

「ダークエルフに預ければいいのではないかと思えます」

押し付けるにはいい相手だ。

「他に意見はないのか？」

なかった。

「それでは、この領地はダークエルフに預けることにする」

俺はまた総統の使者が来たということ、相手をしている。

今度はなんだ？討伐以外なら断る気だった。

「おめでとございます、新しい領地をセージ様に与えることになりました」

言っていることが胡散臭い。

「それはどこだ？」

「トルメキアとバロアとの間になります」

「そんなものいらん」

「そう言われても、既にセージ様の領地でございます」

「それは、俺の好きにしていんだな？」

「左様でございます」

言質はとった。バロアにあげよう。

アルノール共和国のラングの街、総統府では議会を招集していた。
テオクライオンは頭をかかえていた。

「トルメキアから奪った領土をダークエルフがバロアに渡した」

「なにを勝手なことを！、一体どうするのですか！」

「ダークエルフにはなにも言えない、どうしようもないから議会議を開いたのだ」

「バロアからはなにか言ってきたのですか？」

「使者が既に来た。感謝して帰っていった」

「なにも言わなかったのですか！」

「ダークエルフの機嫌を損ねることはできないのだ、言えるわけな
かろう、それにダークエルフからも使者がきた」

「なにを言ってきたのですか？」

「好きにしていいた言われたのでバロアにあげた、そう言ってきた」

「誰がそんなことを言ったのですか？」

「私の使者だ……」

「どうにもなりませんな」

「私まぐじつにまならなごじつじ」

第21話 ダークエルフの統治(2)

俺は、仕事をしていた。

これでも採算や投資の配分というのを考えないといけないのだ。特産品やこの街特有の食べ物といったものがあるため、観光客も増えている。

公衆馬車は利益を出している。畜産、酒、工業品や商人からの売上も上々だ。

魔石も冒険者の死亡率を落ちるようにしてから増加している。設備投資に回せる資金も以前より増えている。

ただ、農業に対しては魔物対策や外壁の建築と実質赤字だ。課税も少なめにしてているせいなのだが、危険な街の外での仕事となるため上げる訳にもいかない。農業は割のいい仕事にしないと人が集まらないのだ。

兵を維持するにも金がかかる。魔物対策として砦に兵を常駐させるのもお金がかかるのだ。

治安維持といった仕事もある。職業の中で兵隊というものは、なにも利益を出さないのだ。

工業では、冶金がメインだ。

前の世界での便利な製品を次々と生産している。プラスチックはないのでそれは木で代用している。

ガラスも使用しているが、耐久性として木の方がいい。ガラスは酒の入れ物に必要なだ。

酒の売上に伴ってガラスの生産も上げている。これらの売上にも設備投資が必要になる。生産規模をさらに拡大す

るのだ。さらなるガラス職人、鍛冶職人の育成をしなければいけない。

問題は生産をあげても原料が不足気味なことだ。

これもどうにかしたいが、俺の領地以外のことだから手を出せない。あまりにひどいようなら鉱山を奪うか？

とりあえず、後回しにしている。

幸い、植林を考えなくても木は自然と増えている。邪魔なくらいだ。それくらいこの世界の森の繁殖力は高い。そりゃ、森だらけになるわけだ。

酒の生産についても拡大している。問題はやはりガラスだ。不足しているガラスの代わりに樽ごと販売することもしている。樽は木で生産できるからいい。

その点、畜産は楽だ。餌は自給か輸入すればいいのでいくらでも拡大できる。後は、発酵食品なのでチーズは紙、バターは油紙で包めばいいだけだ。ビニールが欲しいがないものはしょうがない。

あとは、医薬品と衣料品だがこれは諦めている。知識やセンスが俺には全くない。

自然と衣料品が増えるのに任せている。人が増えれば衣料品の需要も高くなるのに任せているのだ。

需要に生産が追いつかなくなるようなら、職人の育成もまた必要になるだろう。

唯一の医薬品は、アルコールだ。蒸留酒から作れるからだ。傷口の殺菌にも燃料にも使える。

意外と、アルコールランプは見栄えがいいためか受けている。薪や油よりは、炭もださないのもある。

元からこの世界にある冒険者向けの塗り薬も生産を上げている。効果は以前の世界にはなかったくらい高い。その分、価格も高いのだ。一般向けには高価なため出回ってなかった。それを改善する必要がある。

公衆トイレもそうだが、清潔さが高くないと病気になったりして死亡率があがる。清潔さを保つ必要がある。

ゴミの収集や焼却などの設備も清潔さを保つには必要だ。これにも金がかかる上に、利益を出さない。

だが、公共サービスにしないと利用する意味がないからだ。

ちなみに、ガラスや鉄類については廃品回収を推進している。材料が不足気味だからだ。エコも大事だ。

生産物が増えれば、自然と商業も活発になる。商業の街でそれらを販売しているからだ。

第二の商業の街を作る必要がある。これにもそろそろ着手しないといけない。最初は商業で2つ、工業で2つとなる予定だったが、商業で3つ、工業で1つは必要になりそうだ。

工業は、やはり原材料不足で生産をあげる限界がそのうちくるだろう。

工業の街はもともと余裕をもって大きめに作っておいたものもある。工場は大きな場所をとるからだが。

トータルでは黒字だ、それを工業への設備投資、外壁、街の建設に回すことにする。

商業の街の建設をいよいよ始めよう。第3の街だ。イーストノワー

ルとする。

建設のためには、人を外から雇わないと足りない。募集しないとなあ。

それと義務教育ではないが小学校を立てた。教育も必要だ。街に1つずつだが入学できるのはこの街の平民のみだ。貴族は勝手に勉強しろ。他の街の面倒はみない。費用は無料にしたが昼飯は持参させる。そこまでは金は出せない。

これでありたければ勝手に商人になれるだろう。商業を発展させる。イーストノワールに商人は必要だ。

アルノール共和国のラングの街、総統府ではテオクライオンは頭をかかえていた。

ダークエルフが人をどんどん集めている。なにやら新しい街を作っているようだ。

この国の人口がノワールへと集まっている。

元々、ノースノワールとやらとサウスノワールとやらは他の街よりも規模が大きいのだ。それをさらに増やそうとしている。

周辺の貴族からも苦情がきているが、どうすることもできない。

共和制をしいているため、基本的に国民の移動は自由だ。平院への投票権もある。

そうすることで貴族がむやみに税を重くすることを防いでいるのだ。

今までは、ノワールの街の視察をしていなかった。

事実上、独立を宣言しているからだが、一度様子を見てみる必要がありそうだ。

まず、文をダークエルフに出してからだな…。

第21話 ダークエルフの統治(2) (後書き)

苦手な回がまた来ました…。

ちよこちよこ修正やら削除やらを試みましたがこうなりました…。

第22話 総統の視察

俺が仕事をしていると総統からなにやら手紙が届いた。討伐依頼か？

総統が俺の街を見たいとか言ってきた。この街は独立を宣言してはいるが一応やつ国だ。断るわけにもいかんしな。

まあ、文句は言わせない。許可しよう。

総統がノワールにやってきた。街に近づくに連れてなにやら馬車を多く見かけた。頻繁に行き交っているようだ。

「なぜ、こんなに馬車がいるのだ？」

「ノワールは、この国でも一番の生産拠点ですから、商品の輸送が多いのです」

「なにを運んでいるのだ？」

「あらゆるものですな。食品、酒類、工業製品と衣料品、治療薬と言ったところが主なものかと思えます」

「なぜ、そんなに生産する必要がある？」

「総統もノワール産の酒をお好きではないですか、ダークエルフは物を作るのにこだわっているのですよ」

街に着くと予想を超えた規模だった。

「あの壁は農地を守っているのか、砦もある、こんなに農地を増やしおつて、南部から苦情がくるはずだ。街の中に行くぞ」

そこはサウスノワールの街だった。

「なにやらでかい街だな」

「この街はサウスノワールといって、鍛冶屋やガラス職人、工業製品を生み出す職人達の街です」

「それだけのために、こんなでかい街を一つ作ったのか、道もみんな石畳か、ラングでもここまで石畳をひいてないぞ」

「ここから問屋というところを経由して、ノースノワールへと運ばれていきます、それなので石畳の方が便利なのではないかと思いません」

「なぜ問屋などと面倒なことをするのだ？」

「さあ、そこまではわかりかねます」

ノワールの街に着いた。

「ノワールの街の外も農地か、どれだけ農地を作ってるんだ」

「さあ、できるだけ農地を増やしているようです」

「ノワールの街も賑やかだな、他の街よりずっと活気がある、それに街が清潔に保たれているようだな」

「ダークエルフはきれい好きのようですね、スラム街ありませんし、サウスノワールも清潔でした」

「ダークエルフはどこにいる？」

「ここの城の執務室にいるかと思います」

「まあいい、やつの顔はみたくない、ギルドにいくぞ」

「これはテオクライオン様、なに用でこちらへおこしになられたのですか？」

ギルドマスターのウオズニックだった。

「冒険者たちの様子を見に来た、やつが統治してからどのようなっている？」

「1階層と2階層の12階だけです。兵により休憩所を設けています、それだけで以前より冒険者の死亡率が下がっています」

「他にはなにかあるか？」

「魔術師と神官の数が増えています、特にスペルオーガを無効化する魔法を教えているようで、これも死亡率の低下につながっています」

「それはどのようなことをしたのだ？」

「よく分かりませんが、魔術師の育成に力を入れているようです、治療院の費用も下がっています」

冒険者にもなにやらいろいろと対策しているようだ。

「ノースノワールとやらにいくぞ」

「また、ここにも農地を作っている。どれだけ作れば気がすむのだ」

「ダークエルフは農業も好きそうですね、どうも農税をかなり抑えているようです」

「ノースノワールとやらは、商店がたくさんあるな、規模がでかい、さすが商業の街ということか」

「衣料品はこの街で作られているようです、それとここで農産物やサウスノワールの製品が売られているそうです。新しい街も商業の街になると聞いております」

「またこのような街を作る気か！だいたい分かった。帰るぞ！」

どうやら、ダークエルフは街を作る才能が高い。化け物のくせに内政にも能力を発揮しているようだ。貴族が宰相に押す理由も分かった。

それにノワールはラングよりもこの国にとって重要な街になっている。

今使っているアルコールランプもノワールで作られている。
もはや、ノワールはこの国になくてはならないものになってしまっ
たのが分かった。
ノワールの果実酒がないと困るしな。

俺が仕事をしているうちに総統は帰ったようだ。
無視していたが、ここにはこなかったので、用はなかったのだろう。
文句も言われなかったし、新しい街の建設を続けるとしよう。

第23話 ダークエルフの消失

10年がたった。俺も90才を超えているが、まだ若い。ダークエルフは何才まで生きられるんだ？

イーストノワールも完成し、今は農地確保のための外壁を立てている。

今度の外壁はノースノワールとサウスノワールをつなぐ外壁だ。これでさらに農地が増える。うれしい。

中学校を街に1つつつ立てた。もちろん無料だ。知識がないと職人は育たない。職人も必要だ。

それとやっとな願の蒸気機関が完成した。これで石炭の需要も増えるだろう。生産を増やしてくれるかな。

とりあえず、汽車をノースノワール イーストノワール サウスノワール ノワール ノースノワールと引いた。

もちろん、逆方向にも汽車を運行した。馬車より早くて便利だろう。貨物列車も走らせる。そろそろ、輸送に問題がでていたのでこれで解決した。

隣の街まで引いたほうがいいのだろうが、魔物がいるので今は無理だ。

ウエストノワールはまだ建設する必要はないだろう。

まあ、金もそんなにないしな。

それとトルメキア帝国もやっとな持ち直したようだ。

それでも帝国主義では民主主義に勝てない。トルメキア帝国はギリ貧になるだろう。

俺が仕事をしていると、総統から使者がきた。討伐依頼か？

「総統から依頼があります」

「面倒ごとなら断るぞ」

「アルノールの宰相に任命したいということですが、お受けいただけますか？」

やってもいいがしがらみはゴメンだ。

「自分の好きなようにしていいのか？それが条件だ」

しばらく、使者が帰って確認すると言っていたが、条件を飲んだよ
うだ。

「お好きにしてもいいということですよ」

「なら受けるぞ」

俺はラングの街にいる。宰相とやらをしている。

やることはノワールでやっていたことと同じだ。

まずは、衛生面の向上、治安の維持だ。

だが、金がかかる。

ノワールでは、街の発展と共に少しずつ始めればよかったが、今度は国単位だ。

まずは、街道の整備から始めるしかないか。

万里の長城ではないが、街道沿いに壁を張ることにした。

ノワールを中心に各街へと壁を張っていく。

これで大狼や一角ウサギ程度なら防げるだろう。

ラングではなくなぜノワールかというと、既にノワールはアルノールで最大の街になっていたからだ。

金はノワールから捻出することにした。鉄道を引いたことでさらに経済が活発になったのでこの国にとって金のなる木になっている。

各街と接続することでノワールの経済はさらに強くなっていくはずだ。

その途中で簡易砦を用意した。魔物避けの休憩所だ。野営する場所が必要だからだ。

国全体の5分の1まで壁と簡易砦を作ったところでラングとノワール

ルは接続した。

国全部の街道に対して壁と簡易砦を維持する金はない。

これが限界だろう。

このエリアは、全て石畳にした。

まずは、このエリアに対して設備投資する。

ノワールの周辺は商業の街にした。ノワールの生産物を回すことにする。

これだけで周辺の街は活性化した。

その金をさらに投資に回すことにする。

ラングは金融の街にする。その支店をこのエリアに拡大させる。

国が銀行に金を貸し、銀行が商人に金を貸すのだ。

ノワールだけでは、生産物が足りなくなった。

工業の街をさらに立ち上げる。その周辺を商業の街にする。

これの繰り返しだ。

やがて、このエリアは十分な利益をあげることになった。

外壁を作り、農業を立ち上げる。

公衆トイレを作る、肥料を農業に回すためだ。

酪農も行う。さらに肥料を生産する。

このエリアには、ゴミの収集を行い、清潔さを保ち、学校を建て、教育を身につけさせる。

所謂、ノワールを中心とした巨大なノワールを作ったようなものだ。

これでさらに資金ができた。

ここまでで20年が経った。俺は110才だ。まだ見た目は年をとってないようだ。なぞだ。

この国の南部は巨大な農地を作るつもりだ。そこに資金を注ぎ込む。

南部は、商業と農業のエリアだ。

街道を壁と簡易柵を建て街をつないでいく。

やがて、南部のエリアとラングが接続した。

ここを重点に、農業を拡大し、それを扱う商業の街を立てる。

ゴミの収集を行い、学校を立てた。

さらに20年がたった。俺は130才になった。

後は、東部と西部も巨大なノワールのようなエリアにした。それぞれ

れラングと接続している。汽車も走らせている。

これでほぼ完成だ。俺は170才になっていた。まだ見た目は若いのだ、なぞすぎる。

気づくとアルノール共和国は強大な国になっていた。

後は、富国をしたら強兵だ。

迷宮はノワールだけではない、小さい迷宮も点在している。それを使って兵士を鍛えるのだ。

少迷宮の確認は俺が直々に行った。

それは、とある少迷宮でのことだ。あの光景を見たのだ。

そう、ゴブリンシャーマンによる召喚術だ。

俺はかまわずその魔法円に飛び込んだ。

そして、龍殺しのダークエルフはこの世界から消えた。

第23話 ダークエルフの消失（後書き）

今回で2章は終わりです。

内容は本来は2話分をまとめたのでちょっと簡略化しました…。

次は未来とロボットの世界です。一応帰還編とするつもりです。

第1話 アヴェルアーカ

ここはどこだ？

街並みが見える。元の世界に近いが廃墟だらけだ。ビルは崩れかけ森に飲み込まれている。

探知を発動した。今では500mまで探知を発動できる。レベル1
20は伊達じゃない。

探知に引っかかった。どうやら意識があるが奪えない。機械のような生物だ。

近づいてみるとそれは機械で出来た巨大な蠍だった！

蠍が俺を発見した。体から銀粉を出している。銀粉により探知が障害された。ブラストを打ち込んでみた。

レジストされた。蠍が向かってくる。俺はグラビティフォースで逃げた。

どうやら、蠍の大群が追ってきているようだ。街をでるところで、蠍の大群に雷系最上級広域攻撃魔法テスラをぶち込んだ。

蠍の大群は全滅した。

街に戻って死んだ蠍を観察してみた。やはり、機械でできている、なんだこれ？

どうもあの銀粉は魔法を阻害する効果があるようだ。チャフみたいなものか？

あれを突破するには実弾が必要だろう。それもかなり強力なものが
必要だ。相手は機械の鎧を来ている。

魔法で実弾を生成して撃ちこむってというのはどうだろう？

名前は実弾系中級攻撃魔法バレット（貫通弾）。作ってみよう。

森で飯を調達しながら試行錯誤していたらなんかできた。これも魔
導院の資料室を読みあさったおかげだろう。

街で機械の巨大蠍を探す。…いない。

本当に全滅してしまったようだ。

もっと探してみよう…。なんか出てきた…。機械の巨人だ。ビルほ
どもある高さだ。

こいつで実験だ。近づいてみると銀粉を出し始めた。実弾系中級攻
撃魔法バレットを撃ちこむ。当たった、が効いてない…。

銀粉を大量に出し始めた。まずい、飲み込まれるとおそらく魔法が
効かなくなる。グラビティフォースで逃げる。

巨人は足が遅かった。遠くから見るとなにやら胸のあたりが丸
く赤く光っている。機械の鎧はそこにはなかった。

某光の国からやってきた正義の味方か？いやいやいや、あんな形し

てないし敵としか思えない。

あそこなら効きそうだな、弱点なのか？。銀粉の外からバレットを撃ちこんでみる。びくともしない。

こうなったら赤い部分に集中攻撃だ。バレットを撃ち込んでみると赤い部分が黒ずんできた。効いてるのか？

グラビティフォースで距離を取りながら、さらに撃ちこんでみると巨人は倒れた。観察してみるとやはり機械だ。

やはり、正義の味方ではなかったようだ。あれは機械じゃないし、背中にチャックを付けた人間だし。

どうもバレットは威力が足りないようだ。相手がビルほどもある巨人だからもっと強力な魔法が欲しい。

ギガバレット（超貫通弾）を作ってみよう。森で飯を調達しながら作った。実弾系上級魔法ギガバレットだ。

この魔法は今の俺のMPでは、5発くらいしか撃てないだろう…。燃費が悪い、使えるのか、これ？

巨人を探しに街に戻った。巨人を見つけた。やはりでかい…。また銀粉を出している。

距離をとりながら胸にギガバレットを撃ち込んだ。一撃で死んだ。これって巨人があと4体でできたらアウトだな。

相手は機械だからマジックドレインも効かなそうだな。問題がありす

ぎる。機械の敵の意識はみんな奪えないようだ。

街の探索は諦めた。巨人よりすごいのがでてきたらこちらのMPが尽きる。

ギルドカードをみた。おお、レベル122だ。久しぶりにレベルがあがった。巨人は覇竜よりも経験値が高いらしい。

俄然、ヤル気がでた。探索を続ける。巨人をもっと倒そう。

結局、巨人は5体しかいなかったようだ。レベルは130でとまった。

分かったのはギガバレットを撃つより、バレットを連射する方が燃費がよかった。

実弾系の魔法を増やそう。実弾系中級魔法アーマーピアシングハイエクスプロッシップ（徹甲榴弾）だ。

機械の鎧を貫通し、内部爆発する魔法だ。使えるのか、これ？なんかバレットより発動に時間がかかるんだが…。

街を探索した。迷宮と違って機械の敵は復活しないようだ。もう、敵はいないようだ。

街を南下してみる。なんか機械の巨大な狼が機械の巨人と戦っている。ある意味シユールだ。

狼が勝ったようだ。遠くから眺めてみると狼から人が降りてきた。

初めて、人を見つけた。言葉は通じるのだろうか？近づいてみた。

英語を喋ってるようだ。これなら通じる。

「あなた、こんなところでなにしてるの？この街は機人のエリアよ」

「近くに人のいる街はないかな？」

「この近くだとネロディの街になるわね」

「案内するわよ」

機械の巨大な狼に乗って進んでいく。

「この狼はなんなの？」

「あなたそんなことも知らないの？これは武装獣フェンリルよ。レックス製なのよ」

「レックスってなんなの？」

「はあ…、ほんとになんにも知らないのね、レックスは国の名前よ」

「私は冒険者のアヴェルアーカ、あなたの名前は？」

「セージっていいいます、冒険者になりたいんだけどどうすればいいの？」

「ギルドに登録すればいいのよ、でもあなた武器をもってるの？」

「双剣なら持ってますよ」

「そんなの何に使うのよ、機人には通用しないわよ」

「魔法なら使えますよ」

「機人には魔法は通じないわよ」

「対機人用の魔法があるんですよ、実弾系攻撃魔法です」

「なによそれ、聞いたこともないわ」

「機械の巨人も倒しましたよ」

「正直、信じられないわね」

「あの街の機人はすべて倒しました」

「そういつなら行ってみてもいいわよ」

機人の街に戻った。ネロデイに行きたかったのになあ。

「あそこに倒れているのが機械の蠍、巨人はあっちに倒れてます」

「ほんとにあなたが全部倒したのこれ？」

「そうですよ、実弾系攻撃魔法で倒しました、撃ってみせましょうか？」

「そうね、見てみたいわ」

「バレットー！」

ビルの一部が吹き飛んだ。

「ほんとに魔法なのに実弾なのね」

ネロディに着いた。アヴェルアーカのフェンリルに乗って付いてきたのだ。

俺はギルドに入って窓口の女の子に声をかけた。

「ギルドに登録したいんですけど」

「武装獣は持っているの？」

「もってないですね」

「じゃあ、簡単なクエストから受けることになるわね」

「それでいいですよ」

ギルドに登録したので外にでたら、アヴェルアーカがいた

「ねえ、セージ、私と組まない？」

第1話 アヴェルアーカ（後書き）

新しい章が始まりました。今回は主人公の能力がほとんど封じられた世界のはずです…。

第2話 世界の状況

「組んでもいいよ」

実弾系魔法は効率が悪い。一々物質を生成しないといけないからだ。仲間がいた方が便利だ。

俺はアヴェルアーカとPTを組むことにした。

「まずは機人の街の倒した機人を回収しましょう、あれは高く売れるのよ、あなたは車を運転できるの？」

「車を運転したことはありませんよ」

「じゃあ、私のトラックに乗り込んで頂戴」

やけにでかいトラックに俺は乗り込んで、機人の街まで行く。

「まずはジャイアントの部品を回収するわよ」

「こんなでかいの乗らないよ」

「解体して部品をもっていくのよ、その車のアームはそのためにあるのよ」

アヴェルアーカは器用にジャイアントを解体して部品を回収していた。

スコープオンという蠍たちも解体して部品を回収していく。

俺もグラビティフォーサーで手伝った。これは重力制御魔法なので物も運べるのだ。

スコープオンからは主に魔石を取り出した。この世界にも魔石はあるのか。

魔石は魔導機関に必要なしい、フェンリルやトラックも魔導機関で動いている。

スコープオンを全滅させたことで大量の魔石が手に入った。

でかいトラックはなにやら山盛りになった。これで動くのか？積載オーバーじゃない？

思った通り、のろのろとしか動かない。これでネロディの街までいくんかい…。

途中で盗賊に遭遇した。どうやら治安が悪いようだ。盗賊も武装獣をもっている。4機だ。

やはり、動物の形をしている機械の虎や狼だ。

ブラストを撃ち込んだところ、撃破したようだ。動かなくなっている。

武装獣には魔法が効くから楽に倒せる。

「あなたの魔法ってスゴいわね、また収穫が増えたわ」

「これもトラックに載せるの？もう載らないよ？」

「街まで行って、トレーラーを借りてくる、あなたはここで待って

て」

暇をつぶしていると、なにやらトレーラーが4台きた。そのまま持っていくようだ。

結局、トラックとトレーラー4台、あとはアヴェルアーカの武装獣を連れて街に戻った。

「今回は、大儲けね、こんなに儲かったことなんてないわ」

とりあえず、この世界のことを聞いた。

この大陸はユーラシア大陸というらしい。…？、すごく聞き覚えがあるんだけど。

どうやら元の世界に戻ってこれたらしい…、俺の世界ってこんなんだっけ？

機人は500年前に宇宙からやってきたというのが定説らしい。SFなのか？ファンタジーじゃなかったのか？

機人による侵略により、人類は善戦したが、やがて追い詰められていった。石油の枯渇だ。

それを救ったのも機人だった。ようするに機人から取れる魔石だ。

魔石により魔導機関を開発したが、魔力がないと魔導機関を制御できない。

そこで魔力をもつ人造人間を作ったそうだ。

エルフ、ロード（鬼）、ヴァンパイア、ハイヒューマンだ。

人類の反撃がはじまった。人造人間の大量生産と魔導機関による武装獣だ。

人造人間たちはその魔力で魔法を開発した。攻撃魔法の発明だ。さらに、人類は機人を攻め立てていった。

それに対して機人はジャマー、そうあの銀粉だ、これを身につけることによって、膠着状態になった。

魔導機関や魔法はこのジャマーによって阻害されてしまうのだ。

武装獣は、最初は魔導機関による魔導砲や攻撃魔法により戦っていたが、ジャマーによって実弾を使うようになった。

戦いが続くにつれて人類は疲弊していった。それが今の世界だ。

今では人造人間の生産は廃れてしまったそうだ。

だが、人造人間は、生殖能力があった。人造人間はその魔力の高さで未だに生き残っているらしい。一方、魔力がない人間は機人に殺されていった。

この500年で人類の大部分が人造人間で、残りはそのハーフということになった。…、ダークエルフはいないの？

そう、俺の姿はダークエルフのままなのだ…。

ちなみに人造人間同士のハーフというのは珍しいそうだ。例えばハイヒューマンとロードからはどちらかしか生まれない。

稀にハーフというのが生まれるのだ。人間と人造人間の間には子供はできないそうだ。

なので人間は滅亡危惧種ということらしい。

ここはヨーロッパのドイツらしい。ドイツという国はなくなった。当時の国はほとんど滅亡したということだ。

この国はレックス連邦共和国というドイツ周辺の国が集まった大国だ。

西欧ではイングランドが機人の一大拠点となっている。

そこからマザーシップという飛行空母で機人をどんどん投下していつてるようだ。

ここをレックス連邦共和国とサウスランド連邦共和国が担当している。

サウスランドは、フランスと南欧を合わせたような国だ。

北欧では、スカンジナビア半島が機人の一大拠点となっている。ここはモスコヴィア連邦共和国が担当している。

モスコヴィヤは東欧、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、西ロシア周辺を合わせたような大国だ。

欧州連合はこれに加えて2つの国家があるらしい。

イタリアからバルカン半島周辺までを統合している中欧連邦共和国、黒海周辺、中東周辺からなる西アジア連合国がある。この2カ国の主な担当は北アフリカだそうだ。

中央アフリカと南アフリカを機人が抑えているため、北アフリカの維持をこの2国が担当している。

北アフリカを機人に突破されると地中海や中東まで侵入されてしま
うからだ。

北アフリカは戦場なので欧州連合を共同管理しているが、実質はこ
の2カ国が管理しているそうだ。

「東アジアではどうなってるの？」

日本や朝鮮半島を機人の拠点にして中国やシベリアを攻め立ててい
るようだ。東アジアやシベリア周辺をまとめているのが東亜連邦共
和国だ。俺の故郷は無くなっているのか…、泣いた。

「アメリカは助けってくれなかったのかな？」

一応聞いてみた。

最初に機人に狙われたのがアメリカだったそうだ。今は中央アメリ
カまで機人が攻めていて、それどころじゃないらしい。

以上がこの世界の状況だ。

第2話 世界の状況（後書き）

今回はこれから起こる物語の世界観です。そこそこは地球なのです。説明書きが長くなっていますみません…。

第3話 武装獣フェンリル

「これだけのお金があればあなたの武装獣も買えるわよ」

どうやら俺はエルフの突然変異と思われるらしい。アヴェルアーカはロードだ。たしかに角が2本頭に生えてる。

鬼の角というよりヒツジの角みたいにくるくる曲がっている。

武装獣を買うことになった。俺としてはパワーよりスピード重視で選びたい。攻撃力よりは回避力だ。死にたくはない。

ロキというのがよさげだ。武装的にはアサルトウルフか。

「2足歩行の武装獣はないの？」ロボットは漢のロマンだ、一応聞いておこう。

「そんなのないわね、6足歩行ならあるわよ、キャノンタランチュラがお薦めかしら」

回避能力的にどうだろう？フェンリルよりも二回りくらいでかいよ、これ。火力重視型のように見える。

色々悩んだが、同じ部品を共用できるということで武装獣としては高価なフェンリルになった。ちなみにキャノンタランチュラはもっと高かった。まあでかいしな、あれ。

大量の魔石や部品を持ち込んだことでギルドのランクがあがった。GランクからBランクだ。Aランクでもおかしくないということだが、いきなりAランクにはできないようだ。アヴェルアーカはAラ

ンクだ。

この世界にはレベルというのはないようだ。まあ、レベルアップなんてファンタジーだしな。

ただ、機人を倒すと魔力があがるそうだ。魔石があるからだろうか？

購入したフェンリルには2門のキャノン砲が両肩に付いている。アヴェルアーカのフェンリルには4門のキャノン砲がついている…、なぜだ？

「なんでアヴェルアーカのフェンリルにはそんなにキャノン砲がついてるの？」

「私のフェンリルは魔導機関をチューニングして出力をあげているのよ、それで武装も多く積めるようになってるの。お金はまだあるから同じ仕様にできるわよ」

そうして貰った。武装が多いほうがいいような気がする。よくわからんけど。

「武装獣があるから討伐クエストが受けられるわよ」

まずは、試運転だ。

「武装獣を試しに動かしてみたいよ、いきなり戦つのは無理…」

「それなら私が相手をするわ、手加減してあげるわよ」

武装獣に乗り込む、双剣が邪魔だ…。

コクピットは銃を撃つトリガーとモニターのようなものがあるだけで、操縦桿がない…、なぜだ？

アヴェルアーカのフェンリルが近づいてきた。

「魔力で機体を操るのよ」

なるほど、そういえば魔力で制御するとか言ってたな。

魔力を体から放出するとフェンリルが反応した。走るイメージで魔力を動かしてみる。

よたよたと走った…。なんだこれ。

練習するうちにちゃんと走れるようになった。むしろ、速度がぐんぐんあがっている。急カーブも軽快だ。

モニターを見る。意識するとそこにポイントが浮かび上がる。トリガーを引くとフェンリルがそちらに向き直ってそのポイントにキャノン砲が撃ち込まれた。固定砲なので姿勢を変えるのか、まあ、そうなるわな。

トリガーは4つある。4門のキャノン砲があるからだろう。

アヴェルアーカのフェンリルと並走した。こちらの方が素早く速い。おそらく俺の魔力の方が強いからだろう。

「あなたのフェンリルは異常に速いわ、魔導機関のチューニングはいらなかったんじゃないの？」

まあ、やってしまったものはしょうがない。

「さっきの機人の街にいつてみるわよ」

アヴェルアーカの速度に合わせて、付いていった。

さっそく機械の蠍がいた、スコープオンだ。こちらを見つけてジャマーを展開している。マザーシップがもう来て機人を補充していたようだ。

弾がもつたいないのでフェンリルに乗りながら、実弾系中級攻撃魔法バレットを撃つ。機械の蠍が壊れた。

わらわらと蠍が出てくるのでバレットを撃ちまくる。スコープオンの攻撃は、尻尾からミサイルを撃つようだ。

それにスコープオンに取り付かれたらジャマーで魔導機関が停止して動けなくなる。

スコープオンの攻撃を避けながらバレットを撃つ。まだ、ジャイアントの補充はされていないようだ。やつがいないと経験値が上がらない…。とりあえず、スコープオンは殲滅した。

倒した魔石を集めている。

「あなたの魔法があるとスコープオンを倒すのが楽ね、本当ならこんな数を相手にしてたらやられてたわよ」

そりゃ、キャノン砲を打ちまくったら弾切れになるわな。それとキャノン砲の欠点は撃つ時に姿勢を変えるため動きが止まることだ。

固定砲なので走りながら撃てない。そこをスコープオンに襲われたらやられるだろう。

「そろそろ、ネロディの街に戻るわよ」

今度は盗賊は出なかった。さっきので全滅したようだ。

「珍しい魔法だな、聞いたことないぜ、っていつか黒いエルフなんてはじめてみたよ、どこから来たんだ？」

「ずっと東の方です」

「そうすると中国あたりか、あつちの方はどうなってるんだ？」

知らんがな、まあ、話を合わせておくしかないか。

「こちらと同じで機人と戦ってますよ」

「そのくらいでいいでしょ、最近起こった珍しい話とかないの？」

「この北の街でドラゴン型の機人がでたそうだ、今人を集めているみたいだな、既にやられたパーティがでてるぞ」

「北っていうとムトルム？ドラゴン型っていうのはこちらへんでは珍しいわね、私達もいつてみようかしら」

「ドラゴンってどのくらいの大きさなんですか？」

「ギガースの半分くらいの大きさらしいぞ」

どうやら、ギガースとはジャイアントのさらに5倍巨大なやつらしい。つまり500mだ。ギガースって覇竜よりもずっと大きいじゃないか！それを実弾系魔法だけで倒すのはちょっと無理がないか？出会わないようにしましょう。

当分、アヴェルアーカと同じ宿屋に泊まることにした。

フェンリルはギルド専属の整備工場に預けたままだ。

ドラゴン倒せばレベルがあがりそうだな、と思いながら寝た。

俺はフェンリルのキャノン砲に徹甲榴弾を装填した。

貫通弾だと1門につき18発だが、徹甲榴弾になると10発に落ちる。

4門あるので40発だ。

アヴェルアーカは貫通弾を選んだ。

量より質だ、逃げ回りながら撃つつもりだ。これで足りるか？

ちなみにドラゴンも丸い光る部分が弱点らしい。これは、エナジーサークルと呼ばれている。

強さの順でエナジーサークルは、下位が赤、上位が青、その上が白へと色が近づいていく。

ドラゴンのエナジーサークルもジャイアントと同じ胸にあるようだ。色は紫だ。赤と青の中間色といったところか。

また、スコープオンを複数引き連れているらしい。

集まったのは、14機の武装獣と2台の弾薬を載せた補給車、そして大型のトラックだった。

やはり、狼型と虎型が多い。4機はキャノントランチュラだ。可動式のキャノン砲を8つも搭載している。動く砲台に近い。

キャノントランチュラ4機が後衛で、その他の10機が前衛ということになった。

キャノントランチュラはなにげに人気の機体のようだ。後衛の定番というところだろうか。

前衛の仕事はスコープオンの排除とドラゴンを引きつけるという役

割だ。その間にキャノンタランチュラがドラゴンに攻撃をかける。アヴェルアーカが貫通弾を選んだ理由が分かった。スコープオンを撃破するには弾数が多く必要だ。

ムトルムの街に入ると一匹のスコープオンに見つかった。その後は、あちこちからスコープオンが集まってきた。

10機の前衛がスコープオンの相手をする。俺はここで徹甲榴弾を使うわけにはいかず、バレットで応戦した。ここを突破しないとドラゴンに近づけない。機動力が低いタランチュラは後方から攻撃している。

この付近のスコープオンを片付け終わった時には、運悪くスコープオンの攻撃を受けた2機が脱落した。2台の補給車が2機を街の外まで引き上げていく。他の武装獣は補給車から弾を補充した。

残りの武装獣は12機しかいなくなった。

そういえば、ドラゴンがどんな攻撃してくるのか聞いてなかった。まさかビームとか撃たないよな…。

街の中心近くでドラゴン型の機人をみつけた。

いきなり、炎の弾を打ち込んできた。これを避けながら前衛の武装獣はスコープオンを駆逐していく。

俺は徹甲榴弾をドラゴンの胸に撃ち込んだ。なかなかエナジーサークルの色が変わらない…。

ドラゴンに徹甲榴弾を撃ちこむたびに、スコープオンにバレットを撃ちながら機体を回避させている。スコープオンの攻撃がくる。数

が多い。まじうざいよ、スコープオン。炎の弾もひつきりなしに降ってくる。どんな無理ゲーだよ。と思いながら徹甲榴弾を撃ちまくる。

そろそろ、スコープオンの数も減ってきた。気がつくと動いている前衛は8機から5機に減っていた。

エナジーサークルの色も変わってきている。黒づんできている。

後衛のキャノントランチュラもドラゴンに攻撃をしている。後衛って楽じゃね？と思いながら動きまわる。

止まったらヤバイ。スコープオンの数がさらに減ってきたのでバレットからギガバレットに変える。

ドラゴンも弱ってきているのでそろそろトドメをさせるだろう、2発で沈んだ。

後は残りのスコープオンを片付ける。

戦いが終わっていみると前衛の武装獣は4機に減ってきた。

キャノントランチュラは3機になっていた。1機は炎の弾にあたったらしい。

14機が7機か。半分が動けなくなった。さすがドラゴン強かった。というかスコープオンがうざすぎた。

動けなくなった7機のうち4人が死んでいた。アヴェルアーカは無事だったようだが、無傷とはいかなかったようだ。

スコープオンの魔石やドラゴンの部品を回収してトラックに載せた。ドラゴンは魔石以外にも使える部品が多いようだ。

街の外で待機していた補給車に戻り、アヴェルアーカのフェンリルは簡単な応急処置をしたようだ。

トレーラーも呼んで、動かなくなった7機を連れて帰った。俺達は
その護衛をしてネロディに戻った。

俺はレベルが4つもあがった。レベル134だ。

ギルド専用の整備工場に武装獣を預けて、酒場に行った。

「今回はキツかったわね、あなたの最後の魔法がなかったらもつと
被害が出ていたわ」

ギガバレットのことを言っているようだ。

「スコープオンがいなかったら、5発はあの魔法をドラゴンに打ち
込めたんだけどね」

「機体の修理分を除いても今回も儲かったわよ」

「俺のフェンリルのキャノン砲を可動式にできないのかな？」

フェンリルが撃つたびに姿勢を変えるので、動きが一瞬止まるのが
とても嫌なのだ。

「可動式にすると重くなるわよ」

「キャノンタランチュラみたいな全可動はいらないんだ、前方だけ
撃てるように少し可動するだけでいいんだよ」

「それならギルドの整備士と相談してみるしかないわね」

整備工場で工場長のバセルカムと相談してみた。

「お前が最近きたエルフか、ドラゴン退治でAランクになったそうだな、あまり無茶すると死ぬぞ」

「俺のフェンリルのキャノン砲を前方の敵が撃てるくらいの範囲で動けるようにして欲しいんだけどお願いできますか？」

「キャノンタランチュラみたいな全可動じゃなくていいんです」

「それは特注になるぞ、その機構がどれくらいの重さになるかは作ってみないとわからないがいいか？」

「それをお願いします」

多少重くなっても俺の魔力でなんとかなるだろ。撃つたびに止まるのはどうしても嫌なのだ。

「私のフェンリルも動くことは動くんだけど、ドラゴンとの戦闘であちこちガタがきてるのよ、修理をお願いね」

2人とも武装獣が当分動かせないのよ、その間にクエストをやることになった。

第5話 亜獣

人類が大量生産して破棄した亜獣というのがいるのだそうだ。その討伐だ。

代表的な亜獣がヒドウンウルフヤソニックタイガーだ。知能が高く魔法も操るらしい。元々は、ジャイアントやスコープオンに対抗して作られたらしいがやがてジャマーによって不要になってしまったそうだ。だが、この亜獣は、巨大なので武装獣が必要だ。

あのジャイアントを狩っていたくらいだし、かなりでかそうだ。

「Aランクなら保証金が必要になるけど武装獣をレンタルできるのよ、あなたも今回のクエストでAランクになったし、このクエストを受けましょう」

借りれる機体は1種類しかないらしい。アサルトウルフだ。機械の巨大な狼に2門のキャノン砲を載せている。

「フェンリルとどこか違うの？」

「製造している国が違うのよ、東亜連邦製よ、それにフェンリルの方が性能はずっと上ね、射程距離も短いから気をつけてね」

亜獣にはジャマーがない。実弾系魔法を使わなくていいなら俺にはいいカモだ。

さっそくレンタルして試運転をしてみた。確かに、アサルトウルフはフェンリルより遅いし瞬発力も落ちる。

クエストは南のカーサスガルという街外れの森にいるヒドウンウルフの討伐だった。4体いるようだ。

アヴェルアーカと2人でアサルトウルフに乗って、カーサスガルの街へ向かった。そして、森に入ってしまった。俺には探知があるのだ。昔より有効範囲が広いから見つかるだろう。500mだ。

「ここらへんにいるらしいわよ、気をつけて」

探知でヒドウンウルフの群れを見つけた。

「この先にヒドウンウルフがいるよ、4匹いる、こっちだ」

ヒドウンウルフは尋常じゃなく速かった。瞬発力がすごい強力なのだ。迷宮の4階層にいた大猿よりさらに速い。相手の攻撃魔法はレジストしているが、こちらから攻撃しないと終わらない。

サンダーウェブで1匹捉えてグラビトンを撃って殺した。残り3匹だと思ったらアヴェルアーカが魔法をくらっている。悪いがアヴェルアーカを囮にしてサンダーウェブを撃つ、捉えた2匹をグラビトンで殺した。最後の1匹は逃げてしまった。ヒドウンウルフは速すぎてアサルトウルフでは追いつけない…。

逃がしてから気づいた。意識を奪えたんじゃないし？ 機人じゃないし。機人とはかり戦っていたのですっかり忘れてた。

3匹の牙を双剣で剥ぎとった。これってクエスト失敗じゃね？

「ごめん、やられたわ、この機体はもう動けないの」

「カーサスガルからトレーラーを借りてくるしかないね、ちょっと行ってくる」

アヴェルアーカのアサルトウルフをトレーラーに載せてネロディに帰った。

やはり、クエストの報酬金はでなかった。アサルトウルフの修理代がかかったので今回は赤字だった…。

「今回は失敗ね、ヒドウンウルフは無理だったわ」

というか、速すぎだろあれ。大猿より速いって昔の人類がんばりすぎだ。あれは生き残るわ。

「フェンリルが治るまでゆっくりしようよ」

俺のフェンリルならヒドウンウルフに勝てた。アサルトウルフは駄目すぎる。

「そうするわ、アサルトウルフは駄目ね」

ならレンタルするなよ…。

第6話 傭兵団

俺のフェンリルの改造が終わった。見た感じは少し肩周りがゴツクなってる。これが可動式の機構だろう。

だが、これで前方の敵なら止まらないで撃てるようになった。

さっそく試運転をしてみる。キャノン砲が可動式になったが、あまり違和感がない。魔導機関をチューニングしているせいか俺の魔力が高いせいなのかはわからん。

「重くなった感じがしないですね」

「そうだろう、この機構にはずいぶん手間をかけたからな、動かす範囲も狭いから重さも抑えられたんだ」

このバセルカムのおっさんなにげにすごいぞ。

「私のフェンリルも同じようにできないかしら？」

「いいぞ、同じのならばすぐ作れる」

アヴェルアーカのフェンリルも可動式になった。

「私のフェンリルは少し鈍くなったみたい。やっぱり魔力が違うせいかしら。でもこれは確かに便利ね、このまま使っわ」

この後、またアヴェルアーカがソニックタイガー10体の討伐クエストを受けようとした。俺が止めた。

ヒドウンウルフよりさらにソニックタイガーは速いらしい。どんだ

け速いんだよ。またアヴェルアーカを囿にする羽目になる。意識を奪えるのはあいかわらず3体までなのだ。また修理することになるのは御免だ。

無難に護衛クエストを受けることにした。俺としてはジャイアントと戦いたいが、そのクエストはなかった…。

傭兵団シュバルツヴィンドを率いているボルベルクというハイヒューマンのおっさんと合流した。

「ボルベルクじゃないの、久しぶりね」

「おう、久しぶりだな」

「あなたのところだけで護衛クエストは受けられるんじゃないの？人を集めるなんてどうしたのよ？」

「それがこないだのドラゴン退治に参加した団員がみんな武装獣を壊しやがったんだよ」

どうやら、ドラゴンに3機の武装獣を破壊されたらしい。1人は死んだそうだ。傭兵団には2機の武装獣しか残っていない。代わりに戦車がある。4両だ。ネオレオパルド5A6というらしい。可動式キャノン砲を2門積んでいる。

これもフェンリルと同じレックス製だそうだ。

武装獣2機はあのアサルトウルフだ…。お手頃価格の武装獣らしい。まあ、あの性能だしな…。

「危ないんで止めたんだが、血の気の多い奴らでな。ドラゴンと戦うって聞かなかったんだよ、あげくに死人まででる始末だ、2人は

今病院で療養中で武装獣が足りないんだよ」

「このセージが、ドラゴンを仕留めたのよ。私も戦闘には参加したわ。あれは酷い戦いだっただわね、参加した武装獣は半分が破壊されたわ」

「お前がああ黒いエルフか！ギルドで噂になってるぞ、魔法が得意なんだってな」

「初めまして、セージって言います。よろしくお願いします」

「これは頼もしい助っ人が来てくれたな、ありがとよ、アヴェルアーカ」

噂には嫌な思い出しかないんだが…。

「クエストの内容は聞いているか？」

どうやら隣のメクレンブルク州のシュヴェリンまでいかないといけないらしい。けっこうな距離だ。ギルドがあるのはシュレースヴィヒ州だ。

途中で機人や亜獣、盗賊と戦わなくてはいけない。

護衛対象は商隊だった。結構な規模だ。隊長はヒンデンブルグと名乗った。エルフだ。

「名高いシュバルツヴィンド傭兵団に護衛されるのなら安心だ。よろしく頼む」

「こちらこそよろしく頼みます」

ボルベルクが営業スマイルで対応している。

「この先の森には、ソニックタイガーの群れがいると最近聞いてますから迂回しますよ」

あれがいるのかよ！襲われたらあつという間にやられるぞ。特に戦車は駄目だろ。

戦車はさすがに魔導機関により物理防御魔法シールドが展開できるようにはなっているそうだ。

だが常時発動はできない。

森を迂回すると待っていたかのように盗賊が襲ってきた。武装獣は3機だ。

俺はバレットを撃って先頭の1機を倒してるうちに、戦車が残り2機を倒せたようだ。

「この機体はもっていけないの？」

一応聞いてみた、近くの街まで持っていけば金になりそうだ。

「これはガトリングウルフだわ、アサルトウルフの1世代前の機体よ。あまり金にはならないわね」

駄目なようだ。まあ、自分の目的はレベルアップだ、金は二の次だ。

「うちの傭兵団には武装獣が足りないんだ、これでもいいから戦力にしたいんだがな」

ボルベルクが隊長と話しているようだ。アサルトウルフよりも駄目な機体って使えるんか？

結局、修理して使うことになり武装獣は3機増えた。どうやらドラゴンの被害で傭兵団の戦力に困ってるようだ。

ガトリングウルフは名前の通り巨大なガトリング砲を背中に1門付けている。そのため、フェンリルよりも一回り大きい武装獣だ。これでも一応スコープオンと戦えるらしい。

よく見るとGAU-8に似ている。アメリカ軍の攻撃機A-10で有名なアヴェンジャーだ。それを武装獣に載せられるようにアレンジしたようだ。アヴェンジャーは漢のロマンだ。ちよつと羨ましい…。

武装獣が増えたせいかその後は盗賊は襲って来なかった。俺の探知でヒドウンウルフを見つけたので、その森を迂回しながら進んでいた。今は、メクレンブルク州で野営をしている。明日中には目的地に到着するだろう。

「お前はかなり強そうだな、攻撃魔法だけじゃなく、あの探知魔法も便利だ。うちに入らないか？」

なんか、あれから野営するたびにボルベルクに誘われている。だが、入る気はまったくない。

「今はアヴェルアーカと一緒に組んでるから困ってないんですよ、つてずつと言ってるんですけど…」

「うちで一番腕のいいやつが死んじまったんだよ。性格はちょっと難しいところがあったが使えるやつだったんだよ」

「俺はギガスと戦いたいんですよ、傭兵団でギガスと戦ってくれますか？」

「それは無理だな、ひどい損害を受けるクエストは避けてるんだ」

「それじゃあ、傭兵団に入るのは無理ですね」

入る気ないんだ、分かってくれ。

翌日、目的地のシュヴェリンに着いたので、そのギルドによつた。

騒ぎになっていた…。

第6話 傭兵団（後書き）

このボルベルクのおっさんは今後も活躍？します。

第7話 緊急招集

どうやら街にドラゴン型機人が向かってきているようだ。

やはりというか、スコーピオンを連れている。

緊急招集が冒険者にかけられた。これは無視するとペナルティを食らうやつだ。俺はもとより参加する気だった。

20機の武装獣が集められた。ボルベルクも苦い顔をしながら参加している。

そのうち14機が前衛で、6機が後衛だ。

前衛にはロキが2機いた、性能はフェンリルと同じくらいらしい。あとは3機が例のガトリングウルフだ。

7機があのアサルトウルフだ…。

後衛は4機がキャノンタランチュラ、2機がさらに重武装のヘヴィタランチュラだ。キャノンタランチュラは8門、ヘヴィタランチュラは12門のキャノン砲が搭載されている大型武装獣だ。

俺はまたもやフェンリルのキャノン砲に徹甲榴弾を装填した。4門で40発だ。

アヴェルアーカは貫通弾だ。4門で72発だ。

キャノン砲を可動式にパワーアップしているので前より楽に戦える。

ギガスはいつたどこにいるんだ、やつとも戦いたい…。

20機の武装獣は補給車2台、トレーラー4台を連れて街外れに移動した。

今度は、いきなりドラゴンとの戦いだ。俺は喜んでフェンリルをドラゴンに向かって走らせた。

ドラゴンはジャマーを吐き出しながら炎の弾を撃ってきた。

徹甲榴弾を撃とうとするとスコープオンが邪魔をする。うざい、やっぱりスコープオンがうざい。

俺はバレットでスコープオンを倒していく。3つのガトリング砲が唸りをあげてスコープオンを駆逐していく。使えるじゃん、アヴェエンジャー。俺は徹甲榴弾をドラゴンのエネルギーサークルに向けて撃ちこんでいく。

やはりいい。動きながら撃てるのは楽なのだ。炎の弾を避けながら撃ちまくる。

後衛のタランチュラもエネルギーサークルに向けて攻撃している。

さらに徹甲榴弾を撃ちこんでいく。だんだん紫の光が暗くなってきた。弱ってきている。

前衛の被害も出ているようだが、スコープオンは減っている。

そろそろだ！ギガバレットの2連発だ！ドラゴンは沈んだ。残りのスコープオンを片付ける。

被害は前衛のアサルトウルフが4機だ。死者は3人だった。

ボルベルクの傭兵団の機体が1機やられたようだ。渋い顔をしている。傭兵団に死者はでなかったようだ。が損害を出したのが痛いよう

だ。

俺はレベルが3つあがって、レベル137になった。

第8話 サウスランドの戦い

「今回は、私もほとんど無傷でドラゴンを倒せたわ」

アヴェルアーカは機嫌がよかった。前はかなりボロボロに機体を痛めからだろうか。

「味方の被害も前回よりは少なかったわ、気分がいいわね」

「俺の方は被害が出たんだよ、全く、散々だ」

ボルベルクは愚痴を零していた。ここはシュヴェリーンの酒場だ。

「報奨金が出たじゃない？あれじゃ直せないくらい武装獣が壊れちゃったの？」

「報奨金が出たとしても丸々は使えないんだ。うちは人数が多いんで維持費が嵩むんだよ」

「前回のドラゴンとの戦闘で壊した武装獣の代わりに手に入れなきゃいけないしな、入院しているやつ武装獣も用意しておかないと人が余っちゃう、年中武器を手に入れるのにお金を回してちゃ俺のところにはほとんど利益は残らないのさ。今回も団員には羽振りがいい振りして報奨を全員に出したしな」

「ガトリングウルフが手に入ったじゃない」

「ああ、あれは助かったよ。手が空いてる団員が減った。本当は戦車なんかじゃなくて武装獣を揃えたいんだ」

「団長も大変ね、その点、私は気楽でいいわ」

「お前の相棒は本当に腕がいいな。ドラゴンをやっちまう程の冒険者なんてそうそう見つけれないぞ、うちにくれないか？」

「それは無理ね、一人で何人分も働いてくれるのよ、手放せないわ。まあ、あなたが困ったらまた助けてあげるわよ、その分、お金は貰いますけどねw」

俺は金にはあまり興味が無い。ただ、戦えればそれでいい。アヴェルアーカは戦闘好きなので気が合う。

「アヴェルアーカはこれからどうするんだ？よければまたうちで働いて貰いたいもんだな」

「このギルドでクエストを見つくれるわよ、いいのがなかったら手伝ってあげてもいいわよ」

俺は酒場を出て宿屋の近くで双剣を振り回していた。武装獣に座っている体が鈍る。運動してから寝るのは心地良い。

二度の狂戦士化によって剣術も変わっていた。踊るように滑らかに剣を走らせる。ダンスをしている気分だ。

最も、この世界には俺と剣で踊ってくれる相手はいない…。そのうち、ヒドウンウルフと踊ってみるか。

「相変わらず見事な剣術ね、そんなに剣術を鍛えてなにに使うのよ」

アヴェルアーカが宿に帰ってきたようだ。そりゃこの世界じゃ剣より銃を使うだろう。剣術、それも双剣なんて意味ないな。

「ヒドウンウルフ相手にこれで戦ってみたいね、昔はあんなのと戦ってたんだよ」

「普通は剣で戦う相手じゃないわよ、あんなのと剣で戦うなんてあなたは相当の戦闘狂みたいね」

そりゃ、狂戦士だしな。加護の力は今でも感じる。スサノオの神はこの世界にも実在するのかな。日本はなくなってしまったが。

「明日からは南に移動するわよ、サウスランド連邦共和国が機人に押されているみたいなの、冒険者を集めてるわ」

サウスランド共和国は、フランスと南欧を合わせたような国だ。押されているということはギガースもいるかな。楽しみだ。

宿屋で一泊して、俺たちは南に向かった。傭兵団も一緒に向かうようだ。儲かる仕事のようにだな。

「ようセージ、しばらくは一緒に戦えそうだな」

ポルベルクは元気になってる。まあ、辛気臭くちゃ団長は務まらないだろう。

「今度、うちのヤツを鍛えてくれよ」

「俺は手加減できないんですよ、相手を潰しちやいますよ」

「そりゃ困るわな、アヴェルアーカに相手をして貰うか」

双剣ならともかく武装獣で戦うとなると相手を潰すしか戦い方を知らないんだよ。

「私は嫌よ、ただ働きはしない主義なのよ」

とにかく南下していく。

フランス南部の途中で森を通るときにやつを探知した。ヒドウンウルフだ。3頭いる。

「ちょっと戦う相手を見つけた、双剣で戦ってくる」

俺は武装獣を飛び降りて、ヒドウンウルフに向かっていった。グラビティフォースを使う。風が心地良い。

久しぶりに炎の双剣で戦ってみたくなったのだ。だが時間もないさつさと終わらそう。

3頭と戦い2頭を仕留めたところで残り1頭の意識を奪い、グラビトンで殺した。

牙を剥ぎとって武装獣に戻った。ヒドウンウルフを狩ると報酬がでるのだ。

しかし、ヒドウンウルフも歯ごたえがない。2頭で飽きた。

「ヒドウンウルフが3頭いた、牙を取ってきたよ」

「呆れた、本当に双剣で戦ってきたの？相手はヒドウンウルフよ、まあ、その牙があれば修理代くらいは稼げたわね」

「ヒドウンウルフ相手に剣で戦うとは聞いたことがないな」

ボルベルクも驚いているみたいだ。

俺たちは南にそのまま向かった。

サウスランド共和国の最前線、ルーゴの街についた。

ギルドに入ると賑やかだ。冒険者を相当集めているようだ。

戦場はア・コルーニヤのようだ。クエストを受け取り戦場に向かった。補給は無料で受けられるようだ。食事もある。クエストとしてはいい待遇だ。

俺は相手が分からないのでフェンリルのキャノン砲に貫通弾を装填した。

戦場にはスコープオンとジャイアントがいた。そして、マザーシップが飛んでいた。

サウスランドの兵隊と冒険者達がスコープオンとジャイアントを狩り立てているが、次々とマザーシップが機人を投下しているのだ。

俺はマザーシップのエナジーサークルにアーマーピアシングハイエクスプロッシブを撃ち込んだ。魔法なら届く！次々とアーマーピアシングハイエクスプロッシブを撃ち込んだ。1機撃墜したがMPが底をついた…。

マザーシップ固え。

しかし、まだ2機いる。これは確かにきりが無い。

とりあえず、キャノン砲でジャイアントを仕留めることにした。

スコピオンとジャイアントを駆り立てる。ジャイアントに集中したいがスコピオンが邪魔をする。これはうざい。

なんとか補給しながら4体目のジャイアントを倒したところで、でかい武装獣がでてきた。巨大な亀だ。

ヘヴィガンズナイパータートルというらしい。背中にレールガンを搭載した超大型武装獣だ。サウランドが用意したようだ。マザーシップを撃ち落とす仕事をしてくれるらしい。

こいつを守るのが冒険者達の仕事になった。

大亀に近づくスコピオンを駆逐する。ジャイアントも寄って来た。徹甲榴弾に変えればよかった…。貫通弾を撃ちまくる。武装獣の集中砲火を浴びたジャイアントが沈んでいく。

やがて、マザーシップが1機撃墜された。あと1機だと思ったらまた2機やってきた。3機に戻った。

戦闘は続いた。夜になっても大亀を守る仕事は続く。冒険者達が交代で戦うことになった。

兵隊たちもスコピオンとジャイアントを始末し続けている。

これは確かに冒険者をあちこちから呼びつけないともこの拠点を維持できない。

脱落していく武装獣もいるが応援がやってくる。

休んでは戦う日々が1週間続いた。アヴェルアーカのフェンリルは1週間もたなかった。今は修理中だ。修理代もサウスランドが出してくれている。

大亀も1週間もたなかった。空中から攻撃してくるやつが出てきたのだ。ホークアイという機人だ。空中からレーザーを撃ってくる。フェンリルで撃ち落とすが、次から次へとホークアイもやってくる。ホークアイの弱点は装甲の弱さだ。貫通弾の一撃で沈む。だが、マザーシップが次々と投下してくる。まじできりがいい戦いだ。

大亀も次々と投入されているがやってくるペースが遅い。どうやら俺たちが来る前から大亀は投入され続けていたらしい。後方で大亀を生産しては投入している状況だ。

マザーシップを落とすのは大亀に任せている。俺は大亀を守る仕事に集中している。バレットでスコープオンやホークアイを片付ける。ジャイアントはキャノン砲を撃ちまくる。

2週間目も同じ状況だ。冒険者の応援がくるが脱落していく冒険者もでる。毎日1日中戦えばそのうち体がもたなくなる。アヴェルアーカは復帰しては、修理するのを繰り返している。大破しないだけでも優秀だ。

3週間目も同じ状況だ。一体いつこの戦いは終わるんだ？ギガースやドラゴンがこないのがせめてもの救いだ。あれを投入されたら戦線が崩壊するだろう。

1ヶ月を過ぎたところだろうか、アヴェルアーカのフェンリルがとうとう大破した。新しいフェンリルで出撃してきた。大破しても1ヶ月戦ったからだろうがサウスランドから支給されたいらしい。もちろん、キャノン砲は2門しかない。ノーマルのフェンリルだ。あの傭兵団は撤退したようだ。

2ヶ月で戦いは終わった。マザーシップは飛んで来なくなった。俺は2ヶ月戦い続けたということで報酬をたんまり貰った。これだけで武装獣が2機は買える。

数えきれないくらいジャイアントを倒したがレベルは30あがっただけだ。ジャイアントではこれ以上経験値を得られないのか。レベルは167になった。MPも2倍近く増えたようだ。マザーシップを2機撃ち落とせるようになっていた。

アヴェルアーカは俺の4分の1くらいの報酬を貰ったようだ。修理を繰り返していたのと既に1機フェンリルを支給されてるからだろう。

俺たちはネロデイの街に戻った。

「フェンリルの改造費用を入れたらトントンね、でも歯ごたえがあったわ」

「確かにあそこは楽しめたな、また戦場があつたら行きたいくらいだ」

ネロデイの整備工場でアヴェルアーカのフェンリルは半可動式の4門に戻っていた。

きつい2ヶ月だったが、まあ楽しかった。

俺のフェンリルはやられはしなかったが2ヶ月戦い続けたのでオーバーホールをした。

アヴェルアーカは修理で休みがちだったが、機人を倒しまくったおかげで前より魔力があがったようだ。

半可動式のフェンリルでも重さを感じなくなったと言っている。

ボルベルクは先にネロデイに戻っていたが赤字だと嘆いていた。

「あなた達は先に帰ったから分らないと思うけど、私たちはあの後大変だったのよ」

「こっちは武装獣と戦車がやられて赤字になったんだよ、慈善事業でやってる訳じゃないぞ」

武装獣を大破させたようだが、サウスランドから支給はされなかったようだ。戦い続ければ支給されたそうだが、死者が出たので断わったそうだ。

「どのくらい被害がでたのよ？」

「ガトリングウルフ1機が大破で、戦車は2両やられた。両方ともパイロットは死んだよ」

むしろ、あの戦場で生き残った戦車がいるのがすごいよ。俺だったら戦車であそこには絶対行かないね。

「お前たちはあの戦場でよく2ヶ月戦い続けたな、普通なら途中で

引き上げるよ、さもなきゃ死んでるぞ」

「私たちはあそこで戦うのが楽しかったからよ、楽しめなきゃ2ヶ月も戦い続けられないわよ」

「お前たちは全く狂ってるな、臆病になることも生き延びるには大事なことなんだぞ」

「私たちはこれでいいのよ、また討伐クエストでも受けてくるわ、ボルベルクはどうするの？」

「1ヶ月は怪我人もでたから休業だよ、でも団員を養わないといけないんでそう休むこともできないんだよ」

第8話 サウスランドの戦い（後書き）

一話を割愛することにして、最後を削りました…。

第9話 スンツバルまでの護衛

俺たちは、ネロディの街に戻って次のクエストを探していた。

できれば、討伐系がいいな。

そこでボルベルクに会った。

「ここだとなんだから、まあ、酒場に行こうぜ」

どうやら、俺達に用があるらしい。まあ、だいたい用件は分かるんだが。

要するに、戦力が足りなくなったので手伝って欲しいようだ。

あれから中古で2機のガトリングウルフを手に入れたらしいが、それだけでは足りないようだ。

サウスランドが戦線で大破して置いていった武装獣を修理して大量に売りだしたらしい。それで安く買えたそうだ。

1機がアサルトウルフで、4機がガトリングウルフ、2両がネオレオパルドという戦力だ。質より量を優先して戦力を補充したようだ。

スコープオンや武装獣を相手にするならアサルトウルフよりガトリングウルフの方が強力な気もするが、ジャイアント以上の機人ならやはり、アサルトウルフってところだろう。

どうも、今回は要人警護ってやつらしい。

よくあるパターンで狙われていたりするんか？どうもそこらへんが分からない。

目的地はモスコヴィヤ連邦共和国のスツバルだそうだ。

モスコヴィヤは東欧、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、西ロシア周辺を合わせたような大国だ。

ここも機人との戦闘をしている。機人はスカンジナビア半島南部を支配して拡大を狙っている。

スツバルはその最前線の街だ。ここに行くまでには機人との戦闘が想定される。それで助けを求めてきたようだ。

大国の要人だけあって報酬は武装獣が買える値段を提供するところも胡散臭い。それも2機だ。

空飛ぶ機人、ホークアイがいるので航路はない、陸路に行くしかないようだ。

俺たちは2台の補給車を加えて出発した。

意外とやっかいなことに気づいた。最短距離ということでは海沿いを旅をしているため、機人に遭遇するのだ。

イングランドかスカンジナビア半島からマザーシップを出してると思われる。これで武装獣2機は安すぎないか？

今は、東欧のリトアニアがあったところまで来ている。

既に、4度機人の群れを突破しているのだ。先に進むにつれてスカンジナビアが近づく。さらに遭遇することになるだろう。

絶対、ボルベルクは騙されたな、実際に苦い顔をしている。傭兵団の武装獣は軽症で済んで簡単な修理をして進んでいるが、そのうち脱落するのが出てきそうだ。バルト地帯を抜ける場所に奴らがいる。スコープオンとジャイアント3体だ。

俺とアヴェルアーカは武装獣をジャイアントに向けて走らせている。露払いはガトリングウルフに任せた。

スコープオンを駆逐するにはガトリングウルフの方が向いているのだ。

早く倒さないと傭兵団に被害が出てしまう。ギガバレットを使うことにした。俺が2体を相手にして、アヴェルアーカが1体に徹甲榴弾を撃ちこんでいく。2人での戦いも慣れてきた。阿吽の呼吸だ。

バレットでスコープオンを潰しながらジャイアントに近づく、エナジーサークルが見えた。ギガバレットを撃つ。

1機沈めた。俺を強敵だと思ってか、スコープオンが寄ってくる。うざい、相変わらずうざすぎる。

バレットを撃ちまくる。アヴェルアーカの方は順調に徹甲榴弾を撃ちまくってるようだ。俺にスコープオンが集中している…。

ガトリングウルフはなにしてた！と思いつつスコープオンを駆

逐する。道が開けた。ジャイアントにギガバレットを撃ち込んだ。1機沈んだ。残り1機だと思つたら、アヴェルアーカが沈めたようだ。残つたスコープオンを貫通弾で潰しまくる。俺のフェンリルは4門あるので2門を貫通弾、残り2門を徹甲榴弾にしているのだ。

結局、ジャイアントを潰した後にガトリンググウルフが出てきた…。あてにならねー。信じた俺が馬鹿だった…。

俺たちは、バルト地帯を抜けて、西ロシアに出た。

俺たちはクラスノダールで一泊している。

ポルベルクは愚痴をこぼしていた。

「こんなきつい依頼だなんて聞いてない！これじゃ、討伐依頼みたいなもんじゃねーか！」

目的地を聞いた時点で気づけよ。今更おせーよ。

「これじゃ、報酬が安すぎるんじゃないの？」

「もうこの金額で受けちまったんだよ、ギルドで受けたから今更変えるなんてできねえんだよ」

「あなた絶対騙されてるわよ」

「ああ、騙されたよ…この調子じゃ今回は赤字だ。やってられねー。」

ポルベルクは飲んで憂さ晴らしをしたいらしい。もちろん、付き合

う義理はない。

「明日も朝早いんだぜ、俺たちはもう宿に帰るよ」

やっと、カレリアまでやってきた。もう、フィンランドは目の前だ。

ここまででガトリングウルフが1機大破している。あれから3度機人の群れを突破している。ジャイアント付きでた。

俺にばかりスコープオンが寄ってくるので試しに押し付けたら潰れたの言えない。パイロットは怪我をして動けないので近くの街に置いてきた。

もちろん、ギルドの依頼をキャンセルもできるが傭兵団の信用は落ちるだろう。板挟みってやつだ。

まあ、俺には関係ない。俺は戦えればいいので丁度いい憂さ晴らしのできるクエストだ。付いてきて正解だった。

このままラツピに向かい、そのまま南下するのだ。はっきりってここは寒い。まだ冬でもないのにな。

俺は暖房の魔法を作った。ウォームだ。あつたけー。

フィンランドを目の前にして戦闘が起こった。もう、ジャイアントが群れている。ここまで来ると4門とも徹甲榴弾にしている。撃ちまくりだ。正直楽しい。アヴェルアーカも楽しんでいるようだ。

ここでガトリングウルフがまた1機大破した。傭兵団にはあと3機

しか武装獣がない。俺とアヴェルアーカにはそれを気にする余裕はない。機人を倒さないと進めないのだ。

フィンランドを突破する頃にはボルベルクはもう諦めているようだった。頭を抱えているが俺は気にしない。

「このままじゃ、傭兵団は全滅してしまう…」

知らんがな、このままどうやって戻るのが聞く気にもならない。

「次の街でこのクエストをキャンセルする」

「もう、スウェーデンに入ってるのよ、目的地は目の前じゃない」

そうなのだ、判断するのが遅すぎる。もうすぐスツバルに着いてしまうのだ。

「わかったよ、このまま行けばいいんだろ」

スツバルの街に着く前に俺たちはドラゴン型機人を見つけてしまった。

既に、戦闘が始まっているようだ。モスコヴィアの武装獣たちが戦いを挑んでいる。

どの道、ドラゴンを突破しないと目的地まで行けないのだ。

俺たちも行くしかなかった。ドラゴンが勝てば通れないのだから。

俺は、ドラゴンにギガバレットを撃ちまくった。炎の弾をよけながら撃ちまくった。最初から全力だ。

アヴェルアーカはジャイアントを相手にしているようだ。

気がつけば傭兵団には1機しか武装獣が残ってなかった。アサルトウルフだ。そして、ドラゴンは沈んだ。

やっと、俺たちはスンツバルに着いたのだ。報酬は全部傭兵団が受け取るようになった。あまりに可哀想だったのだ。

帰り道にも武装獣が必要なので、ボルベルクはモスコーヴィア製最新武装獣ロキを買った。

ドラゴンを倒した報酬もあって3機補充して、4機の武装獣をもつことになった。

「結局、戦力は前よりあがったじゃない」

「怪我人がでてるんだよ、ここでしばらく休養させないと武装獣を動かせられないんだよ」

1ヶ月後に俺たちはスンツバルを後にした。

カレリアによって怪我した仲間と合流して遠回りして帰ることになった。

さすがに来た道を通って戻るのは機人と戦うことになるのでボルベルクが嫌がったのだ。

そうして、俺たちはネロデイの街に戻った。

第10話 ギガス(1)

なんでこうなった？

俺たちはサウスランド共和国の南部、グラナダへ撤退中である。

サウスランド共和国とレックス連邦共和国との共同による機人最大の街ジブラルタルの攻略に俺たちは参加していた。

そして、アヴェルアーカのヘルハウンドも破壊され、俺のヘルハウンドに乗せて絶賛、逃亡中である。

くそっ、またホークアイがレーザーを撃ってきやがった。バレットで撃ち落とす。

話は、3ヶ月前に戻る。

ネロディの酒場で俺は、アヴェルアーカと飲んでいた。

「まだ、ギガスと戦ってないんだけどやつはどこにいるんだ？」

「いるところなら知ってるわよ、ジブラルタルね」

そう、あの有名な要塞ジブラルタルだ。

「うちの傭兵団は行かないぞ、最近はうまくやってるんだ。スントバルの二の舞は御免だ」

ポルベルクはその後、護衛任務を繰り返し、さらに武装獣を2機増やしたそうだ。ガトリングウルフだ。

「あそこはマジでヤバいんだよ、お前たちもやめたほうがいいぞ」

「でもレックスとサウスランドの軍隊が南に動いてるって噂は聞いてるわ、あそこを抑えられると地中海が抑えられたのと同じなのよ」

「モスコヴィアは動かないのか？」

「あそこは、年中、スカンジナビアで戦闘中よ、他に兵を回す余裕はないわね」

俺とアヴェルアーカは、あの寒いスカンジナビアで戦闘するのは嫌なので参加してない。北にあるラップランドなんて北極圏だ。

モスコヴィアには寒いという印象しか残ってない。それに今は冬だ。

モスコヴィア製の武装獣は暖房完備だそうだが、俺のフェンリルにはそんなのは付いてないし付ける気もない。

寒いなら暖かい所に行けばいい。サウスランドなら暖かいだろう。

俺とアヴェルアーカは、とりあえずサウスランド最南端の拠点、グラナダに向かった。

グラナダは騒ぎになっていた。2つの国の軍隊が集結中なのだ。

まず、情報を集めてみた。戦争開始は1ヶ月後だということ。

ギガースの大きさも分かった。その高さは500mに達するということだ。ドラゴンでさえ250mだったのだ。ちなみにジャイアントの高さは100mだ。

さらに、ギガースはマザーシップのように飛行機人ホークアイを吐き出しまくるのだ。タチが悪すぎる。

俺たちのキャノン砲では500mという高さでは威力を発揮できない。さらにギガースの防御力は非常に高いのだ。全可動式の高威力なスナイパーキャノン砲が必要だ。

そこでフェンリルよりも大型のヘルハウンドという武装獣を買うことになった。

機動力を重視した対巨大機人向けの武装獣だ。その値段は武装獣としては高価なフェンリルのさらに4倍だ。

サウスランドの戦争で儲けた分とそれまで稼いだ分を合わせれば十分買える金額だった。

だが、今回の戦いに参加するという条件で半額にして貰えるというのだ。

これほどうまい話はない。俺たちはその条件を飲んだ。

ヘルハウンドは、機動力をあげるために4機の高性能な魔導機関を積んでおり、可動式ヘヴィスナイパーキャノン砲を2門搭載している。両肩には可動式のキャノン砲が2門だ。

防御力としては魔導機関による物理防御魔法シールドを4つまで並行展開可能だ。これは常時展開できない。攻撃を予測して展開する。ヘルハウンドは対ギガース用として開発された武装獣なのだ。

高価な買い物だったが、ギガースとの戦いには必要なものだ。

ギガースの攻撃は炎の爆発弾だ。その威力はブラストに匹敵する。ドラゴンの炎の弾よりタチが悪い。

シールドを張りまくる必要がある。ヘルハウンドなら自分で魔法を発動するより効率的にシールドを展開できる。

まさにうってつけの機体なのだ。

まず、試運転をしてみた。大きさに見合わない速度と俊敏さだ。だ
てに4機も魔導機関を積んでない。それも高出力型だ。フェンリル
と比べても申し分ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313y/>

ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった...

2011年11月21日21時53分発行